

リリアン・ギッシュに例えられるのは、ドナルド・ラックマンにしてみれば、嬉しくなかつたろう。もっとも妻のデビーなら嬉しがるどころだ。いずれにせよ、二人とも、誰か暗い男が、暗い部屋で、暗い考えを巡らせていたなどと、知る由もない。ドナルドがやろうとしていたのは、彼のボスの意向に沿った銀行を捜すことだ。頭取のフォアマンからは、最初のはのんびりやれと言われている。直接にはあたるな。チュウリツヒがいい。ルガーノは止める。チュウリツヒではスイスの全銀行の動きが分る。それに、チュウリツヒでは誰も秘密は漏らさない。だからラックマンはチュウリツヒに行ったのだ。

国によつては、銀行の内情を調べるのは決して難しい事ではない。しかしスイスではそうはいかない。スイスの銀行は怪物だからだ。勿論普通の銀行の仕事はスイスの銀行でもやる。預貯金、小切手、融資。しかし、スイスの銀行は、株の売買までやるのだ。スイス・フランで、アメリカのドルで、ブラジルのクルゼイロで、イランのリアルで。それも公式のルートでやるだけではない、灰色の・・・いや、全く暗闇のルート・・・つまり、闇市でもやるのだ。だから顧客も多岐に渡っている。スイスの普通の主婦、亡命キューバ人、アメリカ本国で不当な税金を取られるのをなんとか躲(かわ)そうとしていた在スイス・アメリカ人。スイスの銀行は保険会社を持っていたりする。いや、時計会社だつて、軍事武器の会社だつて、海運会社だつて・・・いや、時にはイランに巨大な銀の鉱山だつて持っていたりする。

普通、銀行には限らない、何か会社を買収しようとする時に、まづやらなければならぬのは、財務諸表を重箱の隅を爪楊枝でつつくように調べることだ。こうした調査は、監査事務所依頼しても、何週間もかかる。書類が多い時には、何箇月もかかることがある。しかしスイスでは違う。スイスでは、一人で一時間もかければ充分だ。何故なら、スイスの会社で発行される財務諸表はC I Aの年次報告と同程度にしか役に立たないからだ。会社ではなく、スイスの銀行で発行される財務諸表に到つては、殆ど情報量はゼロなのだ。

ドナルド・ラックマンも、この財務諸表による調査が無益なことにすぐ気がついた。シリリア・アメリカ国際銀行の簡単な貸借対照表を手に入れていたが、これから得るものは何もなかつた。そこで彼は第二段階に進むことにした。噂によつてその銀行の全体像を作ろうというものだ。特に、「こちら7はこれだけ知っているが、そちらはそれ以上のことを知っているか？」と誘い出して情報を得るのだ。アメリカではこれはよく行われるやり方で、大抵誰でも快く協力してくれる。「僕はあそこの会社の競争相手、これこれを知っているけど、君は他に知っているか。」「あそこの社長は酷い呑んべえだ。重役で何か噂を知っているか。」「あの銀行の一番の得意先はどこだと思つが別のところかな?」「あの銀行に金を貸す気になつたとする。君はいくらまでなら貸せる?」「あの銀行をそっくり買収しようと思つ。いくらでなら買つ?」「百万や二百万ドルは誤差に入れてき。いくらだ?」といった具合だ。

しかし、これもアメリカとは違って、スイスではうまくい

かない。特にがめつい小鬼の國チユールヒでは駄目。ここでは「今何時ですか？」という質問でさえ疑いの目をもって見られるんだから。

ラックマンにもようやく難しくさが分つてきた。有能な人物が相手をしてくれない、という訳ではないのだ。なにしろ、全米第九位の大銀行の頭取であるジョージ・フォアマンの紹介状があるラックマンなのだ。彼を無視するわけにはいかない。しかし、だからといって、彼等が腹を割って本当の話をしてくれるわけではない。ラックマンの最後の切り札はスイス総合銀行のウォルター・ホーファー頭取だったが、ほどなく彼がチユールヒにいないことが判つた。パリに居るらしい。会つてくれたのは、最高幹部の一人、博士号を持つケラーマンであった。「それはそれは、喜んでお会い致しますよう。」との御挨拶。「そうでした」とケラーマン。「フォアマン頭取からの紹介状を頂戴しておりました。頭取には昨年サンフランシスコでお目にかかりましてね、御親切にして頂きました。あの街は本当に素晴らしいですね。ところで、御行とは預金を持ち合つておりましたね。もうずいぶん前からになります。現在の残高は大した額ではないんですが、もちろんもつと高額になって当然なのですよ。特にチユールヒでは、この事ですか？ お話というのは。」

「いいえ、ちよつと違つんです。」

「ああ、そうですね。ええ、ええ。それじゃ如何でしょう。昼食でも御一緒しながら、もう少し詳しいお話を伺うというのは？」

という次第。以下は昼食時の会話。

「さてと、ケラーマンさん、ウィンナー・シュニッツェルの最後の一切れを平らげると、ラックマンが話を切り出した。「実を申しますと、スイスのある銀行について、ちよつとお伺いしたいと思つて参りました。」

「はあ？」

「ええ。その銀行はルガーノにあるんです。シシリア・アメリカ国際銀行という名前なんですが。」

「ほつ、なるほど？」

「で、どういふ御意見でしょう、重役、お宅様の銀行から見て、この銀行は。」

「ルガーノにありますな、確かに。存じております。」

「ああ、ご存知なのですね？」

「ええ、まあ。」

「ああ、そうですね。それで、例えばの話ですが、この銀行を買つとしたら、評価としてはネットで幾らぐらいのものでしょうかね？」

「ネットで幾ら？」

「つまり、いわゆる不良債権だとか、その類のものをすべて償却したあとの、資本金と積立金の合計ということですが。」

「いや、それはどうも、難しいですね。」

「難しい？」

「そう。どうも、難しいです。」

「分りました。それでは、ほんの感想というので結構ですのお答え頂きたいんですが、「信用」の面じゃいかがでしょう、この銀行は。例えば、銀行間融資の時の融資の上限をどの程度になさつていらっしゃるでしょう。」

「上限ですか。話題にしたことがないですな。」

「そうですね。でも、お取り引きはあるんですけどしょっつ。」

「ちょっと係のものに調べさせなければ詳しいことは分りません。私の受け持ちではないものですか。」

「分りました。全般的な評判ということではどうでしょう？」

「特に悪い噂は聞いておりません。もつとも、いい噂も取りたてて聞こえてくるわけでもありません。しかしこれも・・・」

「受け持ち外で？」

「そのとおりです。」

「この銀行の最新の財務諸表、といっても大雑把なものが、これを見ますと、資産勘定の中の「関連出資」の項目にかなりの金額が計上されているんです。」

「ラクマンは貸借対照表を見せる。ケラーマンは眼鏡をかけて書類を子細に調べる。」

「確かにそのようですな」

「これは普通のことですか？」

「え？ 普通といえますと？」

「こんな形でこんなに多額の投資をするということがありますが」と、

「えーと、「関連投資」の項目のことを仰っているのですか？」

「そうですね」

「それは普通とも、異常とも言えませんが。この項目にはいろんな勘定を含められますので」

「例えば？」

「そうですね。非常に安全なA T & Tの株を買い取る時にも使いますし、何かの工場を買う場合にもこの項目に入れることがあります。まあ、ちょっとリスクの多いケースで使うこ

とが多いかもしれませんが。」

「すると、この銀行のこの場合も・・・」

「まったく想像が付きませんが、何が含まれているか。」

「実は、もう一つ驚いたことが有るんです。」

「ほう？」

「脚注。ただの脚注なんですけど、そこには貸付金を国内向けと外国向けに分けて示してあります。ところが、スイス以外の国への貸し付けの比率が異常に大きい。私にはそういう気がします。」

ケラーマンがもう一度書類を見る。

「そう、確かにそうも言えるかもしれない。でも、まあ・・・」

「ラクマンは書類を鞆にしまっつ。」

「重役、もうひとつだけ聞かせて下さい。この銀行のオーナーは誰なんでしょう？ ヒントだけでもいいですから教えて頂けませんか。」

「いや、それがスイスでは一番答えにくい質問なんです。ご存知の通りスイスでは殆どの銀行の株式、またどんな形にせよ殆どの会社の株式は無記名方式を採用しております。だからオーナーの名前が表に出ることは有りませんが、又有り得ません。だいたい、個人にせよ会社にせよ、ある瞬間を取り上げて、誰がオーナーだとか言ってみても、何の意味もないんです。株主はしょっちゅう変わっているんですからな。」

「でも、株主総会はどうなるんです？ オーナーが出てこないわけには行かないでしょう？」

「そりゃ、当然のご質問です。でもスイスでは株主総会なんていつたって、殆ど誰も出やしないんです。出席するのは弁

護士だけ。その弁護士を操っている人物をお知りになりたいと？」

「それは無理でしょうね。」

「その通りです。」

ラックマンはあきらめて、かばんに書類をしまったあとで言った。

「色々教えて下さって有難うございます、ケラーマンさん。大変お世話になりました。」

「お役に立てて嬉しいです、ラックマンさん。お帰りになったら、フォアマン頭取に是非宜しくお伝え下さい。」

ホテルではデビーが夫の帰りを待つて居た。夫の顔を見るなり、彼女は言った。「またあなた、空振りだったんでしよう。」

「そのとおり」

「それで、これからどうするつもり？」

「それが分らないんだ。」

「もういや。わたし我慢できないわ。こんなろくでもない部屋で。それに一日中一人ぼっちで居るなんて。貴方はいいわ。毎日、豪華なスイスのランチ。でも肥るわね。」

「一日中ひとりぼっちとは何だ。まったく……」ラックマンは思う。「きみの夢だったんじゃないか。ヨーロッパ！スイス！それがたった三日でもうこれか。」

「デビー、この部屋をろくでもないなんて言っんじゃないよ。」

「一日六〇ドルもかかっているんだぜ。」

「六〇ドルね。でもシャワーは出ないし、ヘアコンも無いわ。」

それにコーヒーを飲み、バーに下りると、このバーテンダーたら私のことを変な目で見るの。きっと私のことを商売女だと思っているんだわ。それも嬉しい推測ね。だって、私、商売女だったら、少なくとも何か考えることがあるわ。今私、退屈。退屈で退屈で何もすることがないの。だから、何か考えることがあるなんて、嬉しいことよ。」

ドナルドは妻を黙って見る。四月のスイスでエアコンだ？

冗談じゃない。

「ねえあなた、私、何か変だと思っただけど。」

「何が。」

「買収したい銀行って、ルガーノにあるんでしよう？」

「うん。」

「それなら、どうしてチューリッヒになんかに居るのよ、私たち？」

「デビー、いいか？ こつという問題の場合、慎重第一なんだ。」

ここで聞いて回る方がルガーノでやるよりずっとうまく行くのさ。ここは銀行が集まっているところなんだ。アメリカ人が来たって誰も何とも思わない。ルガーノじゃそうは行かない。アメリカ人が来たとなると、連中の方がこつちを調べる。こつちがあつちを調べるよりも前にね。」

「だからどうしたって言うの？」

「だから、馬鹿なこととはできないってわけだよ。」

「貴方の方よ、馬鹿なことをやっているのは、あなた、銀行を買っただけでしょう？ どっちみち、その銀行のことを直接調べないわけにはいかないじゃない。貴方がやっていることって、電話で女の子を導く（こつち）しているものよ。」

「そんな比喻は当たらないな。面白くもないよ。」

「そうかなあ。当っているんじゃない?」

「わかったよ。じゃ、僕にどうしろって言うんだ?」

「今すぐ荷造りして、ルガーノに行きましょ。」

「駄目だね、デビー、そいつは駄目だ。これだけはいくら君が言っても動かない。僕らはここにいるんだ。」

彼は上着をつかんで立ち上がった。

「貴方、何をするの?」

「昼寝だ、一人で昼寝だよ。」

「じゃ、私はどうすればいいの?」

「読書。買物。その他何でも。」

デビーはロビーに下りる。タイム、ヘラルドトリビューン、プレイボーイそれにドイツ語の絵入り雑誌シュテルンを買う。彼女が部屋に帰ってみると、ドナルドはもういびきをかいてる。三時間後電話のベルが鳴った時もドナルドは相変わらずいびき。ベルで目覚めたが、受話器を取ったのはデビーだった。

「貴方によ」とデビー。「サンフランシスコから。」

ドナルドは受話器を受取る。「三度」はい、分かりました」と答え、電話の脇のメモ帳に数字を書く。さらに二三回「はい、分かりました」を繰り返して、受話器を置く。

「随分丁寧ね。誰なの?」デビーは聞く。「あなたのお母さん?」

「デビー、冗談がきついよ。」

「じゃあ誰?」

「フォアマン頭取だ。」

「へえ?」

「そう。」

「それで?」

「明日出発だ。」

「ひどい。いくら頭取だって、それはないわ! 私たちここに着いたばかりよ。こんな短い間に何が出来たっていうの。奇跡が起せた筈だっていうの?」

「止める、デビー。出発だ。だがな、アメリカじゃない。ルガーノだ。」

やれやれ何とか面目は保てたか。つい彼は、にやりとしてしまふ。デビーの方こそ得意だ。夕食が終るまでに口がすっぱくなるほど言っているのだ。「調査はルガーノですべきだ」と。しかし彼女の言葉は短かった。「ほらごらん、言っていた通りでしょう?」

二人はチューリッヒ発七時三〇分のTEEに乗り、一時間五八分、ルガーノに到着する。真つ直ぐホテル・ヴィラ・カスタニョーラに向かい、予約しておいたスイートルームにチェックイン。ドナルドは早速電話をかける。前日フォアマン氏から言われた電話番号だ。打ち合せはラックマンの部屋で午後五時から。デビーは五時五分前に寝室に引込む。ただしもちろん、ドアをちょっとだけ開けたままにしておく。

五時きつかりにドアを開けて入ってきたのは長身で日焼けした男。スポーツジャケット姿。グローブのように大きな手で握手をしてくる。

「ニック・トッピングです。上着を脱いでいいでしょうな?」

「どうぞ、どうぞ。ハンガーをお持ちしましょう。」

「いや、お構いなく。ここに掛けときゃいい。」

「何か飲み物はいかがですか？」

「いや、結構。あとでなら、多分。坐りますよ。」

「ラックマンは上着を着たまま。銀行マンは皆これだ。」

「私が此処に来た理由をもちろんご存知でしょうな。」

「いえ、正確なところは知らないんです。昨日、本部から電話があつて、ここに来て貴方に会うよう言われて・・・実のところ、それだけなんです。」

「ま、いいでしょう。では、取りあえず自己紹介から。私は

パナマの国際鉱業コンサルタント会社でPR部門を任せられてましてね。」

「なるほど」

「そう。それと、実は私はこのルガーノであんたと同じ物に興味を持つているんですよ。」

「私と同じものにですって？」

「そう。シシリア・アメリカ国際銀行。」

「え？ それは・・・私、聞いていませんが。」

「大丈夫。私の説明を聞けば分かる。」

「どうして興味があるのです？」

「この銀行が持っているある物に関心があるってこと。いやこの銀行が持っていると言つのは推測だし、ひよっとすると、

持っているのは一部だけかもしれない。ただ、そいつは、もしお宅がこの銀行を買収するとしても、多分お荷物になると

思つ。」

「何でしょう？ それは。」

「その事は後回しにしよう。」

「それは、銀行の書類の中にあつた「関連投資」の中に上げられていたものですか？」

「その通り！ いやー、あんた見かけより冴えてる。」

「あの海外からの借金もそれに関係しているんですか？」

「多分そうだろう。」

「あの負債は全部で二千五百万ドル、銀行の全資産の四分の一にもなります。」

「これもその通り！ しかし、さっきもいったように、それはお宅ではお荷物になると思う。リスクが大きすぎる。」

「それ以外の点ではどうですか、この銀行？」

「良い内容だよ。ま、買い物でしょう。」

「売りに出ているら、ですけどね」

「それはそう。その点については、うちの会社であんたの代わり

に気をつけていよう。但し、始めにいくつかチェックしておかなくちゃいけないんで・・・と。よし、明日から始めよう。」

「どうするんです？」

「まずはちよつと一緒に旅に出てもらいます。」

「一緒に旅？ どこへです。」

「クエート。」

「クエート？」

「そう。手続きはみなこつちです。あんたの方は、すぐ出られるようにパスポートとスーツケースを用意しておいてもらいます。」

「ちよつと待つて下さい。何を始めようとしているのか分り

ませんが、私が貴方と一緒にどこかへ行くなんてとんでもない事です。私がルガーノに来たのは銀行の調査に来たのですから。クエートだろつがどこだろつが、私は行くつもりはありませんよ。」

「いや、結局は行く事になるな。」トッピングは続ける。「悪い事は言わない、今すぐサンフランシスコのお宅のボスに電話するんですね。」そして、腕時計を見ながら言った。

「今だつたら、まだベッドに入っちゃいない。丁度つかまる時間だ。」

トッピングは立ち上がる。

「こつちからまた、今夜中に電話する。その時に飛行機の間も。」

ラックマンは驚いて相手を見詰める。相手は陽気に続ける。

「あなたにやっておいてもらいたい事がもう一つある。もちろんボスに電話して許可を得てからのことだが。」

「何ですか？」

「あなたが、クエートのロンドン中近東銀行の総支配人に、明日の午後会えるようにするんだ。ただし私の事は決して言わないこと。もし向こうが奇妙に感じるようなら、ただの御機嫌伺いの訪問だと。ホラ、銀行さんがしょっちゅうやってるあれ。」

「他に何か？」少しいらいらして、ラックマンが聞く。

「いや、それだけでいい。」ニック・トッピングは上衣をつかんで、大きな手で、握手を求めめる。

「じゃ、明日また。今日は飲めなかつたが、こんどは一緒に一杯やれるといいですね。」

そして彼は去る。

ドアーが閉まる。間髪を入れず、デビーが寢室から飛び出て来る。

「ドナルド！ 一体これどついう事？」

「聞いていたんだな。」

「聞かずにはいられないでしょ。あの人の声、湖の向こうからだつて聞こえるわよ。体も大きいの？」

「大きいなんてものじゃないよ。」

「あの人の話、ちよつと変よ。なんだか怪しいわ。」

「怪しい。僕もそう思う。」

「ねえあなた、これ、合法的なの？ 不正はないつていうの？」

「ねえ、デビー、君はフォアマン頭取がどんなに堅い人物か知つているだろつ？ あの人が不正な事件なんかに巻き込まれるとも思つてゐるのかい？」

「うつん、それはないと思つけど・・・わかつたわ。じゃ、クエートへ行きましよう、一緒に。」

「僕は行くよ、勿論。でも君はここに居るんだ。本部は二人で行けとは言つていないからね。」

「いやよ、そんなの。あなた約束したじゃないの、これから何でも一緒にやるんだつて。私は絶対にいや、こんなところに一人ぼつちで居るなんて。チューリッヒの時だつて一人ぼつちだつたんだから。」

「いや、君は一人でいてくれなきゃ駄目だ、デビー。僕がない間に旅行でもどうだ？ 北イタリーだつていいし、アルプスだつていい。こんな場合だ、費用だつて銀行で見つてくれるさ。」

「いやよ、あなた。パッケージツアーなんてまっぴらだわ。どこかに行くんだったら、私の好きなところ勝手に行くわ。自分でアレンジして。」

「そっ、わかったよ。」小さい声で「やれやれ」とつぶやきながらドナルドは答える。

そうして、すぐサンフランシスコへの電話だ。フォアマン頭取は、間髪を入れず電話口に出た。彼の指示はぶっきらぼうでそのものずばりだった。・・・なんであれ、トッピングと一緒に行動すること。この段階では一切疑問をさしはさまないこと。トッピングがベルシャ湾へ行くというのなら、さっさと同行すること。帰ったら報告すること。

「かしこまりました。頭取」

ファーストネームでのやり取りなど、この電話では一切無しだ。

電話が終わっても、デビーは彼の方を見向きもしなかった。その日しばらくたってから、彼は翌日の早朝にクウェートに出発する事を妻に伝えたが、「そんなこと私に何の関係があるの?」というあからさまな態度。俺の留守中、こいつ何をする気だ。まあいい、好きなようにするさ。子供じゃない。自分で考えるさ。トラベラーズチェックに何枚かサインしておいてやるよ。

翌日夜が明けて間もなく彼はそっとベッドを抜け出した。妻を起こすべきかどうか、一瞬迷ったが、まあ止めとけ、と勝手に決める。

彼は短いメモを残した。「電話が通じたら話だが、その時は出先から帰りの予定を連絡する。」それでもやはり、い

ざ寝室を出ようとした時、ドアの隙間から中を覗いてやさしく、「じゃあね。」と囁きかけないわけにはいかなかった。廊下に出た時かすかに声がしたような気がした。

「出て行け、オタンコナス。」
でも、それは彼の思い過ぎだったのかもしれない。

一〇

クウェートという都市はアラブ世界で間違いなく最悪の都市だ。ここにあるビルというビルは、米国ニュージャージー州にあるスタンダードオイル社の文化部からたつぷり報酬を受けているガラス・カーテンウォール派の建築家連中が設計したもばかりだ。この町でのエアコン設備の都市面積当たり密度はマンハッタンとほぼ同じ。キャデラック社製のリムジンの数もマンハッタンと多分同じ。それに「金」。これも間違いなく同じくらいある。銀行が多いのもこれで説明がつく。その数もマンハッタンとほぼ同じだ。

ロンドン中近東銀行のクウェート支店の建物に入った時、ドナルド・ラックマンは緊張していた。何故なら、彼はこれから行われようとしている陰謀の片棒を担いでいるからだ。これを成功させるためには、繊細さ、巧妙さ、そして冷静さが絶対に必要だ・・・これはトッピングから実行計画を聞かされた時にいわれた事だ。あんたの役割はこの銀行の支店長に上手に話をして、アーガ・ファードシという男との関係を聞き出すことだ。

アーガ・ファードシって何者なんです? イラン人だ。そのイラン人がルガーノの銀行とどういう関係があるんです

か？ そのうち分かる。あんたはとにかくそこへ行くんだ。そうして自分の勤を働かせるんだな・・・これがトッピングの思わせぶりの答えだった。

ロンドン中近東銀行のクウェート支店長は、赤ら顔でセイウチのようなひげを生やしており、大きな声で話す男だった。多少の個人差は有っても、スエズ以東に居るイギリス人のお定まりのコースを歩いてきた男。アメリカ人と見ると「Y o u , C h a p s (なあ、お兄さん)」を連発するのがこの手の男だ。ここ湾岸の住民達を「W o g (ここの連中)」と呼ぶのも連中のお定まりの言い方だ。C h a p m o W o gも進化論でいえば同じ進化段階に有ると思っているに違いない事は態度で分かった。この男はクエートにやってきた若いアメリカ人の銀行屋にアドヴァイスがしたくてうずうずしていた。そして、それは大きな声で発せられた。

「いやあ、さかんにいらっしゃいますな、アメリカのお兄さん方(C h a p s)は。あなたもその・・・」

この瞬間ラックマンは割って入った。・・・カリフォルニア・ファースト・ナショナル銀行はクウェートに進出しようなんて考えていません。・・・そうですか、そうですか、それならいいんですがね。と慇懃無礼な同意。ラックマンはかまわず続ける。我々が是非伺いたいのは、最近御行に高額の融資を申し込んだ連中についての御行の評価についてです。ファードーシというC h a p (お兄さん)ですがね。ラックマンはイラン人も例の呼び方のカテゴリーに入れていいものかどうか分からなかったが、これに賭けて見た。そして彼は賭けに勝った。

「いいC h a pです、ファードーシさんてのは。実にいい人ですよ。イランの名門の一人です。名門中の名門。彼個人の名義で五百万。ドル建てです。ポンド建てじゃありません。美人の妹がいるそうですよ。真正正銘の美人。残念ながら、私はまだ会った事はありません。スイスにも金を置いているんです。かなりの額です。それが増え続けている。銀取り引きの大家、ファードーシ。湾岸で最大と聞いています。どこで銀を確保しているのかは良く分からない。もちろんウチには何の関係ありませんがね。」

「そのスイスの銀行の名前を教えてはもらえませんかね。多分私どもも彼等の事を調べてみたいという事になりそうですので。」

「小さい銀行です。ルガーノにあります。これまで聞いたことがありません。なにかシリア人と関わりがあるようです。社員もあんまり多勢居るとは思えません。何でしたら、ファイル調べてみますが・・・」

「いえいえ、それには及びません。ルガーノにあることさえ分れば、あそこには銀行はあまりありませんから。」

「私がこんなことをお訊きしたのは、どうか御内聞に願います。」イギリス人との別れの握手の時、ラックマンは頼んだ。

「いや、もちろんですとも。どうぞご心配無く。我々イギリスの銀行屋は秘密の守り方は十分心得ておりますよ。」

クウェート・ヒルトンホテルではニック・トッピングが彼の帰りを待っていた。

「どうだった？」

「やっぱり銀だった」勝ち誇ったように答える。

「銀・・・凶星か。しかし違うかも shouldn't。とにかくうちの話を聞かせてくれ。それからだ、次に打つ手は。」

ラックマンは銀行での話をする。トップピングはそれをじつと聴く。一度も遮らない。

ラックマンが話し終わると、にっこり笑ってトップピングが言う。

「よくやった。ファードーシとあの銀行には緊密な関係ある。そいつは間違いなさそうだ。」

「でも、銀はどこで絡んでくるんでしょうね。」

「銀はファードーシと絡んでいるのさ。何箇月か前からファードーシが突然銀取り引きの世界でのビッグマンになったという噂がこの湾岸地帯で囁かれている。この話が本当だとすると、銀はイランから・・・つまりイランで新しい銀鉱が発見されたということになる。しかしこいつは確かめなきゃならんことだ。」

「しかし、そんなことなら、確かめるなんて簡単でしょう？」

「どうやってやるんだ？」

「ファードーシ所有の土地を調べるんですよ。どうせ銀鉱はイランにあるんでしょう？」

「そいつはやってみたんだ。目星をつけた場所があるんだが、そこは猛烈にガードが堅い。まるで国王の宮殿だ。そこでウチの人間が一人殺されたんだ。」

「設備の方はどうなんです？ 大きな鉱山業を始めるとしたら、トン単位の器械設備が必要でしょう？ イランの税関で聞いてみればいいじゃありませんか。」

「坊やだね、あんた。密輸入だよ。そんなものにまともに関税を払っている奴がいる訳ないだろう？」 「このあたりに。」

「それだけの器械設備を誰にも知られないであなた、密輸入が出来るとでも思っているんですか？」

「思っている？」 「冗談じゃない。知っているんだ、こっちは。密輸入と決まっているんだ。」

「よろしい。じゃ、密輸入だとしておきましょう。それで、今のあなたの話を聞いていると、どうやら狙いは銀の鉱山にあるんですね？ じゃ何故ファードーシに直接会って、買収交渉をしないんですか？」

「それは銀鉱の持主がもう彼一人じゃないからさ。経営権も多分もつない。おそらく経営に関与さえしていないだろうな。多分ルガーノの銀行がやっているんだ。覚えているだろう？」

「関連出資」のあの項目を。」

「なるほど」ラックマンは言った。「そついうことが。」

「ところで」とトップピング。「あんたはもうこれ以上嘴（くちばし）を突っ込まない方がいい。これだけでももう知りすぎだ。今はリーダーに黙ってついてくればいいんだ。そしてリーダーは俺なんだ。分かっているな？」

「分かった。それで次ぎは？」

「ドバイだ。」

「ドバイ？ ドバイに何があるんです？」

「銀さ。あたりまえじゃないか。」

「銀鉱はイランにあるとばかり思っていましたか。」

「そつだよ。」

「じゃ、なぜドバイに銀が？」

「イランからの銀の行き場所がそこだったとき。少なくとも一時的にはな。」

「移動中を狙うという訳ですか。本元の銀鉱ではなく・・・」
ラックマンはちょっと浮き浮きした気分になってきた。デビーの居るところから十二時間も離れていると腹が坐つて来る。

「いいところを突いているよ、あんた」とトツピング。「その切れ方じゃ、今頃あんたの銀行じゃ、あんたがいなくて困っているんじゃないのか？ 移動中を狙う・・・凶星だ。しかし、盗むんじゃない。ただ確かめるんだ。銀が確かにそこにあるって事をな。」

「でもあんたはもう、それは分つたって言ったんじゃないありませんか？」

「推測だ。まだ分つちゃいない。分つてたら、こんなくそ暑い砂漠に何で俺達はいないじゃないんだ？ いることあるまいだろう？ 俺達は噂を聞いた。ただそれだけの話だ。始めは湾岸での噂を。次は、もうちょっと確からしいが、あんたの知り合いのクエートの銀行屋さんから。でもまだ分かつちゃいない。俺達はドバイに行く。そして、もしドバイで運が良ければ、そいつが分るってことよ。」

「なるほど」とラックマンが答える。「それで、いつ出発するんですか？」

「明日だ。ドバイ空港に十一時。連中が俺達を待っている。」

確かに「連中」がそこに立っていた。連中とは誰か。金持ちとも正直者とも見分けられない脊の低いアラブの黒人が一

人だ。その男のコミュニケーションの手段は押し殺した小さなシューシューという囁き声のみ。そして今その声が向けられているのはトツピングの耳、正確に言うとな左の耳だ。ホテルに着く直前、彼等が乗った車が停まり、空港で待っていた汚いアラブの黒人がそこで目立たぬように車を降り、そして同じように汚い群衆の中に消えて行く。そこは、どうやらドバイの中心広場らしい。

「何ですか、これは一体。中古のラクダでも買い込もうっていうんですか？」

「ドナルド。あんたは今、湾岸地帯で一番嫌がられている連中とお知りあいになれたんだ。彼、それに彼の仲間ときたら皆、ちよつとした盗みだつて身の汚れることだと思つているんだからね。」

「どうやら彼、風呂に入る事も身の汚れることだと思つているようです。」

「うん。確かに奴は何かえらい悪臭を放つていたね。まあいい、臭いぐらい。あの男なんだからな、こつちの問題を解決してくれるのは。細工は流々。今夜中にでもだ。」

「解決？ 今夜？」

「そうだな、まあこう言つておこう。我々の臭い友達が「死体」を拵えてくれると約束してくれてるんだ。」

「死体！」

「驚くことはない。単なる比喩的表現だ。ラテン語で言うcorpus delicti（他殺死体）かな。」

「誰の死体なんです？」

「まあ、そのうち分るさ。」

ホテルにチェックインし、昼食を終えると、ニック・トッピングはこれから昼寝するという。ラックマンはちよつとドバイの街中を見に出かけるつもりで出たが、十分後にその焼けつくような暑さに耐えられず、あきらめて戻つて来る。その時突然デビーの事を思い出す。ルガーノに繋がるまで二時間もかかる。電話の向こうにデビーがやつと出る。ラックマンは堰を切つたように、これまでの二十四時間の出来事を詳しく説明する。デビーにも彼自身の興奮を共有してもらいたかつたからだ。しかし返つてきたのはおざなりな「あ、そう。」

「あ、そう。」の連続。最後は「じゃあね。せいぜい楽しんでいらつしやい、アラブのステキなお友達と。」だった。デビーは電話を切る。ラックマンは胃の当りに何かむなし感じが残る。一体どうしてあいつはいつでもこんな風に僕の勢いをくじくような言い方をするんだ。冷たいシャワーを浴びて少し気が安らぐ。だが、ベッドに入つても寝付かれな。かわいそうにこんなに疲れているというのに。彼はベッドに横たわつたまま、デビーの事を考え、次にドバイについて考え、そしてまたデビーの事を考え始める。その時電話のベルが鳴る。トッピングだ。九時にホテルのロビーで待つているという。

二人がこのデラックス・アンバサダー・ホテルを出て歩き始めた時、街はもう暗くなつていた。彼等はすぐにバザールへと行つたり来たりする群集の中に呑みこまれてしまう。いろんな国籍の人々でこつた返している。ほとんどはもろろんアラブ人だが、中国人、イラン人、アフリカ黒人等も居る。白人はわずかだ。ニック・トッピングはエキゾチックな周り

の風景など殆ど見ようとせせず、狭い街路を進んで行く。旧市街の息苦しいような熱気と臭いから突然解き放されたと思つと、そこは港だ。悪臭はむしろ強くなり突き刺すような感じだが、ペルシャ湾から吹いてくる風がある。港は込んでいる。大きくてモダンな外洋航海用ヨットが幾つも繋がれている。それに無数のジェルバ船や石油タンカー……それらが皆、駐船スペースを確保しようとひしめき合っている。

陸の方では、驢馬達が水夫達と混じりあい、籠の中の鶏達はクワックワツとうるさく鳴いて、哀れみを請う乞食達の声と競い合っている。突然一人の男が群集から抜け出てきてトッピングの肩をつかむ。トッピングは傷ついた虎のようにすばやく反応し、くるつと回転すると身体を低くして身構える。そして、そこに居る男が誰だか分かるや、急にまた、やれやれという安心した表情。

「二度とこんなことをするんじゃない。さもないと、ただじゃおかねえぞ。」

空港で会つたアラブ人の小さい黒人だった。この齷し文句に何の反応も示さず、勇敢にもトッピングを真っ正面から見つめて言う。

「私と一緒に来てください。まだ時間は早いです。」

三人は薄汚れたインド風のカフェに入る。と、アラブ人はすぐ奥まつたテーブルへ行き、トッピングに向かって言う。

「あと一時間です。お茶でいいですね？ それまで。」

薄汚れた欠けた茶碗に緑茶が入っている。アラブ人は自分のカップにスプーン山盛り四杯の砂糖を入れる。トッピングとラックマンは何も入れない。アラブ人はどうやら話は無用

と考えているらしい。トッピングも同じだ。だが、ラックマンは違う。

「これは一体何の真似です？」

「もうすぐ分かるさ。」

そう言われては話は終りだ。そのカフィーはどう見ても一時間の暇を過ごすのに理想的とはいえない場所だった。カレーの臭いはどこから漂い、蠅でいっぱいだ。天井の扇風機はただのろのろ回っているだけで、とてもカレー混じりの重たい空気を吐き出す力はない。空気をむなしくかき混ぜているだけだ。ラックマンは時計を見る。何度も。それが十度目になった時、別の男が現れる。相棒のアラブ人に顎をしゃくる。坐っていた相棒が言う。「どうぞ。こっちはです。」これが出発の合図だった。

店を出てみると、外はもう、とっぷりと暮れている。群集の数は減っていたが、それでもまだ沢山の人があたりを徘徊している。今度はカレーに代わって魚の臭いがそこら中に漂っている。気温はかなり下がっている。他の三人は速足。ラックマンは負けないようについていくのが精一杯だ。水際に並んでいる種々雑多な船。その傍を急ぎ足に通り過ぎる。「これです。」小さくて汚いジェルバ船の前で立ち止まるとアラブ人が言う。ラックマンは殆ど真つ暗闇の中を他の連中に続いてやっとの事で船に這い上がる。

程なく、小さなエンジンが始動し、船はゆっくりと湾内へ進んで行く。しかしそんなに遠くではない。水際から約二百ヤード。水際ではまだいろんな船が船荷の積み下ろしで忙しい。エンジンが切られる。船は完全な闇夜の中でゆっくり揺

れている。メイン埠頭のほのかな明かりでは、闇夜を遠くまで見透かす事は出来ない。ラックマンは右舷の手すり際にある粗末なベンチに一人で坐っている。他の三人は何故か姿が見えない。その時二人、例のアラブ人とトッピングが再び現れる。

「あれです」アラブが言う。彼が指差す先には入港したばかりらしい少し大きい漁船が見える。

二人は大きな双眼鏡をかざして船を見詰める。夜間用の双眼鏡だ。このジェルバ船は見かけ以上に種々の装備を整えている。

「来ました！」アラブが言う。

ラックマンは目を凝らして埠頭の方を見る。しかし彼の目には特に目を引く物も人も、何も捜せない。

「白い服を着た男か？」トッピングが双眼鏡を十度ばかり右へずらした時、アラブに訊く。

「そうです」

「一人だけか？」

「そうです」

二人の男はかれこれ十五分もの間身動きもせず埠頭の方を見つめて立っている。

「先頭のトラックは荷物を積み終わった。今出発するぞ。」ついにトッピングが口を開く。「よし、仲間にも合図してくれ。」

アラブ人は双眼鏡を眼から離すと、ジェルバ船の船尾の方に歩いていく。箱の中から新しい装備を取り出す。信号燈だ。ほんの十秒足らず、彼はそれをチカ、チカチカと使う。ラックマンは成り行きにただただ呆気に取られている。全てがう

まくいつているようだ。しかし、少しもそのように見えない。

アラブ人は信号燈をしまつとトッピングの居るところへ戻り、双眼鏡を目に、再び見張りの任務に就く。

十分が経過する。「トラックが動き出したぞ」「トッピングが言う。「お前の部下は腕は確かだな？ タイミングを間違えないな？」

始めてだ。トッピングの声に興奮した調子が出る。さらに三分が無言のうちに過ぎる。そして、

「やった！」今度はアラブが叫ぶ。二つの双眼鏡がきちんと並んで岸壁に向けられる。「うまく行きました。あつちは転覆です。」

「そうだな。」トッピングが答える。「よし、ここを出よう。」

すぐにエンジンがかかる。相変わらず無灯火のまま、ドバイ港のほととの停泊地に向かう。ジェルバ船が陸に着くや否や、トッピングとアラブ人は、船の係留作業をもう一人のアラブ人に任せて飛び出して行く。ラックマンも船を降りる。しかし二人にはるかに引き離されている。必死に二人を追いかけ

る。百メートル走つたろうか、前の二人が立ち止まる。再び例のインド風力フェの真ん前だ。その五十メートル先で、黒山の人だかりがしている。二台のトラックが、港に沿った広いコンクリート道路の真ん中で衝突したようだ。一台のトラックは転覆しており、積み荷の一部が放り出されている。積荷はいくつかの木箱で、長さ九十センチ厚さ六十センチぐらいの大きさ。人だかりの真ん中で五六人の男達が、大急ぎで散

らかった積み荷を三台目のトラックに積みこもつとしている。

熱帯用の白スーツを着た男が指揮をとっている。二十分もしないうちに作業は終わり、第三のトラックは走り去る。あとには、二台のトラックの何も積んでいない残骸とその周りに興味津々で集まつてきたアラブ人達が残された。誰も怪我をした様子はない。こんなことは、ペルシャ湾岸の港湾地帯では殆ど毎日のように起こっている事故の一つに過ぎなかつた。

「もう一度お茶にしましょう。」トッピングのコンサルタント役の汚い黒人ががポツリと言う。三人は先刻のインド風力フェの奥のテーブルに戻る。時刻は既に午後十一時になるうとしてゐる。そこには別のアラブ人が待つていた。始めて見る顔だ。男は三分間ほど早口のアラブ語で何やらしゃべり続ける。アラブ人コンサルタント氏が三つの質問をする。男は答える。と、突然立ち上がった去つて行く。

「ようし。」トッピングが言う。「説明してもらおうじゃないか。」

「これで全部はつきりしました。」例のアラブ人が答える。ちよつとつかえるような独特の発音だ。スタッカート風でも言おうか。「木箱の中身は銀です。一つ壊れた箱があつてウチから遣つた二人が、そこから銀が覗いているのを見ました。間違い有りません。」

「トラックの行く先はどこだつたんだ？」
「インド人、ミスター・ネップの倉庫です。これは確かです。あのイラン人と組んでいるんです。この倉庫は警戒が厳重です。働いている連中は口が堅いです。何も聞き出せません。なにしろ、たっぷり給料を貰つてゐるんです。しかも全員イ

ンド人。雇い主に忠実です。」

「銀がそこへ行くのは確かなんだな？」

「確かです。ウチの者が一人、倉庫を見張っています。今夜のトラックの出入りはちゃんと調べてあります。明日からの二三日も調べます。これでファードーシが陸揚げしている銀の総量がかなり正確に掴めます。」

「ファードーシの見張りはまだやってくれているのか？」

「やっています。今夜空港に着いたのがほぼ六時、それからずっとつけています。ついでですが、泊りは皆さんと同じデラックス・アンバサダー・ホテル。妹と一緒に来ています。」

「ようし、アリ。よくやった。いつもの事だが、たいした働きだ。お前も、お前の部下の連中も。おまえさんの手下の連中の働きも。ところで金だが、今欲しいか？」

「欲しいです。約束通りキヤッシュで。ただ、最初の見積もりより、今回はちよつと高いです。」

「何故だ？」

「トラック一台丸々駄目にしました。こいつが予定外で。」

「分かった。」トッピングは上着のポケットを探り、封筒と財布を取り出す。何枚かの札を財布から抜き取り、封筒の上に乗せる。テーブルの向こうの相手に札のつた封筒をぐいと押しやる。札と封筒は、出てきた時と同じ経路を逆に辿り、アリのポケットに収まる。

「お役に立ててよかった、ミスター・トッピング。あとの経過も追って報告します」アリは立ち上がり、レストランを突っ切り、ドアから暗い闇の中に滑りだすように消える。

ラックマンも立ち上がる。しかしトッピングが言う。

「坐ってる。連中と一緒にいるところを必要以上に見られたくないんだ。」

「私だつて同じです。あなたと一緒にいるところを人に見られたくなんか無いですからね。」とラックマン。今回は、その声にひとかけらのユーモアも感じられない。

「どうしたんだ。どうかしたのか？」

「どうかした？ どうもこうもありませんよ。今日のあれは全部、あなたとあの連中が仕組んだことなんですよ。」

「そう。もちろんだ。」

「あの衝突で死人が出ていたら一体どうするんです。」

「誰も死ななかつたからな。」

「とにかく、何なんですか一体、これは。」

答はない。そして二分後、

「オーケー。ホテルに帰ろう。今度は歩きた。」

二人は一言も話さずに歩く。二十分後デラックス・アンバサダー・ホテルに着く。

白の上下を着込んだ男がフロントで鍵を貰っているところだった。そばには若くて美しい女性が立っている。

ラックマンは思わず声を出す。「ほら、ニック、見ろよ。

あれは・・・」

「シーツ。」トッピングはラックマンの脇の下に腕を突っ込むと、ちよつど停まっていた空のエレベーターに押し込み、五階行きボタンをすばやく押す。

「ちよつと俺の部屋に寄ってもらおうか、ラックマン。あなたにちよつと説明しておかなければならない事がある。」

部屋に入るとトッピングは大きなウイスキーのボトルを取

り出すと、二つのグラスに注ぐ。「氷は？」などと聞かない。だいたい、ここでは氷は手に入らないのだ。ラックマンはそんなことはどうでも良かった。椅子に腰掛けるまでに、もうグラスの半分を空けてしまっている。

「よし、手短に行こう。階下に居たのはアーガ・ファードーシ。隣の女は、奴の妹。例のトラックの銀は奴のジェルバ船で運ばれたものだ。あの船が今夜の二番目の荷だ。アリとそ
の手下の連中がそいつを聞き込んで知らせをよこした。だが俺は納得しなかった。今じゃ、納得している。筋書きはこうだ。ファードーシとルガーノの銀行が、イランで馬鹿でかい銀の鉱山を当てた。スイスに本拠地に置いて、銀をロンドンやニューヨークに売りさばく。その中継基地がドバイって訳だ。」

「あなたのその話は筋が通っている。だけど、それだけのことをはつきりさせるのに使ったあなたの回りくどい手段、そいつは筋が通っていないぞ。怪しいチンピラは雇う、事故故にもなりかねない危なっかしい芝居は打つ。お蔭でこっちは逃げ隠れして歩かなきゃならない。あなたはさっき言った。ファードーシの土地を調べていた男が殺された。その時は、あなたが大法螺を吹いてるんだと思っていた。だけど私はもう沢山だ。こんなやり方は。」

「いいか、よく聞くんだ、ラックマン。あなたはルガーノの銀行を、出来たら買収する・・・そのために調査してこいと
言われているんだ。俺の方は、例のドバイ経由でやってくる銀の出どころがどこか、それを調べてこいと
言われているんだ。それで、もしそれがイランだったらその銀の鉱山を買収して

来いともいわれている。ところがあなたのお目当ての銀行が俺のお目当て銀の鉱山の所有権を一部持っているんだ。それどころか、ファードーシを自身の首根っこまで抑えてしまっているらしい。奴はこのプロジェクトの必要資金をあなたのお目当ての銀行から目いっぱい借りているんだから。いいか、よく気をつけて聞けよ。俺達はあるためにあの銀行を乗っ取ってやる。だからその見返りに、銀の鉱山の方は俺達がそっくり頂きたい。金はたんまり払うつもりだ。いいか、うまく行けば結局こういうことになるんだ。あなたはあの銀行を買う。そこで、あなたが支払った同額の金を俺達が出して、あの銀行が持っている銀の鉱山の権利を、俺達がい取る。つまりあなたは「ただで」、あの銀行を手に入れる事になるんだ。そうなりや、サンフランシスコに帰って、あなたは大手柄ってことになるんじゃないのか？」

「違うな。ヤクザな連中と取り引きしたって事が分ければ、大手柄どころか、だ。」

「おいおい、ずいぶんなことを言うな。何がヤクザなんだ？」

「ラックマンは眼を細めて何か考えている。」

「それで？ 考えた結果は？」

「全部がヤクザって訳でもない。あの事故の芝居以外は。それにこの芝居だって、イランへの突破口だし・・・私の知らない何やかやも、あれで多分わかったんだろう。しかし、もう一つ、とても突破出来ない大事なことが残っているぞ。」

「突破出来ないこと？ 何だ、それは。」

「あの銀行を今のオーナーから買収しようたって、出来ない相談じゃないか。少なくとも合法的にはあり得ない。ファー

ドーシと組んで、あの銀行は今、大きな資金源を持っている。そいつが実にうまく稼働しているんだ。一体どこの誰がこういう銀行を手放すって言うんです？」

「そいつはこつちにまかしくんだ。俺を信用してな。全部合法的にやってみせる。俺達はいつだって、上手くやっているんだ。」

「どうやらそうらしいですね。でも、それで思いついた事がある。その「俺達」って、一体誰の事なんです。」

「銀に興味を持っている人間たちさ。」

「それで説明ですか？ 大いに参考になりますよ。」

「いいか、よく考えるんだ。カリフォルニアにいるあなたのボスが、俺達が誰だか知らずにこの俺をあなたと組ませると思うのか？」

「ラックマンは再び考え込まざるを得ない。」

「うん。それは知ってるな、うちのボスは。」

「それで、あなたのボスはあの銀行を買いたいと思ってるんだらう？」

「そうらしい。」

「どつやればうまく行くのかあなたには分かっているのか？」

「いや。さっき言ったように、合法的にはまず打つ手はありません。そりやべらばうな金額を払えば別です。」

「よし、さっきの話に戻ろう。こつちには、あの銀行を手に入れる方法は分っているんだ。ただ、ちょっとだけあなたの助けがある。ほんのちょっとだけだ。それからこれは約束する。六十日以内に全部終わらせる。これは真正正銘の約束だ。」

「まあ、六十日はかからない。それよりはずっと早くすむ。あ

と二日はドバイにいななければならない。ファードーシがどれだけの量の銀を持ち込むのかを調べる必要がある。俺の使っている連中がそいつを調べるのに最低二日はかかるんだ。あなたにはちょっと休んでいるんだ。ただ一つだけやってもらわなければならない事がある。あなたのボスへの電話だ。俺がさっき言った通りの事をボスに伝えて欲しいんだ。そして聞くん。これから先それを実行して良いかどうかをな。結果を教えて欲しい。俺の方はホテルを出たり入ったりしている。適当な時に頼む。」

一時間後にラックマンは電話をかける。

「フォアマンの特命が出る。」「その線で行け。それから、迅速にだ。」「その夜ラックマンは安心して寝る。なにしろ頭取の許可が下りているんだ。」

— —

ガンドリアという名の村についてミシュラン緑版には次のように紹介されている。「ルガーノ湖畔の小村。芸術家にも人気がある。花一杯のテラスやパゴラ、つたの這うアーケードを持った家並みが絵の様に美しい」と。ミシュラン赤版のレストラン案内には「アンティコ」という名のレストラン一軒しか載っていない。その店は三つ星どころか一つ星さえ貰っていないが、ヴィラ・カステイニョーラ・ホテルのフロント係はデビー・ラックマンに言った。こりやあ全くもってフランス人に独特の偏見ですよ。フランスでは料理に濃い赤ワインから作ったソースをかけたりますが、我々イタリア人には考えられないことです。わざわざ味を台無しにしてるんで

すからね。あのフランスのタイヤ会社の調査員連中は、イタリアのレストランと見ると、みんな「原始的」と思っているんですからね。タイヤ会社なんか料理の事が分るはずがないでしょう？ 奥さん。見事な論理。反駁の余地がないわ。そこで、デビーは夕食の予約を取って貰う事にした。一人分である。何時にしますか？ 八時頃にして頂戴。それにハイヤーもお願いなね。ベントツのリムジンを。銀行が払ってくれるんだもの。あれだけの大銀行なんだから、恥ずかしい真似は出来ないわ。豪勢に行かなくちゃ。

村の家々は崖つぶちにしがみつくように建っており、直ぐ下は湖の水面だ。狭い坂道はフィアット500でさえ入れない。いわんやベントツのリムジンには無理だ。仕方なくデビーは上のパーキングから二百ヤードほどは、歩いて下りる。ミシランにあった例の「パーゴラ」を尋ねて歩いたが、もともと「パーゴラ」とは何か分らない。それに夕方の薄明かりの中では探すのは無理だ。そのかわり、樹木で出来た緑のあずまやが充分目を愉しませてくれた。「アンティコ」は想像以上に素晴らしい店だった。湖に面した岩山に穿たれた洞窟にすっぽりはめ込まれるようにして、それは建っていた。テラス席はクローズされていた。全ての席は予約済みだったが、客はまだ誰も来ていない。奥の小さなバーに、男が一人、ぼつんと坐っている。

「これだわ」とデビーは思う。やっぱり、あんなホテルにもう一晩たった独りぼつちでいるなんて馬鹿みたいよね。それに、こんな素敵なバーがあるんだもの。一杯やらなきゃ、ほんとに馬鹿みたいだわ。

バーテンダーは、意味ありげに彼女を見た。特に首筋から腰のあたりにかけて。彼は唇を一寸なめてから言う。「ブオナ・セーラ・シニョーラ。」彼女がアメリカ人である事は百も承知だ。それに、アメリカ人というのは誰か自分より上品で洗練されている者と取り違えられるのが大好きな事も。バーテンダーはゲームを続ける。またイタリア語で「クアント・キエデ・アッローラ？」

デビーの戸惑った表情を見て、奥のバーで一人坐っていた男が助け船を出す。

「失礼ですが、奥様。バーテンダーのやつ悪乗りして困ったもんです。私でよければお力になりましょう」

意味ありげに相手を見るのは、こんどは、デビーの番だ。・
・あら、悪くないわ。

「ご親切に。有難うございます。」デビーは答える。

細身で、背の高いその男が席を立つてきて、握手を求める。

「自己紹介をさせて下さい。私は、ジアンフランコ・ピエトロ・アツヌンツィオ・デ・シラクーサと申します。」

「あら」とデビー。「私はデボラ・ラックマンと言います。」

「デボラ・・・素敵な名前ですね。さ、何か飲み物は？ 何になさいますか？ これは私から。」

「ダイキリをお願いします。」

公爵が鋭いイタリア語を発する。バーテンダーは慌てて仕事に戻る。その顔から薄笑いはすっかり消えている。

公爵はシャンパンを飲んでた。ダイキリが来るとデビーの方にグラスをあげて言う。

「最高に素敵な偶然に乾杯！ なんて素晴らしい方！ いった

ぺんに夜が光り輝いてきましたよ。」

デビーの身体は震えた。寒かったからではない。痺れるような刺激のせいだ。これがヨーロッパなんだわ。あの退屈なチューリッヒに着いて以来、ずーっと私が追い求めてきた本当のヨーロッパ。．．．ああ、貴方！ 何処かへ行ってしまわないでね。早く何か話さなくっちゃ。

「こちらのお生まれ？」 ちよっと間の抜けた質問だ。しかし、それはそれで役立った。

「いえいえ。生まれはシシリア島、シラキューズです。」

「こちらへはお仕事で？」

「まあそんなところです。もっとも、本職はビジネスマンじゃありませんが。貴女は？」

「私は．．．エート．．．主人と一緒に．．．主人は銀行に勤めておりますの。」

「ルガーノですか？」

「いえ、サンフランシスコです。ルガーノには銀行を買いに参りましたの。」

「ほほう！」 公爵は思わず大きな声でいった。「気を付けた方がいいですよ。ご主人におっしゃって下さい。」

「どうしてそんな事をおっしゃるのです？」

「そういう関係では、私もちよっとしくじった事が有りますので。」

そう言っつて公爵、時計をちらと見る。

デビー、急に気をそがれて。

「すみません。お引き止めして。」

「いいえ、いいえ。飛んでもない。違うんです。全然かま

ません。友達を待っているんですが、どうも遅れているらしいのです。それでつい．．．ちよっと、ご提案があるんですが。」

返事を待たずに、

「夕食を一緒にできませんか？ 勿論どなたかを待ちでなかつたらですが。あ、ご主人と待ち合わせですか？」

「いえいえ」 彼女は答える。「主人は今中近東の何処かにいるんです。」

デビーはちよっと躊躇いながら言う。「一緒にできるなんてとても嬉しく思っ ておりますの。でもごめんなさい。私、お名前をちゃんと聞き取れなかつたんです。イタリア語って随分速口なんですわ、誰でも。」

「あ、ジョンと呼んで下さい。アメリカ人の友達は皆そう言うんです。さあ、テーブル席の方に参りましょう。坐り心地は、あちらの方がいいですから。」

二人が席を替わると、まもなくレストランは客で一杯になり、夜のさんざめが店を満たす。「このあとの三時間はデビーにとって夢のように過ぎる。酒をシャンペンに変える。もう二人で三本目のボトルにかかったところで、会話も弾んでいた。そこに男が現れ、公爵の肩に触れて言った。

「やあ、済まん済まん。大遅刻だな。」

「ドック。まさか。現れるとは思っていなかったですよ、もう。」

「でも、一人で淋しい、という様子じゃないね。」 テーブルの向こうを見やりながらドックが言う。言われて公爵、急いで立ち上がり、言う。

「どうも失礼。紹介しなくちゃ。」

「マシュー、こちらはミスイズ・デボラ・ラックマン。サンフランシスコからいらしたんだそうです。」

ドックは手を差し出す。デビーは優雅にその手を握り返しながら思う。「こちらの方がもっと素敵。今夜は本当にどうなっちゃってるのかしら。」

「お目にかかれて光栄です。」低く甘い響きのする声だ。

「是非一緒に緒させてください。」言うが速いか、となりのテーブルから椅子を引き寄せる。そしてボーイを呼ぶ。

「グラスをもつ一つ。それから、シャンペンをもつ一本。」

「こんどはデビーが時計を見る番だった。」

「でも……」

「でも……はないでしょう。」ドックが言う。「私の大遅刻の穴埋めに公爵と付合つて下さったんです。お礼にナイトキャップを差し上げる事くらい許して下さいさなければ。」

「公爵？」

「ああ、彼話してなかつたんですか？」

「ええ、全然。」公爵と聞いて彼女は、畏敬のまなざしでジョンを見ながら答える。

「いや、イタリアではこんな地位、なんでもないんですよ」とか何とか、アツヌンチオ、も「も」と呟く。

「ドック」と公爵は続ける。そして、興味のある話題に切り替えようと、「彼女のご主人は銀行マンで、ルガーノに銀行の買収の仕事でいらしてらんです。」

「ほう、どこがお目当ての銀行でも？」

デビーは答える。「ええ、なんだかシシリアとアメリカに関

係があるとかいう……」

「そいつは面白い。ご主人はアメリカのなんと言つ銀行に？」

「カリフォルニア・ファースト・ナショナル銀行ですの。」

「ああ、聞いた事があります。ずいぶん大きな銀行なんですよ？」

「ええ。貴方も銀行の方？」

「私達は……」と公爵が話し始める。途端にドックが遮る。

「私達は投資関係の仕事をしています。でも、夜のこんな時間に仕事の話でもありませんね。」その時のドックの、公爵をじろりと睨み付けた目つきは凄かった。デビーはぜんぜん気がついていない。そりゃそうだ、こんなにアルコールを飲んだあとだ。焦点を定めようというのが、土台むりなのだ。

会話は突然遊びの話に移る。スイスのイタリア側は、他のスイスとは全く違いますね。楽しいですよ、とにかく。そこに住んでいる人達にとつても、訪問者にとつても。奥さん、どこか御覧になりたいところがありませんか？ 私がガイドの役を喜んで、とドック。ホテルにお電話しますよ。

たつぷり二時間後、三人はおぼつかない足取りでレストランを出る。村の上のパーキングまで登り、さよならを言う場で、デビーは二人のほつぺたにお別れのキスをすると言つて聞かない。そして、デビーのドックへのキスはただの挨拶にしてはちょっと長すぎたし、ドックが彼女の背中に回した手の動きも偶然とは思えない「たゆたい」があった。ホテルへ帰る車の中でデビーは、鼻歌で同じ旋律を何度も何度も繰り返す。運転手は堪（たま）らず、ラジオをつけてささやかな抵抗を試みようとする。が、思い止まる。待てよ、これは

ほっといた方が金になりそうだぞ。さすがにイタリアのタクシー運転手。降りる時にデビーが彼に渡したチップはなんと五十フラン。但し、デビーのもりでは十フランだったのだが。

シシリア・アメリカ国際銀行は朝九時に開店する。待つほど無くここは、両替目的の観光客たちや為替手続きに来る地元の会社員達、預金を預けに来る主婦達で大忙しとなる。十時前後には、もう少し重要なタイプの顧客が到着し始める。彼等は目立たない様にエレベーターに案内され上の階のどこかで、銀行の上級職員に迎えられる。ここでの会話は、アメリカの経済動向、米ドルの弱さやドイツマルクの強さとかコア価格の暴騰と言った話題だ。こつした会話の結果として、しばしば何百万ドルの金が今の市場から別の市場へ移動したり、ある通貨が別の通貨に買い換えられたりする。こつした移動・変換に伴って手数料が入る、コンサルティング料が入る、利ざやがある場合の金利等々がどんどん積み上げられる。開設から一年も経たぬうちに、シシリア・アメリカ銀行は利益率の良い超優良企業に成長した。その原因は何か。この銀行はなすべき時に真に成すべき事をやれる不思議な技を持っているらしい。噂は広まる。金がどんどん流れこむ。

毎朝十時、会議室で役員会が開かれる。ほとんどの場合会議は五分とはかからない。そして、殆ど毎回全員がアルバート・フィオーレの話に注意深く聞き入る。そこでは、日々変わる銀行の戦術・戦略が極めて注意深く、細部に渡って語られる。始めのうち、新入社員達・・・といっても、銀行同士の引き

抜き合戦を通じて獲得したスイス人の銀行マン達だが・・・は、アルバートが命令することに、非常に懐疑的だった。彼はまだ若くて世の中を知らない、それにアメリカ人だ、日頃の振る舞いも切れ者の金融マンというより子供っぽい学者先生のような。しかしこつした疑いは本當にちよつとの間だけだった。何故なら、彼の言うことはいつも当たったからだ。

この日の朝、会議は遅く始まった。理由は、ドックが昨日の夕方のガンドライアでの事件をどうしてもアルバートに伝えておきたいと思っただからだ。彼等は廊下で小さな声で話し合っただ。いや、話し合ったというのには正しくない。ドックが喋る、アルバートは時々うなづきながら黙って聞いている。ドックが話おえると、アルバートが結論を出した。

「ドック、これはいい事が悪い事か、どっちかです。中間はありません。何れにせよ、今動くのは軽率だと思えます。もう少し大きな変化があるまで待ちましょう。対応するのはその時に。さあ、今は会議にしましょう。」

公爵は議長席で辛抱強く待っていた。ドックとアルバートの姿を見た途端、皆静かになる。いつもの通り、議長として公爵が型通りの挨拶を終えると、後の進行をアルバートに委ねる。

「皆さん、」彼は始める。「今朝は商品相場についてお話しします。商品市場のしくみについてあまり知識のない人のために、簡単に基本的な事だけをお話します。実際、実に簡単な事なのです。メモを取る必要はありません。この会議の後で、何か疑問が出て来た時には、どうぞ直接私のところに聞きに来て下さい。」

アルバートは金融の新しい領域について説明する時、決まって今のこの前置きをする。今から基本的なことを話す、メモは取るな、質問があれば来い。ひどく簡単なだ。

「三つの基本的なコンセプトを理解すればすむ事です。三つの言葉・・・それは、ロング（買い）、ショート（売り）、フューチャー（先物）です。」

メモは要らないとアルバートが言っているにも拘らず、公爵やドックを含め、席に居た全員が三つの言葉を書きとる。

「ロングから始めましょう。商品市場で「私はロングで行く」ということは、「私は買う」ということです。「将来のある時を期してある商品をその売り手側から買い取る」と言う契約を結ぶ事です。例えば「私は、一オンス一、六〇ドルで銀一〇、〇〇〇オンスを貴方から買う事に同意します。納期は三箇月後。」と言う具合です。何か問題がある人？」

彼は部屋を見回す。「ロングで行く」は買い手になると言う事。何の問題も無い。

「いいですね。じゃ、「ショート」に行きましょう。「ショート」は「売り手」になると言う意味です。貴方は一〇、〇〇〇オンスの銀を一オンス一、六〇ドルで契約相手に売る。そして、今から三箇月後にその銀を出荷する事に同意するのです。分りますか？」

みんな、分る。

「フューチャー（先物）」はこの種の取り引きを総称する言葉に過ぎません。契約は今だが、実際の商品の引き渡しは将来の或る決められた日になる。さっきの例で言うと、一〇、〇〇〇オンスの銀は今から三箇月後に「ショート」の人即ち

「売り手」側から「買い手」側に引き渡されなければなりません。分りましたか？」

まあ何とか。

「さて、ここからが肝心なところです。通常商品先物市場で売りに出る側は商品そのものを自分が持っているわけではないのです。そして、買う側もその商品を本当に使う目的で「買う」わけではないのです。分りますか？」

いや、今度は全く駄目だ。

「どうして、」会計担当の役員の一人が質問する。「自分で持つていないものを売る事が出来るんです？」

「それは何故かと言うと、商品仲買人という者がいて、この仲買人が、引き渡し日が来た時に、買い手に商品を引き渡してくれるからです。売り買いの契約はこの仲買人を通して行われるのです。」

「仲買人は何故そういう事が出来るのですか？」

「それは、受け渡しのために、売り手、買い手から保証料が支払われるからです。これは現金払いです。商品取引ではこれをマージンと言っています。このマージンという言葉で混乱するといけません。受け渡しのための、普通の保証金だと思ってください。」

そこで、一番若いメンバーが発言する。彼はあご髭を蓄えている。二十三歳と言つ年齢を隠すための髭だが、殆ど役立っていない。

「自分が持つてもいないものをどうして売ったりするんですか？」

「金を儲けるため。」アルバートが即座に答える。

「これで金が儲かるんですか？」

「そう。儲かる。さっきの銀の話で考えてみましょう。私が売り、君が買う。つまり、君は今から三箇月後に一〇、〇〇〇オンスを私から買い、私は君にそれを売る契約をしたとする。君が私に一オンスあたり一、六〇ドル支払う事にも我々はお互いに同意しているわけです。それでいいか？」

「その通りです。」この男は誉めてやらなければ。何故なら「馬鹿な」質問をする事をちつとも恐れていなかったのだから。

「よし。この三箇月の間に銀の価格が下落する。そう、一オンス一、三〇ドルになったとしよう。私が君に銀を渡さなければならぬ日、勿論私はその銀を持っていないので、私は出ていって実際にそれを買う。そしてそのあとすぐ私は君にそれを渡す。君の方は私に代金を支払う。しかし君は私に一オンスあたり一、六〇ドルで支払わなければならない。私は同じ物をちつと前に一オンス一、三〇ドルで買ったばかりです。どうです？一オンス三〇セントの儲け。一〇、〇〇〇オンスでは三、〇〇〇ドルの儲けです。」

「私はどうなるんです？」若者が聞く。
ドックが割って入る。「お前は、やられたってことだよ。」笑いが緊張をほぐす。今度はもうちつと年配の男が質問をする。

「銀の値段が下がるんではなく、上がった場合はどうなるのか説明してくれませんか？」

「いいですよ。今私が売りです。その時に銀が値上がりした場合は、契約の期間が来て実際に銀を仕入れる時、最初の状

態より高い金を払わなければならない。例えば一オンス一、九〇ドル。契約の相手には一オンス一、六〇ドルで売らなければならぬのだから、私は三〇〇〇ドルの損。つまり、相手が三、〇〇〇ドル儲けることになる。」

「銀などの場合、価格の上がり下がりは何によって決まるのですか？」別の男が質問する。

「需要と供給です。これは他のすべての市場にも共通する原理です。しかし、商品市場の場合もうちつと込み入っています。ここでの価格決定要因は、将来における需要と供給に対する人々の予測です。何故かと言うと、ほとんどの商品取引は将来の引き渡しの契約で取り引きされるからです。仮に今、銀が不足しているとしましょう。或る人々はこの不足状態は将来ますます厳しくなる、だから銀の価格は上昇するだろうと予測する。この人々は当然「買い」を選びます。一方、⁹⁸そう考えない人がいる。何らかの理由で銀がこれから大量に出回る、だから銀の供給過剰によって、価格は下落する、と予測する。こういう人々は「売り」に出ます。つまり、現在の銀の価格はこの二種類予測を持つ人々のバランスで決まる。先ほど「決定要因は、予測だ」、と言ったのはこの意味です。出席者達は納得する。しかしもう一人の男が質問に立つ。

「アルバート、さっきのマージンについて説明してくれませんか。」

「いいでしょう。これはとても大事な事です。実はそれが商品相場を非常に面白くしてもいるし、非常にリスクの大きいものにもしているのです。すべての商品先物取引に共通の鍵はマージンにあります。マージン、つまり現金による商品

引き渡し保証金は、普通、実際の商品の価値の10パーセントです。繰り返しますが、これは契約時に現金で支払われま
す。さて我々の銀の話に戻って考えてみましょう。売買契約
時の銀の価格は、一オンス一、六〇ドル、従って一〇、〇〇
〇オンスでは一六、〇〇〇ドル。そうですね？」

アルバートはちよつと間を置く。

「そこで仲買人には、その10パーセントつまり一、六〇
ドルだけ現金を渡す。わかりますね。」

「分かります」誰かが皆を代表して答える。「つまりこの一、
六〇〇ドルが投資金額に相当するわけです。さっきの儲か
る例では、三箇月の間に三、〇〇〇ドル儲けるわけですから、
元手一、六〇〇ドルをかけて、三、〇〇〇ドルを得たと言っ
たことですか。どんな取引きだつてこんな事は考えられませ
ん」
「その通りです。商品取引では非常に短期間で金を二倍、三
倍、時には四倍にだつてする事が出来るわけです。」
「反対に、すつからかんになる事もあるわけだ。」と、若い
あこ髭男。

アルバートは腕時計を見る。それから続けて、

「みなさん、私がこの話題を持ち出したのは、我々が非常に
近い将来、顧客に、納期が三箇月の銀の買いを薦める、つま
り「ロングに出る」べきだと、提案しなければならぬから
です。何故なら、銀の価格が上昇中だからです。ではみなさ
んに、その上昇傾向がどういう風に現れているかをグラフで
お見せしましょう。」

アルバートは大きな図面を広げ、公爵に手伝ってもらつて
それを壁に釘で留める。

P 174のグラフ

「これはこの六箇月間の銀の価格の推移です。銀の価格は去
年七月までは一オンス一、二九ドルで、その後一方向的に上
がり続け、年末には二、四〇ドルまで上がりました。そのあと
一旦下げに入り、二、〇〇ドルまで下げ、今また上がり始め
ています。この買いの原因には二つあつて、一つは、アメリ
カで小口の投資家に銀買いブームが起こつてゐる事です。時
機を逸しまいと、数十万人の人々が買いにはいつてゐるよう
です。去年の夏、相場師達が扱う先物契約の総額は二億オン
スを大きく下回る量でしたが、今ではそれが五億オンスに膨
れ上がつてゐる。去年の二倍以上です。これは銀の市場に一
〇億ドル以上の金がつぎ込まれてゐることを意味してゐます。
この傾向は日に日に強まる一方です。「欲張りさん」がどん
どんつぎ込むからです。私は好意的な意味でこの「欲張りさん
」という言葉を使つてゐます。理由はこの「欲張りさん」
の連中がものすごく儲ける事になりそうだからです。少なく
とも暫くの間は、です。どうしてかというところ、こうした小物
達だけでなく、最近では大物達、いや、複数ではなく、一人
の本物の大立者が買い占めに走つてゐる気配があるからです。
上げ基調。小物も大物も同じ方向を向けて走つてゐる時は、
我々もこれに乗るべきではないでしょうか？これがさつき、
皆さんに「ロングに出る」ことを提案した理由です。」

「さて皆さん」とアルバートは続ける。「このグラフをもう一回見て下さい。小さなXがありますね。ここが今我々がいる位置です。大きなX、これが、私が予想する銀の価格の到達点です。もしそれが当たると、今日、五月、マージンペーすで一万ドル投資した金が、夏、つまり八月までには三倍になります。」

アルバートはちよつと間を置く。

「お客さん達は多分喜ぶと思います。」

部屋にいたものすべての表情が明るくなる。アルバートのやつ、またやつたぞ。お客さん達は多分喜ぶ？「冗談じゃない。感極まるさ！」

「技術的にはどういふ行動をしたらいいのでしょうか？」スイス・ユニオン銀行から二倍の給料で引き抜いた年配の会計担当役員が質問する。

「私のデスクに注文を伝えて下されば結構です。」アルバートが答える。「その後については私が管理します。」

五分も経たないうちに、シシリア・アメリカ国際銀行の電話交換台は、非常な勢いで光が点滅する事になる。まるでクリスマス・ツリーだ。十箇国以上の、特に選ばれた顧客宛へ電話。「銀が買い得です！」

銀行内でややためらいがちなのはドックだけだった。彼は皆がいなくなった後、会議室の後ろの方にアルバートと二人で残った。

「アルバート、一つだけ心配な事がある。イランの我々の鉱山が、もう気違いのように銀を掘り出している筈だぞ。あそこで掘り出した銀のせいで、銀の価格が下るんじゃないのか？」

「多分下がります。しかし、夏の終わり頃までは大丈夫です。ファードーシの計画では、その頃になって初めて生産がフル稼働になる筈なんです。夏の終になったら、もう一度全体を見直す事にしましょう。」

ドックは肩をすくめる。こいつに物を訊くと何時だって正解が返つて来る。訊くだけ無駄だ。

「その間に」アルバートが続ける。「投機家を「買い」に走らせて、価格を充分に釣り上げておくんです。そうすれば、イランから来る我々の銀が、もつともつと高く売れます。それと同時に、商品先物市場で銀行の顧客に一儲けさせる事が出来ます。これが本当の一石二鳥です。」

この答にドックは満足する。可愛い坊やだと思っていたアルバートが心の中では結構「悪(わる)」なのだと分り、安心もする。

ヨーロッパには、「リンゴはその樹の近くにしか落ちない」と言うことわざがある。ジョー・フィオーレは自分の息子を「悪」の点でも自慢できそつだ。

一一一

デビーはホテル・ヴィラ・カスタニョーラで入浴中だった。彼女の従事していた動作は、ただ身体を洗うためだけのものだった。すぐ手の届くところに本物があると云うのに、子供っぽい遊びなんか駄目よ、ときつぱり自分に言い聞かせたのだ。本物の方がいいに決まってるの！

デビーはちよつと変っていた。浮気をしたいという気持が全然なかったのだ。ドナルド以外の男と関係を持ったのはたつ

た二人しかいない。男と関係？ いや、男とは言えない。少年だ。大学時代の話、二〇年も昔の事。 Donaldに会うよりずっと前の事だ。しかし、どういう訳か、何がきっかけなのか、よくは分らないのだが、これではいけない、とハツと気がついたのだ。正確にいつというのは難しい。が、一年以上経っているのは確かだ。どんなことがあっても、Donaldへの貞節は守ろうと思っていた気持が、ぐらりと揺らいだのだ。

その時までには諦めの気持・・・残りの人生を、セックスについては控えめにして、いわば上手に生きて行くしかないと思つて生きてきた。しかし、突然考えが変わつた。もう二、三年すると四十歳を超える。そうすると、そつちの方ではもうチャンスは無い。今の世の中、お婆ちゃんを誰が相手にしてくれる。しかし困つたことに、そう決心したところで、自分の家の近所、ロス・アルトス・ヒルズじゃ、そこそこ若い女にだつて、色目を使う男がいらないのだ。勿論、デビーはロス・アルトスなどでそんな素振りを見せることはしない。しかし、カクテル・パーティーなどでは多少それらしきことをやつてみた。一再ならずだ。最も大胆だつたなと思うのは、ロジャー・ライトの台所でのことだつた。その時のロジャーの反応ときたらなかつた。酒の支度でロジャーを手伝っていた時だつた。彼つたら氷のキューブを床一面にばらまいて。助けてくれ、とばかりに、皆のいる居間に逃げ込んだ。何？ あれ。姿、形は人間だけど、人間とはかわれない妖精ちゃんじゃないの？ ちょっとハンサムな男つて、みんなその傾向があるのかしら。マシューがそつだつたらどうしよう！

でも、絶対それはないわ。あり得ない。今日は昼過ぎに私

を迎えに来てくれて、そのあとテイチャーノ地方をあちこち車で案内してくれた。そつ。完璧。最初から最後まで。非の打ち所無し。そのあと、ホテルまで送ってくれた。

そして、「今夜一緒に夕食はいかがでしょう。」と。何処で、ですの？ 彼が住んでいる村の小さなレストランで。夕食後、私の別荘にちよつとお寄り下さい。就寝前一杯。如何です？

如何も何も無い。いいに決まっている。だからその申し出は受け入れられた。では八時にお迎えに。あら、もう三十分で八時だわ。早く着替えなくちゃ。

ドックはガローナで、彼の車に乗りこむところだつた。

「彼の・・・いや、正確にはマーヴィンのMGだつたが、MGの方が彼自身の車よりはこの際適している。ただ、デボラ・ラックマンを誘惑する道具としてはそれほど上出来とも言えないが。」

「まあいいじゃないか」ドックは車を転がして屋敷の門を後にしながらつぶやく。「少なくともあの女、顔はいいし、オッパイは大きいし・・・」

しかし彼は自分がそれほど乗り気でないことに気づいていた。問題は最後の最後、行き着く先をどこにするかだ。他の場所はどうしても駄目だ。結局この別荘へ、そして自分の寝室にせざるを得ない。その場所は、シリーン・ファードーシこそ彼の生涯でたった一人の女性であることに気がついたところだつた。一夜の気まぐれでなく、本心からそう思ったのだ。どうしたことだろう。四十四歳の男がまるで十七歳の若

者のように振る舞ったものだ。しかし彼は考えた。神かけて、彼女は俺の全てだ。彼女だけが俺を「幸せ」にしてくれる女神だ。「幸せ」・・・忘れかけていた言葉だったが、シリオンと共にあの夏の輝かしい八日間を過ごしたあとの彼には、決して忘れられない言葉になっていた。実際、今でも彼女のことを思うと胸が痛くなるのだ。二人はなんと毎日、手紙を交換し合った。そして、週に二回も電話で話だ。お互いに、書いたり話したりしなければならぬ用事があつたわけではない。しかしドックは、毎朝手紙が着くのが待ちきれない。電話をかける水曜日と土曜日は、彼女の声を聞くまでがもどかしい。そして今日は、その電話の土曜日じゃないか、畜生！

受話器はもう多分十回は取り上げている。しかし、今夜自分がするつもりのことを考えると、相手を呼び出す決心がつかない。ええい、糞っ！

八時きつかりに、ドックはホテル・カスタニョーラの正面に車を取りつける。デビーはロビーで待っていた。ピシッと決めている。首まできつちりと釦のついている黒いドレス。それが却って、彼女のセクシーな体の線を際立たせている。成熟した身体。しかし、日焼けした健康なカリフォルニアの少女の雰囲気は失っていない。ロビーにいたイタリア男達は、妄想を逞しくしている。この女と出来たら何ていいんだ。何て素晴らしいボーディーなんだ。イタリア男は女を誘うところまでは、八方手をつくすのだが、いざ「性」の問題になると、意外に想像力に欠ける。ただ単純に、速くて、熱々で、ポリウムたっぷり・・・昼食のスパゲッティ・ミートボールみたいなもの・・・が大好きだ。ドックが現れ、鼻の先の獲物を、

さつと攫っていつてしまった時には、ロビー中に失望が広がった。しかしイタリア人は、その長い歴史の中で、負け戦を上手に次の戦いへの教訓にする事を覚えてきた民族だ。夕方八時にデビーの出現が彼等の心に呼び起こした妄想は、その夜遅くなつて結果が表れた筈だ。ママ達が突然のパパのハッスルによつて、何故か分らぬまま、愛の喜びを味わつた家庭は、五軒ではきくまい。

ドック自身でさえ、彼女を見た途端一寸めまいを感じたほどだ。全く・・・彼は思った。俺もいろんな女に出合つてはいるが、これだけの女はめつたにいないな。二人は、互いに挨拶を交わすと、すぐにぎこちない気分になる。その日の午後ずつと一緒にいた後だというのに。

そのぎこちない気分は、二人がガローナに向かう道でも続いていた。また、その田舎風のレストランでの食事の間、でも、二人ともこれから起こることが分かつていた。が、勿論それを口に出すことはしない。店の勘定をする時になつて、ようやくドックが訊く。

「寝前の酒を私と付き合つていう約束でしたな？ まだ覚えていらっしゃいますか？」

デビーは一言も言わずに、ただ彼の目をじつと見詰め、それから椅子を後ろへ引く。ドックはさつと立ち上がる。デビーの肘を取り、出口へとエスコートする。その時ドックの手は、そしてデビーの腕も、汗ばんでいる。

二人はたった百メートルの距離を、車に乗る。車を降りる。中庭には灯がともされている。プールも照らされている。しかし屋敷は闇に包まれている。ただ、居間だけが明るい。小

さなテーブルランプが灯り、暖炉には火が燃えている。どうやら二人が到着する頃を見計らって、誰かが火をつけたらしい。デビーはそれに気がつく。しかし何も言わない。暖炉の前の長椅子に横たわる。ここに来るまでの百メートルはちょっと寒かった。当り前だ。MGのオープンカーなのだから。屋敷にはいるや、ほっとするような温かさだ。薪が燃える心地よい匂いが充ちており、暫くしてコニヤツクの香りがそれに加わる。

「まあ、ドックが隣に坐ってきた時、デビーはつぶやく。「これがあれなのね。」

「うん、これがあれなんだ」ドックは同じ言葉を繰り返している自分に驚く。言葉だけではない。気分までその気なのだ。ただ、相手がもう一人の方の女だったら、どんなにいいか。しかし、そうは言っても、この自分の目の前にいる女性がとてつもなく魅力的な女だという事は確かだ。彼の下腹部は正直に反応していたので、自分で自分を押えられなくなっている。本当は、彼女の夫の狙いがどこにあるのか、それを聞き出す絶好のチャンスなのだが・・・しかし、気がつく、彼は相手の黒いドレスの背中の中のボタンを外しかかっていたし、デビーの手も夢中でドックのベルトを緩めていた。一瞬間の間に二人は暖炉の前の絨毯の上で抱き合っている。ドックはデビーの中に入って行く。デビーは震える。体を押しつける。ドックをしっかりと包みこむ。この三つの動きが、恐ろしい一つの動きとなる。そしてその動きがほんの少しの間続く。と、ドックは大きなうめき声をあげる。と同時にデビーの中に注ぎ込む。デビーはしっかりと男の身体を引付ける。出来

るだけ長く自分の身体の中に留めておきたい、と。その間に声が出る。何度も。しばらくして、デビーの痙攣が収まってくる。ほっと溜息をついて、ドックの腕の中で緊張が収まって行く。

「有難う、マシユー」彼女は優しく彼の頬を撫でながらつぶやく。

ドックは自らを恥ずべきだと思いたかった。しかし出来ない。この風変わりな女性が好きでたまらなくなったからだ。愛している訳ではない。それは確かだ。しかし、お互いに温かいものが通い合ったのだ。お互いに相手が自分と同類の間だと感じあったのだ。何年もの間、自分の感情を押し殺して、外に出さないよう懸命に努力してきた人間、そういう二人なのだと。そして今、その押し殺してきたものを、あっさり

りと外に吐き出せた、二人で同時に。それが幸せだったのだ。103

まだコニヤツクは残っていた。しかしドックは彼女の手を取り、一言も言わずに二階の寢室へ導く。ベッドに入ると瞬

く間に二人は再び一つになる。今度は長い。最初の出会いの時は夢中だったが、今度はお互いに与え得る肉体の喜びを出来るだけ長持ちさせたいと思ったからだ。

朝の四時まで、デビーはこれまで一度も経験した事の無い野生的な交わりに耽った。そして深い眠りについた。ドック

も同じであった。

翌朝二人が目覚めたのは九時三十分であった。最初の言葉

はデビーからだ。だった。

「マシユー？」

「ああ」

「後悔してる？」

「何言ってるんだ。君の方こそどうなんだ？」

デビーは上半身を上げ、ドックを上から見る。両手でドックの顔を締め、チュツと挨拶のキス。それから突然ベッドから舞い降りる。

「幸せだわ、私。お腹すいちゃった。お風呂に入りましょ。」

一緒に。それから朝ご飯。」

二人は一時間近くも、子供のようには水かけをして戯れ合う。

一段落して、階下に降りると、ペーコン・エッグの香ばしい香り、それにマリーアが二人を迎える。朝食の部屋で給仕をする間、マリーアは二人から視線を逸らしている。ドックへのマリーアの想いもこれからは少し違ったものにならざるを得ないだろう。

「マッシュ」と、突然デビー。「私が結婚しているのをあなた、ご存知ね？」

「勿論。だけど僕は、君の家庭生活の話なんか、する気ないよ。」

「それは分っているわ。ただ、私、ドナルドの事をちょっと話しておきたいと思って・・・」

「ねえ、デビー、そんな話はいいんだ、本当に・・・」

再びデビーが遮る。「でも私、話したいの。私あなたから、しょっちゅう浮気をしている女だなんて、思われたくないの。十七年間であの人を裏切ったのは今度が始めてなのよ。」

「分かってるよ、デビー。そんな事問題じゃない。」

「私が言いたいのは、こうなった理由についてなの。あの人

と私、この十何年で、だんだんと心が離れてきていた。それで急にヨーロッパ行き命令。私、嬉しかった。これで元の二人に戻るんじゃないかって。第二のハネムーンでしよう？ 結局のところ。でも、あの人、ちっともそんな気なんかなかった。私をただ、足手まといの荷物としてしか考えていない。何てこと！ マッシュ。私こんなのって絶対に嫌。」

ドックは肯くだけ。

「最後の糸は木曜日に切れたわ。あの人ったら中近東へ・・・クエイトへ行くなんて言い出したの。それも誰か男の人と二人でだって。私をここでただ一人、おいてきぼりにして。それがまた、気違いじみた話なの。スイスの銀行にイランの銀の鉱山が絡（から）んだ何か計画があるんだって・・・」

ドックは始め、デビーを利用できるだけ利用しようというつもりだった。しかし今は？ ゆうべの後では？ それはそんなに易しい事ではなくなっている。とはいっても、やらなくてはならない仕事は、やらなければならぬ。

「それで？ それからどうしたんだい？」

「私の知っているのはそれだけよ。でも、その訊き方・・・あなた、うちの主人に何か興味があるの？」

「それには訳があるんだ。でも、悪いことは言わない。もうこのことについては一切忘れたほうがいい。きれいさっぱり忘れるんだ。君がいくら首をつっこんだって、君自身にいいことなんかちっともない。いや、僕にだって御主人にだって、何もいいことはないんだ。」

ドックは立って、デビーの後ろへ回る。肩をそっと抱き優しく髪をなでる。

マリーアがいれ立てのコーヒーを盆に載せて朝食の部屋に戻ってきたが、二人の様子を見ると立ち止まり、さっと台所へ逃げる。一体何のつもり？ あの女。

十分後デビーとドックは曲がりくねった坂道を下つてルガーノへ向かつていた。ドックは一緒に昼食が取れないことを謝る。気にする事無いわ。どっちみちうちの亭主、お昼前にはホテルに帰っていると思う。そうか、それならどうしようもない。ヴィラ・カスタニョーラ・ホテルの外で彼女を降し、空ろな顔で見送るデビーを残してドックは去る。そして、街の中心部へとスピードを上げる。

十三

ドックはこれまでの経緯を、アルバート、公爵、マーヴィンの三人に話して聞かせる。聞いているうちに、三人は段々白けてくる。話が終わるとアルバートが口火を切る。

「ドック、それはまるで辻褄があいませんよ。」

「辻褄が合わないとは何だ！」と、ドック。声が荒い。「俺達は、巨万の富を目の前にしている。ところが、そいつを狙っている奴がいるんだ。ボヤボヤしていると、連中にみんな持って行かれるんだ。忘れるな、アルバート。お前の親父さんや、その仲間達はモルモン教の信者じゃないんだ。慈悲の精神など、ここにはないんだからな。」

「だから、その狙っているというのが辻褄が合わないんです。アメリカの大銀行というのはそんな考え方や、そんなやり方をする筈がないんです。何かがあります。銀行以外の何かが関わっています。その女の人は言ったんでしょ？ ペル

シヤ湾に行ったのは、亭主だけじゃない、誰か別の男がいたと。」

「うん、言った。」

「その女の人は、その別の男のことをもう少し詳しく話さなかつたんですか？」

「話さなかつた。しかし俺の勘では、そいつは銀行屋じゃない。」

「銀の鉱山のことをどうやって嗅ぎつけたんでしょね？」

これは公爵。

「それとも、ファードーシが俺達と連中の二股をかけたのかも知れない」これはドック。公爵を睨み付けて言う。「おい、ジャンフランコ、お前、ファードーシと二人で何かたくらんでいるんじゃないな？」

公爵はただ押し黙って坐っている。

アルバートが遮って言う。「いや、それは出来ませぬね。」

「何故出来ない？」

「ファードーシは、我々に百パーセント、下駄を預けています。我々がファードーシに融資した時の借用書の条件を覚えていますね？ ファードーシはこれらすべての借用書の連署人になってるんです。借した金は返還要求が有れば三十日以内に返さなければならぬ契約です。もしも返済できない場合は、銀採掘の仕事の半分の権利を我々に譲り渡さなければならぬ。あの人はそれをよく知っています。」

「多分ね。」と、嫌々ながらドック。「だけど、奴は俺達を厄介払いして、この銀行を乗っ取るうとしてるんじゃないか。そのためにあの二人の男を利用した。銀の仕事を独り占

めにしようとしてな。」

「いやドック、それは違う。」とアルバート。「たとえ誰かが、この銀行を乗っ取ったところで、乗っ取った人間は同じ借入書を引き継ぐことになります。その時の条件も一緒です。だから乗っ取っても何の役にも立ちません。これは追求の方向が間違っています。」

「じゃ一体正しい方向はどこなんだ？」

「正直言つて、」と、アルバート。「僕にも実は分からないんです。しかし確かなことは、誰かが銀を欲しがっているらしいってことです。銀行そのものは二次的な興味です。銀行なんてスイスには掃いて捨てる程あるんですからね。どうしてもこれは銀の筈です。」

ちようどこの時秘書がメモを持って入ってくる。一瞬誰に渡そうかためらった後、ドックにそれを渡す。

「何だこいつは。」ドックは吠える。「ほら、見てみる！」

彼はメモをアルバートに渡す。

「二人に読んでやれ。」ドックが言つ。

アルバートが読む。「ニコラス・トッピングという方が応接室でお待ちです。イランにおけるお互いの利益について、どなたかとお話したいとのことですよ。」

公爵が呆気に取られた顔になる。アルバートもだ。マーヴィンだけが、いつものように、何の感情も外に出さない。

「どうする。」ドックが会議用のテーブルを見回しながら聞く。

「こちらで考えるのは、もつ無駄です」と、アルバート。

「この男ですね、きっと。自分が筋書きを全部決めたと思っ

ているのは。それなら、話を聞こうじゃないですか。」

「その人をここへ。」ドックが秘書に言う。「そして、いいというまで、この部屋には誰も通さない。いいね。」

そして公爵に向かって、「あんたが議長役だ。俺はしばらく向こうに坐つてそいつを観察する。」

「マーヴィン」と、彼は続けて言つ。「ここを出て手配しろ。」

その男の顔写真を撮るんだ。前後左右。その男が出て行ったら、後をつける。お前一人でだぞ。その男の居場所を知りたい。」

マーヴィンが外に出る。とすぐ、秘書がドアを開ける。ニック・トッピングが秘書のすぐ後ろに立っている。今日はスポーツジャケットではない。紺サージの背広に白いワイシャツ、よく磨いた靴。それに薄皮のブリーフケースまで。敷居の向こう側で一旦立ち止まる。敵の最初の出方を待っている。

公爵の出番だ。「トッピングさんですね。」

「そうです。」大きい、はっきりした声だ。

「私の名はジアンフランコ・ピエトロ・アッヌンチオ・ディ・シラクーサ。この銀行の頭取です。こちらの二人、銀行の者です。」

ゆっくりと片手を伸ばし、テーブルに着いている二人を指し示す。紹介をする気持は無い。ドックもアルバートも立上る気配はない。

トッピングは、そんな不作法に気がつかないふり。

「まあ、坐ってください。ミスター・トッピング。どうぞそちらに。」公爵はテーブルの反対側の端を指し示す。トッピング、示された場所に坐る。真正面の窓から太陽の光がま

もに目に入る。公爵はその真向かい、長い檜のテーブルの反対側の端に坐る。ドックとアルバートはその中間の位置で向かい合って坐っている。トッピングは代わるがわるこの二人を見る。非常に注意深く。それから太陽を見、胸のポケットからサングラスを取り出し、掛ける。

「暫く誰も何も言わない。公爵が口を切る。」

「さて、ミスター・トッピング。お互いの利益について話し合いたいという御用件と伺いましたが？」

トッピングはこの質問を無視。公爵の存在自体をも完全に無視して、ドックの方に顔を向ける。

「長いラスベガス生活の後で、どうですか？ このルガーノは、ミスター・スマイス。ああ失礼、ミスターではなく、ドクター・スマイスでしたな。」

ドックはただ黙って相手の顔をじっと見るだけ。そこでトッピングは、反対側のアルバートの方を向く。

「ミスター・フィオーレ……ですね？ 今度お父上に会われたら、どうぞ宜しくお伝え下さい。お父上とは二三年前マイアミでちよつとぶつかった事がありますね。我々には共通の友人がいたんです、キューバ人の。あの時は、お互いの利害はどうやら一致していたとは言えませんでした。しかし、今回はそうありたいと心底願っていますよ。」

「分った、トッピング」遂にドックが口を開く。「無駄な話は止めよう。何なんだ？ そっちのお目当ては。」

「まず、あのカーテンを引いて欲しいな。こう眩しくちゃ叶わない。」

ドックは公爵に合図する。カーテンが閉められ、トッピン

グは眼鏡を外す。

「うん、これでいい。ところでここは誰が取り仕切ってるんだ？」

公爵が何か言おうとする。すぐにドックが遮って言う。

「俺だ、トッピング。」

「そうすると、あのお猿さんは誰なんだ？」トッピングは僅かに頭を回してテーブルの反対側を顎で示す。公爵の顔、真っ赤になる。

「気にするな。放つとくんた。」ドックが答える。

「分った。ところで、マーヴィンはどこだ。」

「あいつは出た。お前の写真を撮る手配でな。」ドックが答える。「どうやらその必要も無いようだ。」

「その通り。そして俺の跡をつけるのも無駄だ。俺はメトロ口ポールホテル、六一二号室にいる。」

「それで、どうだったんだ、ドバイからの空の旅は。」

「快適だったさ。」

「で、相棒はどうしたんだ？」

トッピングはちよつと眉を上げる。答えない。

「おいおい、トッピング。お前さんはなかなか切れる男だ。しかしこの点に関しては切れ方が足りなかったぞ。何故ラックマンを連れてこなかった。」

トッピングはにやりと笑う。

「ドック、あなたは噂通りの男らしいな。あなたとはうまくやっていけそつだ。」

「あてにして欲しくないね。」ドックが答える。「ところで、あなたのボスは、どんなに厄介な事に首を突っ込んだのか、

自分で分っているのかね。」

「止すんだ、ドック。あてずっぽうを言っつてこつちが騙され
ると思つたら大間違いだぞ。恥を知るんだな。」

ドックはにやりと笑つ。

「分つた、トッピング。そつちが切り札を出すのを、ゆつ々
り待つとするよ。」

「よし、それなら話がしやすい。なあドック、俺の依頼人
達はこの銀行を買収したいと言つているんだ。かなり高い金
額でだ。いや、誤解しないで欲しい。お前さん達を嵌めようつ
ていうんじゃないんだ、これは。今も言つたが、本当に高い
金を払うつもりでいる。ただその条件だが、素早く、静かに、
綺麗にやる。それが出来ればだ。」

「売らないと言えはどつなるんだ。」

「ドック、俺の口からそれを言いたくはないんだ。自分で考
えてくれないか。俺達の付き合いを最初から台無しにするこ
とはないだろう?」

「はつきり言つんだな、トッピング。さもないと今すぐ、そ
のケツを蹴つ飛ばして追い出してやる。」

「分かつたよ、ドック。そうでない場合はな、俺達は、可哀
相な、疑いを知らない、無垢なスイス人達に、連中の聖域中
の聖域である銀行界に、マフィアが侵入してきた事を知らせ
るだけよ。ジョー・フィオーレ、ドック・スマイス、それに
その仲間についての情報なら、厚さで十フィートじゃきかな
いくらの資料を持つてるんだ。もしその資料がベルンの銀
行管理委員会に送られたら、一週間もたたないうちにあんた
らはビジネスの世界から追い出される。まあ、こんなもんで

いいかな?」

「おい、トッピング、一つ言つて聞かせておかなきゃならん
ようだな。お前さん、ここから生きて帰れると思つているよ
うだが、なかなかいい度胸だ。ところが、その窓から、ルガー
ノの歩道のゴミになつて捨てられるかもしれないんだからな。
いいな。」

「おいおい、ドック。この話は紳士的に頼むぜ。」

ドックはまたにやりと笑つ。本来の自分に帰れて嬉しそ
うだ。この場面を楽しんでいる。

「そつちな、トッピング。ところでお前さんの事をニツクと
呼んでいいな?」

「勿論だ。こつちのことを仲間と思つて貰いたいんだ。」

「よし、なら、ニツク。いいか、これはお前さん一人の筋
書きだ。依頼人などいないと見た。くだらない芝居は止める、
んだな。」

「芝居じゃない。いるんだ本当に、依頼人は。」

「銀行の買収がその依頼人の目的なんだな? じゃ、イラン
の話は何なんだ。さつき秘書に言つていた、イランの話は。」

「ドック、その話を持ち出してきて嬉しいよ。忘れてしま
うところだった。」今度はトッピングがにやりと笑つ。

「初めお前さんがイランを持ち出した時」と、ドック。「俺
達ははつきり絨毯売りの商人がやって来たと思つたんだ。トッ
ピングっていうのはアルメニア人の名前だろ?」

トッピングは大声で笑つ。

「あんたは絨毯に興味があるのか? ドック。」

「そうさ、興味どころか、渋味も甘味もあるよ。」という答

え。アルバートはこういう無駄口は好みでない。本論に戻るべきだと思つ。

「ミスター・トッピング」と、アルバート。「あなたの身分証明書を見せてもらえると有り難いのですが。」

トッピングの顔から薄笑いが少しずつ消えて行く。彼はドックを見つめる。肩をすくめる。そして、フリーフケースを開ける。そこから二枚の小さな名詞を取り出し、一枚をアルバートに、もう一枚をドックに渡す。公爵には渡さない。

「ニック、ドックは名詞をちらりと見て、吐き出しそうな不愉快な声で聞く。「こんなインチキなものを出して、一体何のつもりだ。国際金属コンサルタント。住所、パナマ市及びリベリアのモンロヴィア。何だこれは。恥ずかしくないのか、ニック。」

トッピングはまた薄革のフリーフケースに手を突っ込む。今度是一通の手紙を取り出す。ちよつとためらう。それからその手紙をドックに渡す。ドックは読む。もう一度最初から読み直す。そして、その手紙をアルバートに渡す。

「これは本物のようですね。」数秒の後アルバートが言う。「本物だよ。」トッピングが答える。「だから、返してくれ。」アルバートは返す。

「どうしてまた、カリフォルニア・ファースト・ナショナル銀行ともあるうアメリカの大銀行の頭取がお前さんの持っているようなちつぽけな会社と代理人契約なんか結んだりしたんだ。」ドックが聞く。

「きつと頭取のフォアマンが俺様の正直さと率直さについて世界的な評判を知っていたからだろうね。」

ドックはこの冗談が気に入る。

「買収の値段の腹積もりはあるんですか？」話を遮ってアルバートが尋ねる。

「ああ、ある。ここでは口頭でやるしかないが。」

「分かりました。」アルバートが答える。「言ってください。」

「キヤッシュで五千万ドル」

「こんなちつぽけな銀行に？」信じられないというドックの反応。

「そうだ、五千万だ。ただ、あんた方に一つやって貰うことがある。何、たいした事じゃない。」とトッピング。「まず、ファードーシに貸している金を全部棒引きにする。その代わり、ファードーシの持っている土地、不動産をそっくりそのまま銀行の資産として頂戴する。その後だ。その銀行をこちらが五千万ドルで買い取る。」

「ファードーシ？ 何だそれは？」ドックが聞く。

「イラン人さ。美人の妹がいる。その男は、あんた方の銀行にかなりの金を借りている。銀獲得のための資金らしい。ドバイでの噂だかな。」

「五千万では安過ぎです」とアルバート。静かな話し方だ。

「そちらの言い値は？」とトッピング。

「六千五百万。」アルバートが答える。

「五千五百万でどうだ。」

「間を取るしかありませんね。」

「六千万か。そんなところか、落ち着き先は。」

「おい、待て！」ドックが大声を出す。「アルバート、お前何を馬鹿なことを言ってるんだ。こいつは銀行だけじゃない、

あの銀の鉦山も含めて六千万で買つと言つてるんだ。鉦山だけでも二億ドルの価値はあるんだぞ。」

「分つてます。」アルバートが答える。「でもスイスの銀行管理委員会が動き出したら、我々に残るものは何一つないんですよ。銀行も鉦山も、何も。係争財産保管人や清算人が、銀行の資産を全て競売にかけるんです。まあ、狡いことをして、良いものはスイス人に安く、残った物をアメリカ人、ドイツ人その他に高い金で売りつけるんです。銀の鉦山は恐らくスイス人でしょう。」

「おい、アルバート、お前どつちの味方なんだ。まるでこいつの肩を持つているみたいだぞ。」と、訴えるようにドック。

「ドック、僕は現実主義者なんです。」一瞬アルバート・フィオーレの声は彼の父親の声かと疑うほど似ていた。そして、眼鏡の奥の目。こちらも親父とそっくりな冷たく青い目だ。しかし、ジョー・フィオーレを思い出しても、ドックの怒りは収まらない。こぶしを挙げ、テーブルに思いっきり叩き付ける。

「俺は現実主義者なんかじゃないぞ。いいかトッピング、貴様だとか、貴様の後ろに付いているカリフォルニアの銀行屋連中なんか、この銀行を取られてたまるか。よく聞け、俺は本気だ。これが乗っ取られるぐらいなら、まずお前を先に片付けてやる。」

トッピングの表情が初めて少し不安そうな色を帯びる。そしてアルバートの方に目を向ける。

「ドック、」辛抱強くアルバートが言う。「この人を片付けても解決にはならないんです。」

「分つてる。少し黙ってる。いいかアルバート、俺達はちっぽけな銀行をこの腕で一人前にしてきたんだ。これは自慢したつていいんだ。俺達は百パーセントまともなやつてきている。お前も、俺も、それにあのマーヴィンもだ。俺達はやつた。力を合わせてやつたんだ。それをみすみす乗っ取られて。お前には誇つてものが無いのか?」

アルバートは黙つて坐っている。

「それに、ファードーシ兄妹はどうするんだ? あれはあれで俺達のためにやつてくれた。お前はそういう義理も無視して、あの兄妹の財産を処分しようつてえのか。そいつは汚ないぞ。お前つて奴は何なんだ。歩くコンピュータが聞いて呆れるよ。そういうことをお前、計算に入れていいのか。」

アルバート、これを無視。トッピングに訊く。

「トッピングさん、その六千万ドルはどこから出るんですか。」

「カリフォルニア・ファースト・ナショナル銀行が出す。この銀行が、俺の依頼人の代行を引き受けたんだ。そして、さっき手紙を見せたが、俺がその銀行の代理人をやっている。金の引き渡しはエスクロウ(条件付き発行証書)で行く。つまり、ロンドンのどこかの銀行にカリフォルニア・ファースト・ナショナルが六千万ドル預けておく。条件が達成されると……つまり、例のイランの土地、不動産の入手が終り次第だ……そのロンドンの銀行から自動的にシシリア・アメリカ銀行の所有者、或はそれが指名する人間、に六千万ドルが送金される。勿論、それと引き換えにシシリア・アメリカ銀行の全ての株式がそのロンドンの銀行に送られることになるが、この銀行の株式は無記名なんだな?」

「そうです。」

「ここで一番厄介なのは、例のイランの土地、不動産の入手だ。あんたらは、これを交渉する立場にあるんだろうな。」

「あります。」

「どのくらいかかる。」

「こういう交渉は、大抵三十日はかかります。」

「具体的に、この件の場合は？」

「同じですね。ただ、ファードーシが裁判に持ち込んだりすると、そうは行きません。」

「その可能性は？」

「あれだけの金です。何が起つてもおかしくありません。」

「すると、ごねられる可能性があるということか。」

「あります。ただ、やり方一つで……。」

「何のやり方だ。」

「ファードーシへの説明です。それに大きくよります。ファードーシの財産を何もかもかっ攫（さら）って逃げてしまつて、そんなことは出来ません。こちらがイランの土地、不動産を入手するには、ファードーシに充分な代償を支払わねばならないでしょう。それに、何故こつこつ事態に立ち至つたのか、そこをはつきりと説明する必要があります。つまり、もし我々が友好裏に事を運ばなければ、スイス当局がかなり非友好裏に事を運ぶだろうと。これは御親切にもミスター・トップピングが御指摘下さつた事なんですがね。」

「フム、で、誰がそのことをファードーシに説明するんだ？」

「多分、公爵ですね。気心が知れているのは公爵なんです。」

「さ。」

「今、充分な代償を支払うと言つたが」とトップピング。「何をあてるつもりでいる。」

「もうそちらは先刻御承知でしょうが、ドバイにかなり大量の銀の在庫があります。先月ひとつきで、鉱山の生産量は三百万オンスでした。その殆どが倉庫に入っています。この銀をそっくりファードーシに渡すんです。」

「そいつは、考えていなかった。」とトップピング。

アルバートが肩を竦めて、「それぐらいはしなければ、裁判になるでしょう。それも長い裁判に。」

「そいつは金がかかるな。」とトップピング、顔を顰める。

アルバートはまた、肩を竦めるだけ。

「ひとつきで生産量が三百万オンスだつてというのは、どうやって知つたんだ。」とトップピング。

「一番最近の報告です。ドバイから来た倉庫の荷物受領書に、」

「そうありましたからね。」

「アルバート、俺はあんたが気に入つた。」とトップピング。

「あんたは正直だ。ドバイでの在庫はこつちも調査してある。その数字はこちらの予想とピッタリだ。それで、今年の終りまでにどれだけとれる予測なんだ？」

「八月までは月間生産量は増加して行くでしょう。八月がピークで、月の生産量は五百万オンス。それ以降はこれの横ばい。」

「それがどれくらい続くんだ。」

「判断は難しい、とファードーシのところの技術屋の話です。しかし当分ピークは続くだろう、とも言っています。」

「すると年間六千オンスか。」

「おう、たいした頭だ。すぐ計算出来るじゃないか」とドッ

ク。「とにかく、金勘定はアルバートよりずっと上だ。おいアルバート、その銀は、だから年間でいくらになると思っているんだ。」

「今の相場だと一億ドルは下らないでしょうね。」アルバートは静かに答える。

「そうだろうが！」ドックが怒鳴る。「だったら、なんだつて、お前は、このうすのろ野郎に、さつさと消えちまえて言つてやらないんだ？」そして、こんどは少し静かに。「アルバート、こいつに騙されるんじゃないぞ。こいつは嘘つきなんだ。俺の言うことを聞け。この話はこれで終りだ。いいか。」

今度もアルバートは答えない。

「おいトッピング、とにかくこれは時間の無駄だ。ここにいる三人とも・・・勿論アルバートも含めてだ・・・この銀行を売る権利などありはしない。それにな、この俺が保証する。誰も売ろうなどと、そんな馬鹿なことを考えちゃいない。お前が買いたい？ いいだろう。オーナーに直接話すんだな。オーナーがいいと言うのなら、俺も文句はない。だがな、俺はオーナーがどんな人間かよく知っているんだ。そんなことをオーナーが一言でも聞こうものなら、お前がどんな目にあつか。ここに乗り込んで来たことをお前さん、さぞ後悔することだろうよ。」

ドック、立上り、蝶番が外れればかりの勢いでドアを閉め、会議室を出る。

「どつやらドックはすぐカッとなる性質（たち）なんだな。」とトッピング。

「ミスター・トッピング、」とアルバート。「どうぞあなたもお引き取りを。どんなことにも、やり過ぎというものがありません。今御覧の通りです。」

トッピング、納得する。去る前にも一つ質問する。

「電話は俺からか？ それとも・・・」

「こちらから致します。それまではこの銀行には立ち入らない方がいいでしょう。」

公爵は坐っている。何か深く考え込んでいる様子。

「実に残念だ」と公爵、アルバートと二人で部屋を出る時咳く。

トッピングは銀行からホテル・カスターニョーラに直行する。

ラックマンがロビーで彼を待っている。五階のラックマンの112
スイートルームに入る。

「それで？」とラックマン、ドアが閉まるとすぐ訊く。

「連中は売るな。」

「いくらでです？」

「六千万」

「それをドルに直すと？」

「何を考えているんだ。これはドルだよ。」

「六千万ドル？ 冗談じゃない。そっちこそ何を考えているんです。」

「なあラックマン、あんた頭が悪いんだよ、前にも何度か言っただけ。」

「そんな大金、うちの銀行が払ったことなど、今まで一度もありませんよ。」

「あんたの所で払えなんて誰が言ってる。」

「六千万ドル！」畏れを含んだ声でラックマンが叫ぶ。そして、「もう以前に説明したと思いますけど、うちの銀行は、あんなちっぽけなスイスの銀行をこんな法外な値段で買うなんて、そんなことは絶対にありません。これ以上議論すること自体が無駄、愚の骨頂です。話だけは頭取に報告しますが、それでお宅とは永久におしまいでしよう。それは保証しますよ。」

トッピングは無言。黙って薄單のブリーフケースを開ける。

「ここに手紙が有る。今朝ホテルに帰った時に渡されたものだ。読んでみるんだな。」

ラックマンは手紙を読む。そして、もう一回読み直す。

「馬鹿な。頭取があんたをうちの銀行の代理人に指定した？嘘だ。」

「いや、それが本当なんだ。頭取に電話して馬鹿呼ばわりされない前に、頭を冷やした方がいい。何かちょっと飲むんだな。俺も付きあう。飲みながらこの話の筋をひとわり説明してやるよ。前にも言った通り、俺はあんたをヒーローにしてやるうとしてるんだ、なあラックマン。さあ、その手紙は返してくれ。」ラックマンは手紙を返す。

トッピングは時計を見る。

「そうだ、やる事がある。まだ荷物もほどいてないんだ。すまない、飲むのは五時にしてくれないか。俺がここに来る。このホテルは気に入った。ちょっとあばら屋風なのが良い。こここのバーで会おう。」

ヴィラ・カスタニョーラのバーは柳の家具で揃えている。

だが、このバーのドライ・マテニときたらヨーロッパ中で、不味さで一二を争う代物。要するに最低と言つことだ。一口すすったラックマン、その不味さからおさらばするために、残りを一気に飲み干す。しかし不味さはそれで逃げはしない。思わず顔を顰める。丁度この時トッピング、彼のテーブルにやつて来る。

「すごい顔だな、ラックマン。俺の言つた事がそんなにこたえたのか？」

「こたえたなんてもんじゃ、きかないですわね。」

「何それ？ 飲んでるの。」椅子を引き寄せながら言つ。

「マテニ。とびきり上等なんですよ。やつて見ませんか？」

「そいつは御免だ。」トッピングはカンパリ・ソーダを注文する。

「さあ、仕事に戻るか。」

「そうしましょう。どうせそんなに時間はかからないでしょう？」

「ドナルド、あんた、俺の事を信用していないんだな？」

「いいじゃないですか、そんなことは。話を進めましょう。」

「分かった。話は簡単なんだ。第一にやること・・・シシリ

ア・アメリカ銀行はファードーシに対し、彼が共同署名している融資の回収を迫る。ファードーシは急な返済は不可能。

そこで銀行は、担保物件であるイランの銀山の権利の半分を手に入れる。この結果、銀山の権利は百パーセント、銀行の物になる。次にやること・・・カリフォルニア・ファースト・ナショナル銀行が六千万ドルをエスクロウ勘定で、ロンドン

のウインスロップ銀行に振り込む。この金はシシリア・アメリカ国際銀行の全社外株式がウインスロップ銀行に送付された時、これと引き換えに振り出される。現経営陣の手に移るまでは、発行株式は五万株だった。それが、新経営陣になり、預金高の増加に伴い、資産増を目的に増資を行ってきた。その結果、今では二十五万株の社外株式が存在する。連中は、ウインスロップ銀行にある六千万ドルを手に入れるためには、この二十五万全ての株式を送付しなければならない。」

「この銀行は最高に見積もっても一千万ドルがいいところで、六千万ドルなどと、間違い沙汰ですよ。しかしまあいい。とにかくそっちの話をも今のところは聞くことにしましょう。それでどうなるんです?」

「これでお前さんのところの銀行は、ルガーノの銀行を買収したことになる。それも、六千万ドルの値打のあるイランの銀山を含んでな。そこで次に、またウインスロップ銀行にエスクロウ勘定を作る。売りに出すのは今度は、そちらの方だ。売り物はイランの銀山の権利全部。我々がこいつを、八千五百万ドルで買い取る。」

「我々とは誰の事なんです?」
「リヒテンシュタインにある会社だ。名前はフレンドシップ・インターナショナル」

「なるほど。だが、待つて下さい。イランの銀山は六千万ドルじゃなかったですか? 何故八千五百万ドルも払うんです?」
「それはな、ルガーノの銀行がイランの銀山の半分を所有していたからさ。長期支払いだから、貸借対照表上、資産勘定で二千五百万ドルで計上されている。我々がそれを買い取る

うっていうんだよ。おいおい、ラックマン、あんた銀行マンだろ?」

「それで?」とラックマン。まだ少し飲み込めない所がある。

「それだけさ。我々は銀山を買い、あんたのところは銀行を手に入れる。しかも元手ゼロでだ! あんたもさっき言ってたろう、この銀行の価値は一千万ドルくらいだ。俺の言ってる事が分かったのかな? ラックマン。あんたはこれでヒーローじゃないか。」

「単純明解ということか・・・」

「そうとも。ただ大したことじゃないが、一つだけちょっとしたことがある。」

「やはりね。来ると思っていましたよ。」

「どういう意味だ?」

「いや、何でもありませんよ。ただ私も、ちょっとしたことがあるような気がしていましたから。」

「心配は無用だ。本当に何の害にもならないものだ。」

「何のです?」

「あんたはルガーノの銀行を買収するに当たって、その基礎資料を作るんだろ? つまり、完璧な報告書をだよ。」

「勿論ですよ。」

「そいつは会計検査報告書の一種なんだろう?」

「そうです。銀行の本部に居る人間が、電話一本でこんな大金を出す訳はありませんからね。」

「それはそうだろう。それで、最終的にはこの報告書はお宅の銀行の役員会にかけられるって訳だ。そつだな?」

「勿論です。ただ、繰返しますが、私は頭取がこんな買収話

に乗りつこないと思つています。仮にです、仮に取り上げられたとすればの話ですが、当然役員会にかけられません。それも、全員出席の役員会に。五百万ドル以上の買収案件は、すべて全員出席の役員会決議事項ですからね。しかし、実態としては事後承認ですね。特にうちの銀行は、フォアマン頭取個人の力で、まったくのゼロから、僅か三十年で今のような大銀行にのし上がったのですから。現実の決定となれば、フォアマン頭取の腹一つです。」

「そういうことを俺は訊いているんじゃないんだ。結局は役員会は、その議決に預かるんだらう?」

「実態は、頭取が決めるんですからね。そういうのは議決に預かるとは言わないでしょう?」

「いや、形式的には、役員会にかけるといふんじやないか? 役員連はやはり議決に預かるんだ。少なくとも、あなたの作った報告書を見る。そこが問題だ。あなたのところの役員連中はお喋りだからな。秘密なんてことが守られたためしがない。」

「止めて下さいよトッピング、いくら何でも酷いです、それは。まあいい。先に進むために訊きましょう。秘密が守れないとどうだつて言つんです?」

「つまりな、俺達はアメリカ中に、イランの銀山の話をばらまいて欲しくないつてことさ。だから、あなたの作るルガーノの銀行の会計検査報告書から、銀山の資産の話はすべて消して欲しいのさ。」「それは無理ですよ。出来る訳が無い。それだと、帳簿から二千五百万ドルの資産が消えて、勘定が合わなくなる。」

「無理でもないさ。何か別の資産をでっち上げるんだ。その

二千五百万ドル分のな。」

「例えばどんな?」

「そこが思案のしどころじゃないか、 دونالد。何かいいアイデアはないかね?」

「馬鹿馬鹿しい。そうだ、イランにある売春宿全部つてのは名案じゃないですか? まてよ、それでも二千五百万ドルにはならないか。」

「銀行は、そんな資金を寝かせるような投資はしないだらう? もっと他に思いつくものはないのか?」

「待つて下さいよ、トッピング。あなた本気なんですか?」

「勿論だ。本気も本気、大真面目だ。」

「重大な法律違反になるんですよ。分かっているんですか?」

「法律違反? この国の法律に違反するつていうんだ?」

「スイスのじゃないぞ。スイスで文書偽造をしようとしているんじゃないからな。アメリカの銀行への報告書を作るつてしているだけだ。スイスとは何の関係も無いんだ。」

「それじゃアメリカでは?」

「全く問題なし。その点は調べてある。アメリカ国内の銀行が外国の銀行を買収する場合に、それを連邦準備銀行に報告しなければならぬなんて規則はないんだ。規則がなきゃ、破りようが無いだらう?」

一寸の間ラックマンは黙り込む。ここは彼の不案内な領域だ。確信が揺らぐ。トッピングがいう事に一理あるらしい。なに、最後には簡単にチェック出来る。

「女郎屋が駄目なら、他にどんな案があるんです。」

「イランと言えば、最初に頭に浮かぶのは何だ?」トッピン

グが聞く。

「石油ですね。」

「良く出来ました。さて、ファードーシの持っている土地は、どこかイランの油田の近くなんじゃないのか？」

「そんな事知りませんよ。」

「そうなんだ。ちよつと境界のところにあるんだ。」

「それで？」

「だから一番辻褃のあう商売といえば、倉庫施設への融資と
いうことになる。原油を満タンで溜めておいて需要に応じて
出荷する大きな原油の貯蔵タンクさ。世界中の大きな油田に
は必ずこういうタンクが隣接して作られている。そして、銀
行はみなこれが好きなんだ。原油でいっぱい巨大タンクく
らい担保価値のある物は無いからね。」

「そう言えば思い出しました。一三年前の事でしたよ、確か。
アメリカン・エクスプレス銀行が、サラダオイルは絶対安全
な担保物件だと思っていたんですね。イリノイとテキサスで
そいつを詰めた巨大なタンクがあつたんです。ところが、チェッ
クしてみたらタンクは空だった。」

「今やっている話とそれが、何の関係があるっていうんだ？」

「別に。ただその時文書偽造をした男は、今牢屋に入つてい
ますからね。いつ出られるのかな、そいつは。」

「ラックマン、君はひどく頓珍漢なものを引きあいに出すね。」

それは詐欺の話だ。誰かが大金を失っている。こつちの話は
全然違う。誰一人損をする者はいないんだぞ。誰も金を取ら
ねなければ誰も訴えたりはしない。これが、ニック・トッピ
ング様の、人間行動の第一原理だ。」

「分かりましたよ、トッピングさん。その原理を覚えておき
ましょう。まあ、あと数分間はね。ところでこの馬鹿げた会
話をもう少し続けることにして、お訊きしますけどね、原油
で満タンだというその偽タンクの証明書を一体誰が作るん
です？」

「そいつは簡単、打つてつけの男がいるんだ。マーヴィン・
スキナーといってな、例のルガーノの銀行にいるんだ。奴は
証明書類の偽造にかけては世界一なんだよ。」

「そんな男が、銀行で働いてるっていうんですか？」とうと
ラックマン、最初の自信がぐらつき始める。

「そうさ。でもこいつは口外無用だ。奴はイランの貯蔵タン
クの原油貯蔵証明書を、エクソンも見破れぬぐらいの出来栄
で偽造できる。」

「銀行の現経営陣も、このスキナーという男を知っているの
ですか？」

「おいおいラックマン、そう大袈裟に考えるな。スキナーは
あんたが銀行を買収した後まで居残るわけじゃない。そうだ
ろう？ あの銀行の重役連の一人なんだぞ、あいつは。あん
たがあの銀行の経営権を握つた時に、あの重役連が居残つて
いる訳がないだろう。それともあんた、スキナーに残つてい
て貰いたいのか？」

「冗談は止めて下さいよ。でも、さっきの言葉で私はちよつ
と心配になってしまいましたね。銀行の書類をみんなあの男
が改竄（ざん）しているってことはないのかな。貸借対照表
の残りの部分も全部。そうじゃないってことが言えるん
ですか？」

「そうじゃないからそうじゃないとしか言えないな。しかしどっちみち、あんたは銀行に行つてそのことを確かめるんだ。それがあんたの一番の仕事だ。そうなんだろう？」

「買収するつてことになればそうですけど、どうせこの話はここでペチャクチャ喋るだけで終りの筈ですよ。フォアマン頭取はこんな取引に手を出すはずがないですからね。」

「またそれが。買うか買わないかの結論は頭取が出すんだろう？」トッピングはそつげなく答える。「まあどっちに決めるにしろ、フォアマンは時間をかけずに結論を出さなきゃならん。俺達のグループがこの取引を急いでいるからな。だからフォアマンとしちゃ、皿に載せられた料理を食うか棄てるか、手つ取り早く分る方が有難いんだ。ということは、あんたの報告書の結論次第つてことさ。これで話は終りだ。さあ、全体の筋道をもう一度おさらいだ。今度はメモを取りながら行くつ。」

今度はラックマン、メモを取りながら話を聞く。全部が終わつた時、トッピングは言つ。「さあ、すぐフォアマンに電話するんだ。」そしてトッピングは去る。

一四

このあと一時間の間に、三つの重要な会話が電話で交わされる。これらの会話が原因となつて一連の事件が起こることになる。まずスイスの銀行業が大揺れに揺れ、世界の銀相場が恐慌に陥り、うぶな投資家達が文字通り数十億ドルもの損害をこうむり、二三の賢い投資家が大儲けをする。これら全てが電話一本で起きるのだ。アレクサンダー・グラハ

ム・ベルも罪なことをしたものだ。植物学でもやっていたらよかつたのだ。そつしたら、世界はどんなに平和だつた事か！

第一の電話。それはルガーノのホテル・ヴィラ・カスタニョーラにいるドナルド・ラックマンからサンフランシスコのカリフォルニア・ファースト・ナショナル銀行のジョージ・フォアマン頭取宛だ。こんな具合だつた。

「フォアマン頭取ですか？ スイスのラックマンです。」

「ああ、ちよつと待つてくれ。」誰かが十五分ばかり頭取室を出るよう命ぜられたようだ。「さあいいぞ、ラックマン。続けてくれ。」

「頭取、頭取はルガーノのシシリア・アメリカ銀行の買収に關してニコラス・トッピングを当行の代理人にされたと理解しておりますが、それで宜しいんですね。」

ラックマンは自分の内心のすねた気分が声に出ない様に喋つたつもりだつたが、駄目だつた。

「その通りだ。ラックマン。」

「トッピングがこれまでやつてきた事をそのままご報告します。私の意見は一切つけ加えませんが、それでよろしいでしょうか。」

「そうしてくれ、ラックマン。余計な注釈は一切不要だ。」

「トッピングによると銀行の買収は出来ると言つています。それにあのイランの鉾山も丸々百パーセント、その権利を買収できるだろうと言つています。鉾山というのはつまり、以前ドバイからの電話でご説明したと思ひますが、トッピングが買おうとしている例の鉾山のことです。」

「鉾山の話は聞いた。それでいくらで買えるんだ、その銀行

は。」

「問題はコストではなく、基本的にはリスクだと思えます。トッピングは途方もない金額を言っています。大変な金額です。彼が完璧で、非の打ち所のない会社を代表しているのなら別ですが、私は……」

フォアマン頭取が途中で遮る。「非の打ち所のない会社を代表しているんだ、彼は。トッピングは我々の銀行の少なくとも四、五倍の資産を持つ機関に属している。その上、その機関はたった一人の男が所有し経営している。フランク・クックだ。君でもこの名前は聞いたことがあると思うがね、ラックマン。」

確かに聞いたことがあった。そして、ブツブツとその旨、電話に向って呟く。

「クックと、私とは、しょっちゅう綿密に連絡を取り合っている。ロンドンと西海岸だ、そう便利という訳でも無い。しかしそれに関係なくだ。だから、いいか。君のその頭に叩きこんでおくんだ。トッピングがやったことをそのまま私に報告すればいい。君の注釈などは一切不要だ。トッピングはフランク・クックの言う通りに動いている。こつちも同じ。君は私の言う通りに動くんだ。取引をするかしないかは、クックと私が決める。決めた後の細かいことは君とトッピングがやる。これからはそのつもりで行動するんだ。分つたな。」

「分りました、頭取。ただ、今の今まで私は……」

「……知らなかった。今では分つたんだな？」

「はい、頭取」

「では、報告の続きだ。私はひどく簡単なことを君にきいた。」

覚えていないだろうから繰り返す。いくらで買えるんだ、その銀行は。」

「ただで買えます。」

「銀行は、値打ちとしては？」

「分りません」

「見当でいい」

「一千万ドル……です。」

「それがただで買えるんだな？ その仕掛けは。」

「それが、ちよつと込み入ってるんです」ラックマンは答え、慌てて次を続ける。

「まず我々は、スイスのこの銀行の社外株券全部を六千万ドルで買います。ロンドンの銀行のエスクロウ勘定で行います。」

次に我々はイランの不動産分をこのスイスの銀行から引き出して第二のエスクロウ取引にいきます。フランク・クック・グループは、リヒテンシュタインの会社を使って、これを八千五百万ドルで買います。これで我々は差し引き二千五百万ドルのプラスとなりますが、この二千五百万ドルは、そっくりそのままスイスの銀行に返されます。つまり、イランの不動産分の弁済にあてる訳です。これで我々に残る金はゼロ。イランの不動産分がなくなったスイスの銀行は我々の手に入る。つまり、ただで銀行が買える訳です。」

「今の話のどこが込み入ってるんだ」とフォアマン。

「ええ、ここまでは込み入っていません。しかし、相手は奇妙なことを言ってきているのです。銀の鉱山に関する書類を一切合切、これから我々が……いや私が、作る会計検査報告書からはずせ、と言つんです。」

「それで？」

「はい、頭取、私の意見では、いくらなんでもこれは……」
「ラックマン、君は今スイスにいるんだぞ。カリフォルニアにいるじゃないんだ。そっちでの銀行やビジネスの世界は我々の所と、とんでもなく違っている。イタリアやフランスの連中を見てみる。奴等は税金だつて払わない。こつこつ世界で成功するにはどうするか？ 答は「郷に入れば郷に従え」だ。そんなことを気にしてどうする。」

「しかし……」

「いいか、私は君に命令する。トップピングの言う線に沿って進めるんだ。」

「ここまで言われてはラックマン、どうしようもない。」

「かしこまりました、頭取。」

「一刻も早く銀行に行き給え。そうして、会計検査報告書を作るんだ。全部揃ったら、すぐに私に送る。「当該銀行の買収を適切と判断する」という君の意見書を添えてな。」

「かしこまりました。」

「それから、エスクロウ取引はロンドンのどこの銀行を使うんだ。」

「ウインスロップ銀行です。ロンバード・ストリートです。」

「分った。会計検査報告書と一緒に、特別ファンド新設申請書を入れておいてくれ。ウインスロップとはこちらが直接あたる。勿論君の会計検査報告書で全て問題無しと分った上でのことだ。」

「分りました。」

「よくやっているぞ、ラックマン。丁度こちらにうまい話が

転がり込んだのを、君は実に見事に処理している。私も最後の手打ちの時に合わせて、出来るだけ早くそちらに行く。家内も一緒だ。この間、あのカントリークラブでは楽しかったな。あの続きをそちらでやるつ。楽しみにしているぞ。マージョリーは君の奥さんのことを気に入っている。奥さんに宜しく言っておいてくれ。」

「はい、申し伝えます。」

電話が終わるときカチャッと言う音が二回した。ひとつは五千マイル向こうのカリフォルニアでフォアマンが受話器を置くときの音、もう一つは、数ヤードしか離れていない隣の寝室でラックマンの妻が受話器を置く音だ。

第二の電話はルガーノのメトロポールホテルにいるニック・トップピングと、英国バツキンガムシャーのマーロウ・オン・ザ・テムズの直ぐ近くにある屋敷のフランク・クックとの間に交わされたものだ。こちらは、それほど長くない。

「会長ですか？ トップピングです。」

「ああ、ニック」

「どうやら八千五百万で買えそうです。」

「本来、どれほどのものなんだ？」

「現在は月産三百万オンスです。しかし生産量は増加していて、八月半ばまでには月産五百万オンスになる予定です。ということ、ピーク時は年生産量六千万オンス、時価で一億ドルです。あとどれだけ埋蔵されているかは誰にも分かりません。多分その三倍くらいはあるでしょう。ですから、私の読みでは最低でも二億五千万ドルにはなると思っています。」

「そして、そいつを暫くの間地下に眠らせたままでおけば、価値はもつと膨らむという訳だ。」

「そうです。二倍の価値には出来ません。おっしゃるとおりです。今現在は先物相場で買ひに出て、価格を充分釣り上げてから、現物の銀も売りに出すって言う戦略ですね。」

「ラックマンはどんな具合だ。」

「想像していた通りの男でした。ちよつと鈍いです。でも、会長からサンフランシスコの方に手を打って下されば、うまく動いてくれると思います。」

「もう手は打つてある。」

「ああ、それなら大丈夫です。」

「ところで、いつ終るんだ？ この仕事は。」

「多分、二週間ぐらいで。」

「すると、それまでに現金八千五百万ドルを用意すること、か。」

「はい、そうです。何か問題がありますか？」

「いや、別に。具体的にはどうやるんだ。」

「エスクロウ取引を使います。フィオーレ・グループは銀行の株式券全部と鉱山の権利書をエスクロウに入れ、これと引き換えに、カリフォルニア銀行はフィオーレ・グループに六千五百万ドルを支払います。」

「それで？」

「カリフォルニア銀行は、鉱山の権利書を二番目のエスクロウに入れ、これに対して我々は八千五百万ドルを支払います。」

「カリフォルニア銀行は六千五百万ドルを自分の手許に残し、鉱山の資産分として、二千五百万ドルをスイスの銀行に入れます。」

「これで全て完了です。」

「フィオーレ・グループがゴネはしないか？」

「多分ゴネません。アルバートが、合理的に物を考える男なんです。ただ、ドック・スマイスがひどく頭にきていて、でも、そのうち冷静になる筈です。」

「フム。それで、例のイラン人は？」

「事態が分ると、ちよつと暴れるかも知れません。しかしどの道、鉱山は手放さざるを得ないでしょう。ただ、彼に少しは残しておいてやらなければいけません。例えば、ドバイの倉庫に既に入っている銀とか。」

「よくやった、トッピング。一段落したらロンドンに帰って来てくれ。さっきのエスクロウ取引には、君にも立ち会ってもらいたい。」

「そう致します。」

第三の電話は会議電話だ。少なくともスイス側はそうだ。

参加しているのは、ルガーノのシシリア・アメリカ銀行にいるドックとアルバート、それにラスベガスのジョー・フィオーレ、この三人。電話がつながると、ドックが口火を切る。

「ボス、こちら、ドックです。これは会議電話で、もう一つの受話器にはアルバートがいます。」

「何かまずいことか。」

「もしもし、お父さん？」これはアルバート。

「どうしたアルバート、何かまずい事が起きたのか。」

「まずいかならないかは、考え方によるんですが。」

「とんでもない」とドックが口を挟む。「考え方になんかよ

りはしない。ひどくまずいことになったんです、ボス。我々だけで何とか片がつけられますが、そちらからの援助も必要なんです。」

「何をぐだぐだ言ってるんだ、馬鹿野郎！ 何が起きたかを早く言っただい！」

「銀行を乗っ取るうとしていた奴がいるんです。」

「何だと！ そんなことをさせてたまるか！」とジョーが金切声を上げる。

「そうです。俺もそう言ったんです。」とドック。

「誰なんだ？ 乗っ取るうって奴は。」

「ニック・トッピングという名前の、ちょっと頭の切れる野郎です。ボスを知っているといっていました。」

「トッピング？」

「そうです。でっかい野郎です。年は四十五、六。マイアミだの、キューバだの、何かさかんにボスの話をしていました。」

「ああ、あのトッピングか。」しばらく沈黙が続く。

「どっしたんです？ ボス。まずいんですか？ この男は。」

「まずいな。」

「こいつの親玉つてのは誰なんです。」

「大物中の大物だよ。フランク・クックという男だ。」

「マイアミの野郎ですか？」

「何をとぼけた事を言ってるんだ。こいつは世界でも十の指に入る金持ちだ。」

「その男の下で、トッピングは何をやっているんです？」

「クックの懐刀だ。一時、財務省で働いていた。麻薬にも関係したことがある。それから、ラテン・アメリカの電信電話

会社に移った。そのあと、ベルギーの会社に入ってコンゴで働いた。ひどく危ない男、本物の糞野郎だ。」

「カリフォルニア・ファースト・ナショナル銀行というのを聞いたことがありますか？」

「ウム、名前は聞いたことがあるな。」

「でっかい銀行です。トッピングはその銀行の代理人をやっていると言っています。」

「馬鹿なことを。あいつは真正銘クックの手下だ。銀行など関係ない。」

「そうですボス、その筈なんです。でも何かワケがあるんじゃないでしょうか、このカリフォルニアの銀行を前面に出しているのは。」

「フム。」

「はつきりとは俺にも分らないんです。でもこれだけは言えます。トッピングは銀行そのものには全然興味がない。銀の

鉱山なんです、狙っているのは。」

「それだ。クックは銀の業界を牛耳っているからな。」

「どうしてボスはクックのことをそんなによく知ってるのですか？」

「昔一時期、彼はここでホテル事業をやっていたんだ。ヒューズが乗り出す以前の話だ。そのあと、どういう訳か、急に身を引いた。」

「トッピングはこっちの正体を全部知っているようですよ。」

「それがあいつの手なんだ。うまいだろう？ やり方が。」

「うまいです。」

「買取価格は言っただけ来たのか？」

「五千万、と言つてきました。アルバートが提示した金額が六千五百万。まあ、本当に買収となれば、落ち着く金額は六千万です。」

「フン、俺はせいぜい一千万くらいだと思つていたがな。」とジョー・フィオーレ。

「ボス！　まさか売るつもりじゃないんでしょね。トップピングの奴にしてやられても平気なんですか。」

「トップピングじゃノーだ。しかし、フランク・クックなら仕方が無い。」

「そのクックつて野郎はスーパーマンなんですか？」

「まあな。」

「ねえボス、俺達二人は長いこと一緒にやつて来ましたよね。」

「そうだ。」

「俺は一度だつてボスに物を頼んだことはありません。頼まれたことをやってきたんです。それも立派にやつてきた。そうですね？」

「そうだ。」

「今度だけはこちらから頼みたいことがあるんです。」

しばらく沈黙が続く。そして、

「よし、言ってみる。」

「連中の言いなりにならないで欲しいんです。少なくとも、もう暫く待つて欲しい。抜け出せる方法がある筈です。それをつを捜してみます。今までだつて俺は必ず見つけて来たんです。頼みます、ボス。」

「ドック、今度ばかりはお前の敵つ相手じゃない。」

この時始めて、アルバートが割つて入る。

「お父さん、実は銀行の買収だけじゃ収まらないんです。他にもとばつちりを食つた人間がいるんです。」

「誰なんだ、それは。」

「ファードーシ兄妹です。イランの銀の採掘で、我々と組んでいる人達です。去年の夏、お父さんも会つたでしょう？」

あの二人も巻き添えを食っているんです。」

「どういうことだ。」

「敵の本当の狙いは、銀行の買収ではなく、イランでの銀の採掘の完全停止なんです。そのためにあの銀の鉱山を、ファードーシから買い取れ、そしてクック側に渡せ、と言われているんです。」

「それは出来るのか？」

「出来ます。」

「出来るならいいじゃないか。何が問題なんだ？」

「急いでやらなければならぬということが一つ。もう一つは、ファードーシがこねる可能性がある。」

「アルバート」父親は言う。「そいつはお前の手にはおえないな。お前はまだ若過ぎる。」

「その通りだ。」ドックが遮つて言う。

「ドック、お前は黙っている。」ジョー・フィオーレが抑えて言う。「アルバート、お前の考えを言ってみる。」

「公爵と僕と二人でイランへ行ってファードーシ兄妹に、事と次第を正直に話すんです。」

「馬鹿を言うな。」ドックが言う。

「ドック」フィオーレが注意する。「お前は黙っているんだ。それでアルバート、何故公爵なんだ。」

「一番気が知れているからです。それに、親類同士でもあります。」

「ちよつと待て」再びドック。「そんな必要はない。」

「さつき言った通りです、ボス。ここは俺にまかせて下さい。必ずいい手を見つけます。俺にチャンスを下さい。」

電話の向こう側、ラスベガスで長い沈黙。

「OK」とつとつ、ジョー・フィオーレが答える。「ドック、お前の好きなようにやってみろ。ただ、この取引を打ち壊すのは駄目だ。いいな。それからアルバート、お前は公爵と一緒にフアードーシの説得に行つてこい。ただいいか、二人に言つておく。このところははずつと、俺達がフランク・クック側の話に乗っているように見せておくんだ。特にドック、お前は気をつけるんだぞ。分つたな。」

「俺の考慮時間の期限は？」

「アルバート、」父親が聞く。「お前の方の仕事はいつまでに終る。」

「一週間、長くても十日です。トッピングははつきり言っています。急いでいると。」

「分かつた。ドック、お前には一週間与える。それが過ぎたらお前達二人とも俺の所へ戻つて来い。それからドック、もう一度注意しておく。お前が完璧な対策を見つけない限り、絶対この取引を棒に振るなよ。フランク・クックに抵抗するのは難しい。あの男は負けるのが嫌いなんだ。俺達に負けるぐらいなら、銀行だろうが、銀の鉱山だろうがみんな潰れつつ構わないと思つている。あの男をやつつけるには、よっぽどすごい手を考えつかなきや駄目だ。これは容易なことじゃ

ない。まず無理だろうな。しかしまあいい、お前に一週間やる。頑張つてみるんだな。」

「分つた、ボス。」ドックは落ち着いた声で答える。しかしこの返事がやつとというところ。

「それからアルバート、」ジョーは言う、「イランでは気をつけるんだ。いいな。」

「はい、気をつけます、お父さん」

「ボス、もう一つ聞いておきたいことがあるんですが。」とドック。

「何だ？」

「俺はまだここを任されているんですね？」

「そうだ、そこはお前の担当だ。俺の命令に従う限りな。」

一五

ドックは確かに銀行の仕事が続けたかつた。ドックが昔から確保したいと願つていたもの、それも生涯ずっと確保したいと願つていたものが、今やつと手に入ったと思つたからだ。確保したかつたものは何か。それについて誤魔化そうなどと、ドックは思つちやいない。尊敬だ。

尊敬。社会からの尊敬。仲間からの尊敬。ドック自身が自分に対して持ち得る尊敬。彼は最近になつて考えるのだが、それは、彼のような人間にとつては到底達成出来ない夢だつたのだ。ドックは父親といつものを知らない。母親は、全ての幻想を取り外してみれば、単なる売春婦でしかなかつた。それも高級なものではない。単なる安っぽい売春婦だ。そしてドックの本名は、シエンキエウィッチだ。ミルウォーキーの人間にさえ、この名前は嘲笑に値した。学歴など

ある訳がない。仲間の浮浪少年と街で覚えたこと、刑務所の訓練用の中庭で覚えたこと、それが全てだ。職業は、徒党を組んでやる犯罪だ。他人の金を盗む。必要とあれば、相手を傷つけても、悪意からやるのではない。必要に迫られてやるのだ。

しかし今では、その必要はなくなったのだ。いや、過去の話ではない。これからずっと不要なのだ。彼、ドック・スマイスは、ついに他の普通の人間と同様になったのだ。普通の人間の生活を送る。いや、いかがわしい目的のためにその振りをするのではない。彼、アルバート、マーヴィン、それに公爵、が力を合わせた結果なのだ。正直の話、今ドックが持っている金は真正正銘自分自身で稼いだ金なのだ。糞っ！

しかし折角手に入れたその物が、この新しい事態を乗り越えなければ、保って行けないのだ。ドックはつぶな男ではない。しかし、ジョー・フィオーレとの電話で、最初は奇妙な感じ、次に失望、それからむかつ腹がたつて来た。自分がその一員になろうとしていた社会、所謂「まともな」社会は、実際はまともではなかったのだ。銀行家は紳士だとされている。会社の重役達はルールブック、つまり中流の上に位する男達の会社及び家庭における善悪の基準が示されている本、に書いてある通りの生活を送るものとされている。腕づくのこり押し、ニック・トッピングのような輩（やから）、強請（ゆすり）、のよつなものは、ドックの昔の社会に属するもので、この新しい社会にはないものと決めてかかっていた。

ところがそれは、両方の社会に通じるものだったのだ。全く同様に、違つのはただ、使用される言葉だけだ。ジョー・フィオーレの類はボスとは呼ばれず、社長。その用心棒は、セキユリティー・コンサルタント。偽造の名人マーヴィンの類は、クリエイティブ・ア

カウンタント。それからアルバートは？ まあ、コンピュータか。そのホワイト・カラーの御主人と同様、全く倫理感抜き。それから公爵は？ これは簡単だ。広報宣伝係だ。マスコミ、政治家、それに浮気な女まで、何でも手玉に取るのがその役目。

もう十一時はとくに回っていた。外でじっと坐っていられる程ではないが、暖かかった。ドックは一人で外気にあたっていたかった。そこで散歩に出たのだ。まず山道を登って、ガロナーの上にある行き止まりのところまで。それから引き返して、本当に自分の「家」になってしまった、例の別荘まで。これほど自分の住み家だと思つた家は今まで一度もない。

「だが待てよ」と、その家の光が見えてきた時、ドックは考える。「連中は殺しまでやるか。これが二つの社会の本当の違いではないのか。これがギリギリの境界だ。確かに連中は人間をやつつける。小突いたり、押しのけたり、ゴミの山に頭を押し付けたり、職を、金を、名声を、人間から奪つたりして。しかし、殺すまではしない。

この質問は全然ドックにとって机上の空論ではない。何故ならドックはこの時点で既に、結論が出ているからだ。フランク・クックは殺さなければならぬ。勿論、前段階はある。クックに会い、取引をし、食ひ下がる。しかし、うまく行かない時には殺すまでだ。

クックがいなくなれば、振りだしに戻るに決まっている。例えばジョー・フィオーレが殺された場合だって同じだ。後継者争いの間、暫くは混乱がある。犯罪の世界でも実業界でも、これほど絶対的な力をふるっていた人物の後を継ぐには周到な用意が必要だ。簡単には誰も動きがとれない筈だ。

その間にドックは例のルールブックに戻ることが出来る。何故ならドックは、未だにルールブックの存在するよき社会がこの世にあ

ることを確信していたから。それがこの世の大多数の善人の生きる道なのだ。フランク、ニック・トップピングのよつな輩（やから）、それにカリフォルニア銀行、こいつらが狂っている。例外なのだ。どんな上流の社会にも、変種は現れるものなのだ。

やつとドックが別荘に入った時、いつものようにアルバートは居間で本を読んでいた。

「それで？」とアルバート。「打開策は？」

「まだだ」と不機嫌にドック。

「じゃ、さしあたりすることは？」

「トップピングと例のカリフォルニアの銀行の男と会って、書類だけは揃えるんだ。それから、お前はイランに発つ。但し、公爵があちらで事を即座に纏める自信がなきゃ駄目だ。」

「それでドック、あなたは何をやるんです。」

「また考えることにする。いい手が浮ぶまでな。お前も少し手伝ってくれると有難い。」

「いいですよ。どう手伝つんですか？」

「このフランク・クックって奴の狙いは何なのだ？」

「あの鉱山から、銀の生産を即座に停止させたいらしいですね。」

「何故だ。」

「世界の銀の総量を少くしたいんですよ。今まででももう、一・二九ドルから一・四五ドルに上りました。供給が少なくなれば、三ドル、或はそれ以上に跳ね上がりますからね。」

「それがクックの狙いなのか。」

「ええ、どうやら。」

「このクックって野郎はそんなことを一人でやれる程力があるのか。」

「そうですね。投資家達を一斉に同じ向きに並べることが出来さえ

すればです。」

「どついつ意味だ、それは。」

「世界中の人達が、銀はほとんど足りなくなってきた、と思えば、みんな商品取引で買いに回るんです。だから銀の値段は上る。

しかし、もし急に、銀が大量に出回り始めた、と連中が思うと、値段が下るだろうと判断する。手持ちの銀で損をすることを怖れて、売りに回るんです。すると、ドンドン銀の価格は下る。最初の二・二九ドルにまで、する。クックの手持の大量の銀は、価値がなくなる。」

「そつすると、我々の銀山の話が大衆投資家連中が知るなんてことは、クックにとってはひどく悪いニュースな訳だ。」

「そつです。だから我々の帳簿から、銀の項目は出来るだけ早く消したいんですよ。」

「有難う、アルバート。やつぱりお前は頭がいいや。」

「それで、これからどうするんです、ドック。」

「そつき言った通りだ、考える。」

しかし、考えている間にも、行動に移すべきことはさつさとやらねばならない。次の朝八時半にドックはニック・トップピングに電話する。十一時には、ドック、アルバート、マーヴィンは裏役室で相手方の現れるのを待っている。公爵は自分の事務室からイラン宛の電話を繋ぐのにかかりきりだ。

トップピングとラックマンは十五分遅刻して現れる。重みをつけようというトップピングの考えだ。一晩中ほとんど眠れなかったラックマンだったが、シシリア・アメリカ銀行に一歩足を踏み入れるや、その不安は吹っ飛び、銀行は彼の馴れ親しんでいる場所だ。受付窓口の前の行列、受付の向こうでカタカタと鳴る手動の計算機、大理石の床、間接照明、押し殺した囁き声、濃紺のスーツ。

重役室に着いて一番ラックマンの目を惹いた男はマーヴィンだった。だがそのマーヴィンの格好を見てラックマンは、最初の不安が再び戻ってくる。マーヴィンは紺の背広ではないのだ。格子縞の替え上着、黄色のオープンシャツ、緑色のズボン、モカシンの白い靴。それに加えて、顔いっぱいには広がるその笑い顔だ。

ラックマンの不安を見て取ったトッピング、擲(からか)わずにはいられない。

「マーヴィン」とトッピング。「最近、スイス紙幣は作っていないのか?」

トックもこの冗談が気に入る。

「おいマーヴィン、二三枚見せてやれよ。ああそうだ、俺が自分で持っていたな。」トックはポケットから札入れを取り出し、百スイスフラン紙幣を引き出す。そしてトッピングにそれを渡す。トッピング、それを光ですかして見、匂いを嗅ぎ、擦(こす)ってみる。

「出来たてじゃないな。よく乾いている」とトッピング。「今までのマーヴィンのドル紙幣よりは出来がいいんじゃないか。」

トッピング、紙幣を裏返す。「おお、裏はヌードの女か。大きなオッパイ、肩の線もいい。それに、綺麗な花。マーヴィン、あんたが遙々スイスまで来た理由が分ったよ。百ドル紙幣のベンジャミン・フランクリンの絵を描くのにうんざりしたんだな? そりゃ、スイスの札の方がずっと面白(おもしろ)いからな。」そしてトックに「こいつは貰(もら)った方がいいのか?」

「いいえ」とトック。「ただ、厚飯(あつぱん)はそのうちのおごりだ。」

「よし、その取引(とりひき)のつた。」

「ミスター・ラックマン」とアルバート。「こいつは馬鹿(ばか)なやりとりは無視(むし)して下さい。多(おほ)くそちらのお役目(やくめ)は、カリフォルニア・ファー

スト・ナショナル銀行の代表として、我々の銀行の帳簿(ちょうぼ)を調べることにあるのだと思(おも)っていますが、如何(いか)です?」

「その通りです。」

「身分証明書はお持ちですか?」

「ええ」と言(い)ってラックマン、見せる。

「どこから始めましょう?」

「スイスの会計検査官(かいけいけんさ)からの報告(ほうこく)がありますね。期(き)毎(まい)に吐(つ)き出(だ)される。」

「ええ、あります。」

「何語(なにご)で書(か)かれていますか?」

「イタリア語(いたらご)です。しかし、英訳(えいせき)も作(つく)ってあります。正確(せうさく)な訳(わけ)だとい(い)う証明(しょうめい)もついています。」

「最後の検査(けんさ)はいつでしたか?」

「一箇(いっかん)月前(げつぜん)です。」

「ああ、それは仕事(しごと)がしやすい。では、その報告書(ほうこくしょ)から始め(はじめ)ましょう。そのうちから、重要なもの(もの)を後(あと)で拾(ひろ)って行く(い)くことにして。」

「そいつ(そいつ)の順序(じゆんじゆ)になる(なる)だ(だ)と思(おも)っていました。この階(かい)の二室(にしつ)をすっかり開(ひ)けておきました。どうぞそちら(そちら)をお使(つか)い下さい。それから、全(ぜん)て御質問(ごしつもん)に答(こた)える(え)るよう(よう)に会計課長(かいけいかちょう)に言(い)ってありますので、御自由(ごじゆう)に何でも彼(かれ)にお訊(き)き下さい。」

「英語(えいご)が分(わ)る秘書(ひしょ)が欲しい(ほしい)のですが。」

「それも手配(ていばい)してあります。そう(そう)だ、銀行内(ぎんぎん)に回覧(かいらん)を廻(まわ)しておきま

しょう。ミスター・ラックマンの質問(しつもん)には、全(ぜん)て協(きょう)力(りき)する(する)ようにと

残念(ざんねん)ながら、我々(われわれ)執行部(しやうぎんぶ)は、明日(あした)から今週(こんしゅう)末(ま)までこの町(まち)を離(はな)れます。

ですから、必要(ひつや)な手続(ていじゆ)は今日(けふ)中(ちゆう)にとつておきたい(たい)のです。勿論(もちろん)マー

ヴィンは残(のこ)りますが。」

「つまり、ミスター・スキナーのことか？」

「そうです。もしよろしければ、今すぐミスター・スキナーが御部屋に御案内致しますが、じゃ、マーヴィン、頼みます。」

「ミスター・スキナーはお役に立てるのが大変嬉しそうである。その時、電話が鳴る。ドックが受話器を取る。ちょっと聞いて、受話器を下ろす。」

「ジョンだった。ファードーシは家にはいない。テヘランだ。アルバート、明日の朝は出発だ。飛行機の手配は今ジョンがやっている。お前はファードーシにサインして貰うための書類作りだ。すぐにかかってくれ。」

「アルバートは部屋を出る。残ったのはドックとトッピング。」

「ドック」とドック。「奢ってくれるその旨飯にはまだ早過ぎかな？」

「食つには早過ぎだが、飲むにはもつといい時間だ。」

「ドナティスを知ってるか？」

「いや。しかし、お前を信用しているよ。少なくとも食い物に関してはな。」

「ドナティスは銀行から五ブロックのところにある。だから二人は歩く。隅のテーブルを取る。「ああ、フラスカーティーを頼む。それから急がなくていい。」これをちゃんとイタリア語でやってのける。」

「なかなかいいガイドじゃないか、ドック」とトッピング。「イタリア語なんか、どこで覚えたんだ。」

「公爵だ。」

「使える男じゃないか。どこで見つけたんだ。」

「俺が見つけたんじゃない。ジョー・フィオーレだ。」

「ジョーもだいたいぶ年がいったな。昨日のあの話のあとで、勿論ジョー

から連絡があつたんだろう？」

「あつた。」

「それで、そちらの態度はどう決めたんだ？」

「お前達との交渉は続けるってさ。勿論お前達がその気である限りにおいて、という条件だがな。ただ、俺が今「お前達」と言ったがそれはなトッピング、お前のような使い走り指して言ってるんじゃないぞ。」

「ハハア、また俺に話してないことがあるな？ ドック。」

「そつき。お前が誰のために動いているか、それがはっきり分つたんだ。」

「なるほど。それで？ 次が聞きたいね。」

「だからな、ここでゲームのルールが新しくなつたんだ。つまり、俺はその本人と直接取引をする。」

「無理だな。」

「そついつ前に、まずお前がクックに訊いてみるんだな。」

「お前如きがそんなことを考えて何になる。ミスター・クックの狙いは大きい。雑魚は相手にしない。」

「そつらしいな。アルバートもそう言っていた。」

「アルバートがどつ言っていたんだ。」

「さすがはクックさんだ。銀の市場を料理する気であるってな。」

「それで？」

「どつしてもネタがばれては困る筈だよ。」

「何のネタだ。」

「ペルシャの鉾山からザクザクと銀が出るというさ。」

「誰がばらす。」

「俺さ。」

「どつやるんだ。」

「電話だね。信頼出来る筋に三三人。」

「お前に出来る訳がないだろう。ジョー・フィオーレに殺されるぞ。」

「ジョーは今、ベガスだからな。」

「ミスター・クックに何かして貰いたいんだな。」

「愛情と理解というところかな。俺の年金の増額にも一役買ってもらいたい。」

「そんなこと、ミスター・クックの手を煩(わづら)わすれでもないよ。このニック・トッピング様がしかるべく手を打ってやるぞ。」

「さっき言った筈だぞ。俺は使い走りとは取引しない。ところで、そのミスター・クックってのはどこに住んでるんだ。」

「イギリスだ。」

「何でまた？」

「一人で静かにしているのが好きなんだ。それが確保出来るのはイギリスが一番のことよ。ドック、話は違つがお前、この銀行が終つたら、何をやるんだ。」

「考えたことないな。」

「フィオーレ一家にはもつろんざりつていう気持ちのよつたな。」

「凶星だ。」

「俺達の方から口をきいてやっていいんだぜ。」

「俺達の「達」には、フランク・クックも入っているのか？」

「うん。俺が話してやる。いいか、こうちから声をかけるまでに、変な真似はするなよ。ジョー・フィオーレ、フランク・クックの両方から狙われるのは、お前も有難くない筈だぞ。」

「声をかけると言つたな。いつだ。」

「今晚だ。それなら待てるか。」

「よし、待つてやる。ワインはどうだ？ ニック。」

「うん、貰おつ、ドック。」

その夜、約束通りトッピングはクックに電話する。しかしクックはフアードーシの説得が終るまでは会わないと言つ。説得は多分水曜日までには終るだろう。従つてドックをイギリスに連れて行くのは、木曜日とする。そこでもし、フアードーシの件がうまく行けば、次の朝クックの家に連れて行くという段取りだ。

このことをトッピング、ガローナの別荘にいるドックに電話する。ドックはこの遅延を好まなかつた。が、同意する。ということばかり、フランク・クックの命が三四日延びたということだ。

一六

パン・アムでヨーロッパからテヘランへ飛ぶフライトは非常に多28
い。ヨーロッパからテヘランへ行きたい人間が多いからではない。1
ヨーロッパからインド、タイ、香港、シンガポールへ飛ぶ時の、燃料補給中継所として理想的だからである。シンガポールで給油した飛行機は更に日本、或はオーストラリアに飛ぶ。

ミラノからテヘランまでは四時間、ニューヨークからロスアンジェルスまでの飛行時間とほぼ同じだ。しかし面白さから言つて、ミラノ・テヘラン間の方が格段に上だ。異国情緒がある。サリーを着たインドの女性達、仕事用の背広に身を固めた日本人達……但し、似合つた背広を着ている日本人にお目にかつたことは無だが……口の大きなオーストラリア人達。それに一九六八年は、アメリカ、ヨーロッパの人間がどつと東南アジアの国々に押しかけて行つた年だ。アングル・サムがこの地方に大量のドルを流し、その上がりで、土着の人々の間に混じつて優雅に暮そつていふ腹なのだ。

七〇七機に乗り込んだ公爵とアルバートの気持は「優雅に暮す」などという気分からほど遠かった。

「アルバート」と公爵。これがアルバートを呼ぶ三度目の声だ。

「うまく行くんだらうか。この話は。」

「ミスター・ファードーシがこちらのことをどう思つかですね。あの人のこちらの立場に対する理解いかなんです。」

「でも私は、皆さんがどついつ人間であるか、正確にあの人に話したことはないんです。有名なアメリカの銀行家たらうとあちらは思っていますからね。」

「これからそれを正確にすればいいことでしょ。ジョン。」

「さあ、それが・・・と、ゆっくり頭を振りながら公爵。「なしらファードーシと言えば、イランでは旧家で、尊敬されているんですからね。」

「それなら、いよいよこちらに協力するしか手がなさそうですね。」と、アルバート。「僕の親父や、ラスベガスの親父の友人達と関係を持つなどというのは世界的なスキャンダルです。立派な家柄の人達が、そんなスキャンダルに自ら好き好んで巻き込まれたいなどと、は到底考えられませんね。」アルバートの言い方は実にそつけないもので、そこに悔しさ、残念さなど、微塵もない。

「そつ。あなたの言う通りだ、アルバート。そつなつて欲しいよ、私も。」二人はまた長い沈黙に入る。飛行機は東の方に向きを変えている。そして

「アルバート、あなた、ドックのことをどう思つか。」

「好きですね、僕は。」

「私もです。非常に。でもあの人の何を考えているたでしよう。今。」
「実のところ、僕にも分らないんです。」

「ひどく悪いこと・・・つていう可能性がありますかね。」

「まあそつでないことを期待していますが。でもドックのことですからね、何をやらかすか、知れたものではありませんよ。」

「ドックは本当に親切な人なんですけど・・・最初私は、あの人が怖かつたんです。それで今、また怖くなっているんです。」公爵は溜息をつく。「実は、妹の方には、少し話したんです。」

「妹。」

「ええ、シリーンです。」

「ど。」

「ドックのことを訊くんですよ。来るのか、来ないのかつて。」

「ドックのことが好きなんですかね。」

「そつらしいです。でも、ドックの正体など全く分っていないんですからね。」

「人は変わるものです」と、アルバート。「シリーンに何もかも話す必要なんかありませんよ。ドックが好きで、それでどつだつて言うんです。」

「私の感じでは、ドックと結婚したいんじゃないかと・・・。」

「それは間違いじみていますね。何故結婚なんかしたいんです。」

「シリーンはイランから出たいんです。イランではまだ女性は召使のようにしか扱われていません。いや、それ以下かも知れません。存在していないかのように。」

「二、三年前まで、アラブのある地方では、子供を生んだ時、もしそれが女だと、殺す権利がその父親にはあつたぐらいです。」

「それは酷い。」

「イランではそんなことはしません。でも・・・やはりシリーンのような女性が住む場所ではありません。あの人は御存知のようにイ

ギリスで教育を受けたのです。どうしてもヨーロッパに戻りたいと思つているんです。」

「それならさつさと行けばいいでしょう。ドックを巻き込むことはない。」と、アルバート。「ドックとこのことについて話したことがあるんですか?」

「一度だけ。」

「何と言つてました?」

「あの人のことはよく知つていてるでしょう? あなたの知つたことじゃないだろう? っつ、それで終ります。」

再び長い沈黙。

「アルバート」と、再び公爵。

「ねえアルバート、私のことなただけど、これが終つたらどうなるんでしよう。」

「イタリアで何か仕事があるんでしよう?」

「まあね。でも、見つけるのが難しくて。」

「難しい? 貴族の称号があつても?」

「それが却つて厄介なんですよ。イタリアではこれが物笑いの種なんです。過去の遺物、馬鹿げた物、墮落した制度の置き土産。私はもつ耐えられないんです。ドックが何とかしてくれませんか。」

「ドックに訊くんですね。」

「でも、どうも怖くて。アルバート、あなたが訊いてくれませんか?」

「いいですよ、ジョン。でもとにかく、まずは当面の仕事です。テラノで待つてみるか。」

アーガ・ファードーシは、空港のゲートで待つていた。挨拶は至つておぼろげなものであった。今のこの三人の間に流れている空気で

は、それは仕方がなかった。

運転手つきのメルセデスが外で待つている。三人をのせたその車は、大きな並木道に沿つて進む。その並木道の名前がふろつてい

ランのゴルフチャンピオン、キアバン一世の名を取つて、キアバ

ン「アイゼンハワー」というのだ。街の中心地には、キアバン

「パーレビ」という道があり、ここで車は北に曲る。神秘的な東洋の

街テハランを期待してきた旅行者達には、ここは全く味気ない。ず

んぐりした面白くもない建物、瘦せた街路樹、世界一の・・・勿論

東京は除いての話だが・・・交通混雑、二十分後三人は既にテハラ

ンの郊外に出ている。世界の主要都市のどこへ行つても見つかると

ルトンの看板がある。しかしそこは通り過ぎる。夜の空に微かに輪

郭が見える山。その麓を登り始める。三人の目的地はターバンド・

ホテル。夜中でもここは煌々と照明がついている。アーガが一歩車

を出ると、さすがに地方の名士。すぐに周囲の目が集まる。公爵と

アルバートには二つの寢室つきの大きなスイートが予約されている。

両方の寢室に花、それに大きな果物籠が置かれている。支配人から

の特別な配慮だ。「階下のレストランで待つています。では二十分

後に」と、ファードーシ。すぐに仕事の話にしたいのだ。この時

点まで三人は、一言も銀の話題を口にしていない。

「この雰囲気は気に入りませんね」と、公爵と二人だけになるとす

ぐアルバートが言つた。

「私もです。だいたい彼らしくないですよ。」と公爵。

「シリーンはどうかなんですかね。」

「分りませんね。でもこれは訊かない方がいいと思ひますよ。」

「ジョン、ファードーシとの話の口火を切るのほそちらにお願いしたいんです。」

「分りました。ただ、技術的な問題になつたら頼みますよ。」

「ええ。フリーケースを持って行った方がいいでしょうね。」

「それはそうでしょう。今晚決めてしまわないと、この問題は永久に片がつかなくなるんじゃないでしょうか。」

二十分後に二人はレストランに入る。アーガ・ファードーシは隅のテーブルで二人を待つていた。妹はいない。彼一人だ。アーガは挨拶のため立上げる。

「多分、機内で十分食事は出た筈だと、ここでは私の方で勝手に軽いものを注文しておきました」とアーガ。

軽いものとは、キャビアにウォッカ、それにシャンペンであった。

もうグラスは三人とも注いである。ファードーシはウォッカのグラスを持ち上げる。「我々の未長い成功のために、そして、友情のために……乾杯！」

三つのグラスがカチンと鳴る。次に気まずい沈黙。

「何が問題なんだな？ シアンフランコ」とファードーシ。

「ええ。」と公爵。

「深刻な？」

「ええ。」

「では話してくれ。今すぐ。」

公爵が話す。まず、ジョー・フィオーレの話。最後にスイス当局は銀行の封鎖命令を出すだろうという見通し。何もかも引つ括めて差し押さえられるだろうという。つまり、ファードーシが預けた金も一切合切。

「それはつまり」と、やっとアーガが言う。「私は銀の鉱山を失うといつことなのか？」

「三十日以内に三千万ドル用意すれば大丈夫です」と、始めて口を

開いたアルバートが言う。「銀行に停止命令が出る前に、鉱山の資産部分を買戻しておくのです。ここにその手形があります。」

「三千万ドル？ 冗談じゃない」と、ファードーシ。「しかしその前に」と、彼は続ける。「私にはどうも理解し難いことがあるぞ、シアンフランコ。あなたはこの銀行がマフィアのボスによつて運営されていたらつて言つのか。」

「ええ。」

「ドックもその一味なのか。」

「ええ。」

「ここにいるアルバートもか。」

「ええ。」

「どうして最初にそれを私に話してくれなかつたのだ。」

公爵はただ肩を竦めるだけ。アルバートは黙っている。ファードーシはゆっくりと頭を振る。

「もつあなたには何度も注意してきたんだ、シアンフランコ」とファードーシ。「アメリカ人と仕事の話は危いと。連中はニコニコ笑ひ、冗談を言い、弁護士つきで書類を山のように持つて来る。仕事には穴がない。能率もいい。事はスラスラ進む。いつでもフェアプレーの精神を説き、相手の外国人の考え方を学ぼうといつ姿勢を見せる。」

「永久に友達だ、あなたとは……これだ。そしてお互いに契約書にサインする。それからだ、ビックリ仰天が始まる。みんな大嘘騙しなのだ。」

「ここでまたファードーシ、公爵の方を向き、「あなたも喜んでその片棒を担いでいるんだ、シアンフランコ。恥を知るがいい。」最後の言葉は実に苦々しく発せられる。「これで私も無一文だ。あなたの父親がシシリアでやった二の舞だ。私もあなたと同じ、売春婦

の身の上が、シアンフランコ。ああ、シリーンはごつなる。」

「ちよつと待つて下さい、ミスター・ファードーシ」と、アルバート。「まだ、お分かりになっていないことが・・・」

「お分かりになっていないことだと？」ここでファードーシの声が始めて上る。「あなた、そんな口がきける立場だと思っっているんですか。あなたは私の従兄弟より酷いんです。あなたの仕事は盗みなんだ。弱い者いじめなんだ。イランではあなたのよう人間は、撃ち殺すことになっているんだ。」

「ねえアーガ」と公爵が口を挟む。「頼むよ、ここは彼に話をさせてやってくれないか。酷いことにはなっているんです。だけど、想像した程ではないかも知れないだから。」

「想像した程ではない？」ここまで来ると「ファードーシ、絶叫している。」「何世紀も私の家族のもだった財産を、私は失うのだ。何百万ドル、何千万ドルを生み出したかもしれない仕事を私は失うのだ。それに、今まで貯めてきたなけなしの金を、あなたとマフィアの運営する銀行に預けてスツテンテンにしまったのだ。」

「ミスター・ファードーシ」と、アルバートが再び遮る。「それは違います。まあごつが、聞いて下さい。」

ファードーシ、椅子にどっかか坐る。この時までにはウオッカのグラス三杯とも注がれている。ファードーシ、すぐに自分のグラスを空ける。公爵もそれに倣つ。

「じゃ、やってくれ」と、ファードーシ。今度は平静に言つ。

「まず第一に、今のお話の預金です。昨年我々共に、あなたは五百万ドル預け入れされましたね？」

「そつだ。」

アルバート、ブリーフケースを開ける。

「ここに小切手があります。利息を含めて五百五十万ドルです。ニコークのチェイス・マンハッタン銀行で発行されたものです。名義はあなたです。」

アルバート、これをファードーシに見せる。但し、両手でしっかりと握つたままの状態で。

「まあ、多少の意味はあるでしょう。」恨みがましくファードーシが言つ。

「まだ続きがあります」と、アルバート。

「それは？」

「ドバイの倉庫にある銀は、どのくらいの量ですか？」

「御存知の筈です。毎週倉庫からの受領書をそちらに送っていますからね。」

「約四百十方オンスです、こちらの計算では。」

「だいたいそんなものです。ええ。」

「実際には、これはそちらとこちらの共有財産です。」

「それは勿論だ。」

「それを全部そちらの財産にして戴こうといつもりです。」

「いつです。」

「今です。但し、お互いの了解事項を片付けた後ですが、ここにその書類を持って来てあります。」アルバート、ブリーフケースを指し示す。

ファードーシの顔、始めて明るくなる。

「その書類を見せて戴けますか。」

「勿論です。」

その書類は、銀の半分の量に対する銀行側の権利をファードーシに譲渡する」といふ内容のものだ。倉庫の受領書が添付されている。

スイス側の経営陣の、必要なサインは全てすませてある。

「あの銀は、現在の価格で約一千万ドルほどだが」と、ファードシ。

「そうです。」

「だから、最初提示された二千万ドルには、あと五百万ドル足りない……しかし」とファードシが続けて、それから何かを思い出したように元気になる。「その五百万ドルはクエントで借りられるでしょう。いや、必ず借りられます。ドバイの銀の受領書を担保にすればよい。いや、さっきから仰っていたことの意味が分りましたよ、ミスター・フィオーレ。先ほど申し上げた失礼の数々、謝罪致します。するとこの不幸の落ち着く先は結局、我々の共同事業が解散するということだけですむのですな。私の財産はすっかりそのまま無傷で私のものといことなのですね。」

「それは違います」と、アルバート。

「違う……どついでです。」

「無傷で私のもの、ということこそが違つのです。それはまだ、あなたのもではありません。」

再びファードシの声が上がる。「じゃ、今までの話は一体何なのだ。私の金は全部私に戻ると今言ったばかりじゃないか。」

「そうです。しかしミスター・ファードシ、私は同時に、いろいろな手続きのお話も致しました。それがすむまでは、あなたの預金も、ドバイにある銀も、まだあなたのもではありません。はつきり申し上げますと、私共があなたにそれを差し上げるまは、です。」

「差し上げる？ あれは私のものじゃないか。何が差し上げるだ！」

再びファードシ、絶叫している。

「単純な話です。私共がそれを所有していて、あなたはそれを所有

していないからです。」

「さあ、これで切り札は全部机の上だ。そしてファードシもこのことは重々承知している。苛々とファードシ、テーブルナプキンで口の周りを拭き、次に額を拭く。」

「そちらの条件は何なのだ。」

「鉱山です。つまりクジスタンにあるあなたの所有地全部です。」

「あの千五百万ドルはもともと私のものだ。それを私が取り戻すために自分の財産、それも、どんな富を生みだすか、とても想像も出来ないような財産を譲れというのか。」

「ドバイの銀はあなたのもではありません。」

「半分は私のものだ。我々は共同経営者なんだからな。」

「いいでしょう、解釈はどうであろうと。それによって状況が変わるといふものではありません。我々の要求を繰り返します。現金五百五十万ドルと四百十方オンスの銀、それと引き換えに我々は、あなたの不動産が戴きたいのです。この要求をのむものもないも、あなたの勝手です。どうぞ御自由。」

「もし私がまなかつたら？ すると私にドックを寄越すんですね？」

「それがあなた方の遣り口なんでしょう。」

アルバートはブリーフケースを取り上げる。小切手と銀に関する契約書を再びその中に入れる。パチンと音をさせてそれを閉めて、椅子の傍に置くため、身を屈める。

レストランの端にある舞台上で、急にオーケストラが音楽を奏で始める、と同時に、公爵がパツと立上る。驚いたアルバート、その拍子に眼鏡が鼻にずり落ちて来る。片手でそれを支え、片手はブリーフケースの安全の確保のための動作。何だ一体、これは。イラン流襲撃というやつか。

とんでもない。シリーン・ファードーシが登場したのだ。アルバートはほっとする。なあんだ、そつだったのか。その反対にアーガ・ファードーシは怒り狂う。公爵が止める暇もあらばこそ。アーガ、怒鳴る。

「シリーン、部屋に引込んでいって言った筈だぞ！」

シリーンはアーガを全く無視。公爵にしがみつく。

「ジャンフランコ、ああ、ジャンフランコ！」そして、ワッと泣き出す。

屈辱させた金遣いの荒いイランの客達……いや、イギリス大英帝国の亡命者達も含まれていたかもしれない……は、大盤振る舞いをしただけのことではあつた筈だ。レストランでワッと泣きだす婦人は、世界中どこでも高く評価されるものだ。特にその女性が美人であれば、そしてシリーン・ファードーシは正に美人なのだから。しかし、うるたえるようなジャンフランコではない。窮地に立たされてその真価を發揮するとは、このような男をいつのだ。片手でシリーンをしっかりと支え、もう一方の手でウエイターを手招きする。ウエイター、すぐに公爵の方に駆け寄る。

「花を」と、公爵。どういふわけか、数秒も経たないうちに花束が現れる。どこか近くの空いたテーブルから取つて来たのだらう。ウエイターの手からそれを受取り、公爵、大仰なお辞儀と共にそれをシリーンに差し出す。

涙は引つ込み、くしゃくしゃの微笑みがそれに取つて代わる。

「あなただったら、ジャンフランコ」と、シリーン。「大きな大きな……なんて言つたかしら……そつ、道化よ。」そして、公爵にキスする。

レストランの客達はニッコリする。アルバートは呆気に取られ、

アーガ・ファードーシは怒鳴る。

「坐るんだ、二人とも。馬鹿なことをやりあつて。」

「アーガ」と、公爵。「そんなイラン人丸出しの怒り方は止めて。さあ、シリーン、私達はシャンペンだ。」

再び公爵はウエイターを手招きする。「ドン・ペリニオンを一本頼む。十分以内にだぞ。」今まで飲んでいた、訳の分らないどつでもいシャンペンとは訳が違つ。

それからシリーンに席を一つ……すぐにだぞ……それに、キャビアだ。四人分。黒た。赤じゃない。註文が終ると公爵、シリーンに話し始める。フランス語で。

コンピューター化されたアルバートの頭脳には、今の一連の動きはさつぱり理解出来ない。二十七歳にして、女性にアルバートにとつて全くの謎だ。解くことに興味をそそられる題材ではない。これが34

アルバートの昔からの結論だつた。女性の感情は、論理とはほど遠い、予測可能な領域から遙かに隔たつた所に存在するものなのだ。従つて、つい今し方展開された成り行きを全く無視し、現在進行中の、仕事の話に戻る。

「ミスター・ファードーシ」と、アルバート。「どうやらこちらの要求はのまないことに決めたよつですな。」

「これを議論するのは止める」と決めたんだ。」と、アーガ、吐き捨てるよつに言ふ。

「それでは結論はやはり同じになります。」

「違つ。考えなきゃならんだ。」

「そんなに時間はないのです。」

「いつまでだ。」

「この週の終まで。それ以上は駄目です。」

「

」

」

「それまでには返事をする。私とシリーンはこれで失礼する。」ファードーシは突然立上る。あまり突然なので、椅子が倒れる。

「来い！」と、アーガ、シリーンに言う。

シリーンの顔は公爵からアーガへと向く。

「ねえ兄さん」と、シリーン。「まだよ。どうなさったの。一体。」

アーガ、乱暴にシリーンの手を握り、引つ張り上げ、無理矢理シリーンを立たせる。

「我々は行くんだ。」

再び公爵が遮る。「アーガ、あなたが行くのならどうぞ。私とシリーンは踊るんですから。」

次に起った事は、間にシリーンを挟んだ綱引きである。とうとうアーガ、怒りと運動で顔を赤くし、手を放す。公爵とシリーンがダンスフロアーに去ると、その後姿を覗みつけ、じつと立ちすくむ。

「ミスター・ファードーシ」と、アルバート。「どうかもう一度お坐りになって。シアンフランコはあれでも気をつかってくれているのです。」

覗みつけられるのは、今度はアルバートの番だ。しかし、アルバートを憎み続けるのは難しい。特に眼鏡が鼻の先にチヨコンとずり落ちていた時には。

そこでファードーシは椅子を拾い上げる。坐る。ムツツリと。

「全く破廉恥極まりない。」

「何がでしょう。」

「あなた方欧米人がこの国にもたらした習慣だよ。あの女達の格好を見てみる。」

確かに沢山のミニスカートが、ペルシャ音楽版「夜の異邦人」のオーケストラに会わせてヒラヒラとかなり高く舞い上がっている。

その中にひととき目立つのが、公爵とシリーンのパア。二人とも背が高く、黒い髪、驚くべき美男、美女。それが優雅にダンスフロアーの上をすべって行く。

「少なくともシアンフランコだけは認めてやらなきゃならんか」とファードーシ。「なにしろ、名門の学校を出ているんだからな。」

「近い親戚なんですか？」とアルバート。空気を和らげるために言う。

「あなたの知ったことではない」とファードーシ。「が、まあ、答はノーだ。随分昔に遡（さかのぼ）らなきゃならん。それにひどく複雑だ。あなた方には分らんよ。」と、ういつことは。

音楽が止み、シリーンとシアンフランコも動きが止まる。

「どうだ？ もう一杯、ウオツカは」と、不機嫌な声でファードーシ。アルバートはこんなに強いものは到底耐えられない。しかし、つきあつ。

「まあ、いいこともある」とファードーシ。「これでやっとドックのことは、シリーンの胸から綺麗さっぱり消えただろうからな。」

アルバート、この台詞は聞き流すことに決める。

「ミスター・フィオーレ」と改めてファードーシ、口を切る。「さっきの話、あれはみんな本当のことなのかね。」

「私のことはアルバートと呼んで下さい。それから、質問の答はいエスです。全部本当なのです。」

「あなた方のことを暴くと言って来た奴は何なのだ？」

「非常に力のあるグループです。あまりに強力で、こちらは手も足も出ないのです。それが私の結論、それに、私の父の結論でもありません。」

「何者だ、それは。」

「ちよつと私の口からは言えません。すみません。でも、こつこつと
具合なのです。」

「銀の商売をしているんだな？ 連中は。」

「そつです。」

「犯罪者なのか、そいつらは。」

「ええ、まあ、その類（たぐい）です。」

「申し越しのこの提案を私のがむと、次にどういつことになるのか
ね。」

「銀の生産を停止します、即座に。」

「停止？」とファードーシ。「そんな馬鹿な！」

「そつかもしれません」とアルバート。「しかし、その組織の要求
がそれなんです。ですから、もしあの要求をのんで下さると決れば、
すぐあなたと私、それにジヨンは鉱山に行つて停止の手続きをしな
ければなりません。」

「なるほど。所有権はなくても、私も行けど。停止すると口だけで
は駄目といつことが。」

「そつです。」

「ジャンフランコもこれに賛成だといつのだな？ 私とシリーンを
「こんな目にあわせる」といつこの要求。」

「ええ。公爵も他に打つ手はないのです。それに、逃げ道としては
「これが一番いい、あなたにも、シリーンにも。」

「少しは我々のことを考えてみてくれているのかね。我々はまず家
を引き払わねばならない。大勢の使用人を路頭に迷わせなきゃなら
ない。連中は何代も私の家に仕えてくれた、誠実な人間なのだ。」

「鉱山が動き出せば、また仕事につけます。」

「いつ頃になる見通しだ？ それは。」

アルバート、ただ肩を竦めるだけ。

「アーガは再びウオッカを注ぐ。ロシア人と同様イラン人も、ウオッ
カ育ちなのだ。」

「他にどんなものにサインするのだ。」

「サインする。」

「あなた方の要求を私のがんだ時のことだ。」

アルバート、再びブリーフケースに手を伸ばし、新しい書類を出
す。

「これだけです」と、それをファードーシに渡す。分厚いものだ。

ファードーシ、パラパラと三枚めくる。そしてテーブルの上に
置く。

「何なのだ、これは。」

「権利放棄です。」

「ホウキ？」

「手を変え品を変え、色々な言い方がありますが、要するにあ
なたが、私達を決して訴えないという約束です。スイスでも、イラ
ンでも、この地球上のどこでも、決して。」

「なるほど。つまり、そちらは私が訴えると思つていたといつこと
だな？」

再びアルバート、肩を竦める。

「さっきの奴をまた見せてくれ。」

「銀の譲渡に関する書類ですか？」

「そつ。それから小切手と。」

アルバートは書類を渡す。それから今度は、五百五十万ドルの小
切手を、相手の手に取らせる。

ファードーシ、小切手を読む。繰返し読む。そしてもう一度、そ

れからも二杯ウオッカ。一気に飲み干す。

「ファードーシ、片手を上着の内ポケットに入れる。ペンを取り出す。」

「どこにするんだ、サインは」とファードーシ。

「ここです」とアルバート。「そして、ここです。」

ファードーシ、サインする。丁度二つのサインが終った時突然音楽が止む。ファードーシの額から汗。それが光っている。シリールと公爵、ダンスフロアーからテーブルに戻って来る。そしてアーガの様子を見つめる。

「兄さん」とシリール。「どうかなさったの?」

「何でもない、シリール。何でもない。全ては終わったのだ。」

「何を言ってるらっしゃるの?」

「何もかも私は売ってしまった。私達はこれからジブシーだ。ジアソフランコの境遇だ。」

「兄さん、具合が悪いんじゃないの?」アーガは今や、冷汗をかいているだけではない。顔が真っ青になっている。

「いや、大丈夫だ。ちょっと私に構わないでいてくれ。暫くしたら説明する。その間、荷造りを頼む。」

「荷造り? 何のこと?」

「明日の朝、私達はアバダンに発つんだ。」

シリールの顔が曇る。

「ジアソフランコも一緒だ。」ファードーシが続ける。「さあ、二人とも坐るんだ。まだシャンペンもキャビアも沢山残っている。ダンスをする時間だつてある。今はもう話題を変えよう。私は詩が好きだ。特にオマール・ハイヤムがね。」そこでまたウオッカを二三杯ひっかけ、ルバイヤートを吟じ始める。最初は原語で、次に英

訳で。アルバート、熱心にそれに聴き入る。聴き入るのはいつものアルバートの癖だ。

次の朝、四人全員、空港に行く。アルバートはロンドン直行便のBOACに乗る。公爵、アーガ、シリールはイラン航空00七便にテヘラン・アバダン・クエート・ドバイ、行きである。何故かアバダンでは、この三人、飛行機を降りない。

一七

ロンドン空港に着くと、アルバートは真直ぐホテルに向つ。ホテルから二つ電話をかける。いずれも短い。一つはラスベガスにいる父親宛。イランでの一部始終を話すと、ジョー・フィオーレの答は短い。「フム」と一言あるのみ。「後はシリア・アメリカ銀行の株式を持つて来て貰つ仕事だけが残されています。株式全部をです。13
今や銀行があつた山を百パーセント所有しているんですから、株式を渡すことによって、六千ドルがこちらに入つて来ます。」「分つた。株式はすぐ送る。こちらから人を送つて、手渡す。」「どこの誰がその使いをするのか、ジョー・フィオーレは言わない。ジョーは電話が嫌いなのだ。「ドックからお父さんの方に何か連絡がありましたか?」「いや、ない。お前が直接話すんだな。それからドックにはよく言つておけ。変なことをしてみろ、厄介なことになるんだからな」と。分つたな? アルバート。」

「はい、分りました。」

「それから、金が入つたら、イギリスに置いておくんだ。いいな。そこでいい使い道が出てくるかもしれん。」

「分りました、お父さん。」

「いい子だ、お前は。」

それからアルバートはドックに電話する。「スイスでは計画通り事は進んでいますか?」「まあな、かなり順調だ。あのラックマンの奴、真面目過ぎるんだ。それにあれこれとつるさくてな。しかしどうやら、シシリア・アメリカ銀行の会計検査報告書は、週末までには出来そうだな。」

「イランはどつだったんだ、アルバート。」

「フアードーシは同意してくれました。書類に二つともサインをここに持っています。」

「そいつはすごい。するとあの鉱山は丸ごと今、俺達の手にあるんだな?」

「ええ、今のところはそうです。ついさっき親父に電話したんですがね。」

「親父さん、何て言ってる。」

「株式はすぐ送ると。それから、ドックに言えと、伝言がありました。面倒事は起すなと。」

「十日は待つてやる、と言っていたがな。」

「ええ、知っています。」

「まだその期限は来ていないんだ。」

「しかし、親父の言い方はかなりきつかったんですが……」

「きつからうと何だろつと知ったことか。期限はまだあるんだ。」

アルバート、何も言わない。

「おいアルバート、お前どこからかけてるんだ。」

「カールトン・タワーからです。」

「どこにある。」

「ウエスト・エンド、カドガン・スクエアです。」

「木曜の夜から、一部屋とつておいてくれ。」

「一部屋だけでいいんですかね?」

「そうだ。ラックマンもトッピングも、自分で予約する筈だ。」

「マーヴィンは?」

「マーヴィンはこつちに残る。ガローナの家を引き払つ手続きがまだあるんだ。」

「犬は?」

「犬? 何だ、犬とは。」

「リンゴーですよ。」

「知るか、犬のことなど。お前とお前の親父さんが取り仕切るんだろつ? すべてを。」

アルバート、再び何も言わない。

「そつだ、もう一つある、アルバート。公爵は筋書き通り動いてい
るんだろつな?」

「ええ。今朝、クジスタンに行きましたから。」

「フアードーシから貰つたサインは確実なものなんだな? インチキはないな?」

「大丈夫です。」

「そつか。とにかく今週末にはそちらに着く。」

次の日の午後六時、フロントからアルバートの部屋に電話がある。誰かが大きな小包を届けて来ました。そちらにお持ちしましょうか。つん、頼む。

大きな厚紙の箱だ。中味は何百枚もの縁飾りのある証券だ。これ一枚がシシリア・アメリカ銀行の百株を代表している。持参者が所有権を有するものとす、と記載がある。総額いくらだ? 全てがう

まく行けば、六千ドルだ、勿論。

アルバートは箱を押し入れに入れる。それからレストランの「リブルーム」に行く。ここだ、ロンドンで最高のローストビーフを出すところは。そしてアルバートはローストビーフに目がない。

ドックがロンドン行きのアリタリア航空に乗り込んだのは、一九六八年五月十二日だった。この頃ではまだ、空港にはX線による危険物発見装置は備えられていなかった。上着の内ポケットに隠し持ったベレッタ0・三三口径のピストルのことで心配する必要は全くない。心配する必要があったのは、デビエ・ラックマンだった。ドナルド・ラックマンが女房同伴でドックのホテルに迎えに来たのだ。リムジンの前の座席にはトッピング。ドックは後ろの座席、夫婦の隣に坐る。デビエの隣だ。デビエとの会話は公式な挨拶だけ。しかし、ルガーノから高速道路をミラノまで走る途中、車の中で二つの身体が時々執拗に接触することは避け得ない。ドナルド・ラックマンとの会話はもっと短く、おさなりなもの。また、車中ではドナルド、膝の上にあるフリーフェースをしつかりと神経質におさえているのみ。その中には、カリフォルニア・ファースト・ナショナル銀行に、ルガーノの、ある小さな銀行を六千ドルで買収すべきだという意見書、それに会計検査報告書が入っている。

これだけの大仕事を可能にしてくれた立役者トッピングは、さかんに隣のイタリア人の運転手に話しかけている。四人の中で唯一人幸せそつな人物だ。

飛行機がアルプスの上空を飛んでいる頃、トッピングは相変わらず上機嫌だ。

「なあ、おい」と、隣のドックに話しかける。「あのデビエ・ラッ

クマンてのはなかなかなだぞ。」

「気がつかなかったな」とドック。

「しかし、可哀相に。あの旦那！」とトッピングは続ける。「これが全部終る頃には、あいつ、心臓麻痺を起すんじゃないか？ あいつの報告書を読んだか？ お前。」

「部分的にはな。」

「お前さん達、たいしたものじゃないか。あのちっぽけな銀行を、よくあれまでに仕上げたよ。だがな、一番傑作なのは、何と云ってもマーヴィンが書いたところだ。あのデッチャゲ！ 凄いものだぞ、あれは。それに、あいつのニヤリと笑つ、あの笑顔がいいね。こっちでもあいつのを一人雇いたいところだ。」

「まあな」とドック。「使えない時もあるさ。」

「どつしたんだ、ドック。何かまづい事でもあるのか？ イランで³⁹はアルバートが万事うまくやったと報告があったんだろう？ それなら今は心配など何も無い筈じゃないか。」

「フム。何もないか。」

「おいおい、あんな銀行のことなど考えるのはもう止める。それに、フィオーレ一家のこともだ。お前をミスター・クックに会わせる手筈は整えたんだ。お前のことはきつと気に入る筈なんだ、ミスター・クックは。」

「手筈？ いつだ。」

「明日の朝だ。十時。」

「どつこだ。」

「あちらの家だ。」

「それはどつこにある。」

「田舎だ。」

「どうやって行く。」

「俺が連れて行く。ホテルはどこだ。」

「カールトン・タワー。」

「九時に迎えに行く。いいな?」

「分った。何かあつた時にはどこに連絡すればいい。」

「ミスター・クックの家に電話してくれ。」

「番号は今分るのか?」

「ああ。ロンドンからだとか市外だ。バックinghamシャーのマーロウ。

番号は八六〇八三。いいな?」

ドック、これを航空券の裏に書きとめる。

それからドック、足を伸ばすために立上り、通路に出る。すぐに

ラックマンが近寄つて来る。

「銀行の株式が耳を揃えてロンドンにあるって、本当なんですかね?」

とラックマン。

「そこ私は言つた筈ですよ」と不機嫌な返事。

「全部揃つていてくれないと。頭取が明日サンフランシスコからやつ

て来るんです。午後には売買契約はすませたいといつ考えなんです

から。」

「どつしたんです? 急に買収に熱が入つてきたよつじやないです

か。」

「熱なんか入つていませんよ。ただ確かめたかつたんです。明日の

三時きつかりに、あなた方にウィンスロット銀行に行つて貰いたい

んですよ。銀行の株式全部、それに例の……つまりイランの不動

産の……百パーセント所有権譲渡の証明書を持ってね。」

「さもないとミスター・フォアマンがあんたのお尻をペンピンとひつ

ぱたく。そういふことですね。」

「とにかく明日には全て準備完了」という事態を要求しているんです。頭取は、お願ひしますよ、明日一時にホテルに電話を。」

「かしこまつて候。他にはありませんね?」

そつ言つてドック、さうさと自分の席に戻る。ロンドンに着き、

税関を出るとドック、他の二人にはさよならも言わず、ホテルへ直

行する。ホテルの内線でアルバートに電話する。二人はバーでスコッ

チを一杯飲む。

ドック、アルバートに明日の計画を話す。三時にウィンスロット

銀行だ。ロンバート通りにある。株式全部持つて来てくれ。揃つ

ているんだろつな? 揃つています。

「お前とはこのロビーで二時半に落ち合つ」と、スコッチの代金

を払つた後、ドックはアルバートに言つ。

「朝食も昼食も一緒じゃないんですか?」とアルバート。「少なくとも

とも昼食くらいは。」

「いや、俺は忙しいんだ。」

「ええ?」

「それからなアルバート、何か事が起つたら、俺はここだ。ここに

電話してくれ。」航空券の端を切り取つたものをアルバートに渡す。

「ドック、おかしな真似を……。」

「おいアルバート、もう寝ろ。明日は大変な一日だぞ。」

アルバートはベッドにもぐる。しかし、どつやつても寝つかれな

い。ドックは連つ。すぐ眠る。

ドックはもつずつと以前に芋んでいるのだ。仕事の前には充分な

睡眠が必要だと。

ナイツブリッジからバックinghamシャーへの道は難しくくない。ハ

イドパークを横切つてサーペンタインに出る。ロイヤル・ランカス

ター・ホテルを回つて、三三プロック北へ、ウエスタン・アヴェニューに出る。そこを左へ、オックスフォードの方向A四〇を下る。最初は工場が並んで、コミコミしているが、そこを通り抜けると急に緑の気持のよい郊外に出る。イギリス独特の風景だ。

「車でどのくらいかかるんだ」とトック。

「一時間だな。しかし、この時間だともっと早く着くかもしれない」とトック。

「都心から離れたところに住んでるんだな、フランク・クックは。何故だ？」

「一人で静かにしているのが好きなんだ。」

九時半頃には、ジェライス・クロスまで進み、暫くしてヒートコンズ・フィールドに出る。ここを左に曲るとテムズ・ヴァレーの方向だ。

「おいトック、何でこのあたりをバッキンガムシャーと言つんだ？」

「俺が知る訳ないだろう。」

「道の反対側を走るのが、お前は、馴れたもんだな。」

「そうさ。こっちを走ると早いんだ。」

「俺がヨーロッパに長くいて、思っているよつたな。何故なんだ。」

「そうなんだらうつ。」車のスピードが上がる。

「ニック」と、長い間の後、トックが聞く。「ここから一番近い空港はどこなんだ。」

「何だつてそんなことを訊くんだ。」

「ここは、さうな場所だ。住むよつになるかもしれない。」

「思ったほど、おかしくないかもしれないぞ。空港は近くだ。ヒースローがある。ここから逆方向にロンドンへ入る途中、シェラード・クロ

スがあったらう。そこを右に曲つて、ウィンザー・ロードを行く。」

「それから？」

「その道をすつと行つて、スロートまで行く。ここで四号線に入れば十分でヒースローだ。」

「思ったより近いんだな」とトックは考える。問題は飛行機に乗つて、それからどこへ行くかだ。ヨーロッパにはいられない。それでは確かだ。アメリカも駄目だ。シヨーが頭に来ているだろうからな。

「会長の家には召使なんか、沢山いるんだらうな？」

「どつしてそう思つた」とトック、逆に訊ねる。

「でかい商売をしているんだらう。だから……。」

「うん。でかい商売だ。しかし家ではやらん。ひどい婆さんの秘書が一人。ビー玉を噛んでいるような喋り方をする女だ。それと運転手。これは庭師も兼ねている。」

「それだけなのか？」

「さつき言つたらう。一人で静かにしたいんだ。ロンドンの事務所には、ひとつきに一回、事務所に来たつて、二三時間しかない。大抵は電話ですませるんだ。さあ、もうすぐだ。」

「河のほとりにあると言わなかつたか？」

「そうさ。随分いろいろ訊きたがるんだな。どつしたんだ、急に。」

「いや、こっちのことだ」と腹の中でトック。

車はもつすでにマー・ロウの郊外に来ている。左に曲ると生け垣のある小道に入る。小道の行き止まりに大きな門。門の両側は高い煉瓦の塀だ。トックは車を降り、左側の壁に埋め込まれているス

ピーカーに近づき、その下に備え付けられている釘を三度押す。大きなベルが三度鳴る。二三分たつて、庭師の服装をしたがうちりした男が現れる。

「ミスター・トッピング」と庭師。「会長には予め伝えてありますか?」

「ああ、ヘンリー、伝えてある。」

「会長にお知らせします。」門の右側の壁にある木の箱から電話を取り、二言三言話す。受話器を置き、何も言わずに門の鍵を外し、開ける。

「有難う、ヘンリー」とトッピング、車を運転して入りながら怒鳴る。殆どすぐに門は閉まり始める。

簡単だとトッピングは言ったが、それでもないなとドックは考える。しかしまあ、やはり簡単か、とモ。

屋敷に並んで厩(うまや)、そしてその前に広い場所があり、灰色のタイムラーが駐車してある。トッピングはその横にフォード・コティナをつける。最近刈られたらしい芝から、いい匂いが漂っている。二人は車を降りる。静かだ。犬はいないなとドックは記憶に留める。

「河が見たいのか?」とトッピング。

「そつだな。あれはの話だが」とドック。

屋敷の後ろには広々とした庭。芝生があり、そのずっと先に確かに河がある。これがテムスか。ロンドンで見慣れた汚れた大きなテムスではない。むしろエイヴォン河といった方が近い。金曜日だ。もつ多くのイギリス人にとっては週末は始まっている。メイドウンヘッド、或はポーンエンドで借りたモーターボートを、水門を次々と越えて河の上流へと走らせている。イギリス人は生まれながらにして船乗りだと誇示するかのようだ。

「うん、いいところだ」とドック。

「さ」とトッピング。

以上、観光客のための話。脱線。この日は陽射しが強かった。そこでドック、サングラスをかける。ところが実はこれは失敗。裏庭からテラスに通じるフレンチウインドウを開け中に入ると、暗いのだ。暗いばかりでなく、冷たい。ドックは鳥肌がたってきた。

トッピング、腕時計を見る。

「まだ二分あるな。坐ろう。」

サングラスをはずし、目をならして、部屋を眺める。広々として厚い絨毯が敷いてあり、美術品が並べてある。足つきの花瓶から重々しい額入りの油絵まで。照明は一箇所だけ・・・隅にある大きなガラス製の箱からくる光のみ・・・だ。

「驚いたな」とドック。「これはみんな本物なのか?」

「翡翠か? 勿論 会長は、世界でも有数の収集家だ。エジプトから追放を食った時、ファルークから買ったものが殆どだ。その頃で4百万ドル以上払ったというから、今じゃどれだけの値打ちか。大変なものさ。」

部屋の向こうの端の扉が開く。非常に痩せた中年の女性がそこから現れる。

「会長がお会いになります」と言っ。トッピングの言った通りだなとドックは思っ。パンを口いっぱい頬はったよつな声だ。

トッピングが前を歩く。部屋に入ってドックの目を奪ったものは本だ。何千という本が、壁の本棚に並んでいる。次に暖炉だ。普通の、石炭による暖炉ではない。ゴウゴウという薪の火だ。その火だけがまた、この部屋の照明になっている。窓はあるらしい。しかし、厚いカーテンで覆われている。そのカーテンの前に、重々しい檜材の机。その上には一枚の書類もない。机の後ろにフランク・クックが坐っている。

瘦せた男だ。髪は白く綺麗に櫛の入ったオールバック。青いジャケット。中心に銀のボタンが並び、両袖にも銀のボタン。しかし、これら全てのは、彼の一つの顕著な特徴を際立たせる小道具に過ぎない。その特徴とは、目だ。それは光っていた。事實は、薪の光を反射している単なる鏡の役割でしかないのかも知れない。しかしその目は、誰もがおそれるこの出来ないものだ。それから眉毛も房々とした、真っ白な、ベン・ガリオンの眉毛そのものだ。まぶたは半分閉じている。そしてそのままじっと動かない。丸々一分間、フランク・クックはじっとドックを見つめている。またたきもしない。その間ドックは催眠術にかかったように突っ立っている。

「坐ってくれ。いや、こつちだ。」フランク・クックの左手が机の丁度真向かいにある二つの椅子を指し示す。声は平坦である。オックス・ブリッジでもアメリカンでもない英語。といって、ヨーロッパ訛りがある訳でもない。ドック、指定された椅子に坐る。この時まで、さらに二つのことに気づく。クックの右手が隠れたままであること。ドックが椅子に坐ると、相手の頭は自分の頭より三十センチばかり高くなっていること。

「ミスター・スマイス、私に会いたいのことだな。何の用です。」
「チャョーガ・ザンビルにある銀の鉱山についてです。」

「それが？」
「鉱山は今、我々の手にあります。百パーセント。」

「それで？」
「あなたと直接取引がしたいのです、私は。」

「どついつい取引だ。」

「まず、カリフォルニア・ファースト・ナショナル銀行は引き下がつて買います。」

「それで？」

「我々はルガーノでの銀行の仕事を続けませう。鉱山の半分の権利はそちらに無償で譲渡します。そして鉱山全体の経営はそちらに任せます。我々は隠れた協力者の地位に留まります。」

「なるほど。こちらに何かを無償でくれると言つたのだな。」
「そつです。」

「しかし、その方法はそちらも無償で何かを取らうとしていることになる。つまり、鉱山の半分の権利をだ。」

「こつちのことではなく、そつちのことを考えてみましょう。現状では、あの鉱山の取得のためそちらはほぼ一千万ドルを出さねばなりません。私の提案では、一銭も出す必要はないのです。」

「あの鉱山の値打はどれだけなのか。」
「多分、一千五百万ドルです。」

「その半分、つまり、一千二百五十万ドルを君は私から取らうとしているのだ。」

「そつです。そつという表現なら、そつになります。しかし、現状でもそちらは一千万ドルの出費をしなければなりません。一千万ドルと一千二百五十万ドルはそう大きな差ではありません。それに、この私の提案を採用すれば、我々は鉱山経営に伴う半分のリスクを肩代わりすることになります。鉱山にはリスクはつきものです。たとえこのイランの銀の鉱山でもです。」

「スマイス、なかなか良い話の筋道だ。非常に良い。しかし、答はノーだ。いや、君の論点に誤った点があるからではない。それは筋が通っている。しかし、私には、仕事をやる上で決して破つてはならない基本原則がある。これは決して破つてはならないのだ。その原則に反するからなのだ。それは何か。知りたいかね？」

ドックは答えない。

「それを言おう」とクック。二コマの間、フランク・クックの身体で動いたものは唇だけである。頭、手、胸、何一つ微動だにしない。そしてその目は、相変らず半分開いたまま、じっとドックを見つめている。「他人と組むことは決してしない。これが原則だ。今のこの話も、相手が誰であるう。相手が君であるうだ。」

ドック、次の台詞を吐くの二秒とはかからない。「私と組むぐらいなら死んだ方がましだ」といついかなるうすねそれほ。「ミスター・スマイス」とクック。「他につけ加えることがないようなら、これでお引き取り願おう。」

ニック・トッピングはドックの右、約一メートル三十センチのところに坐っている。フランク・クックは約三メートル前方。秘書は既に部屋から去っている。両側の壁にはぎっしり詰まった本箱。前方の窓には厚いカーテン。これくらい完璧な防音効果も珍しい。また、庭師がすぐ外の廊下にいるなどと、これもありそこにもない。

と、急に電話が鳴る。フランク・クックは鳴ったままにしておく。ドックから一瞬たりとも目を離さない。ドックもまた睨み返している。トッピング、二人の行動が解(げ)せない。電話をそのまま放つておけず、言つ。

「電話です、会長。」トッピングが口を開いたのはこれが初めて。クックはトッピングを見る。

「出るんだ、お前が。」トッピングが立上る。と、クックの目は再びドックに。非常に微かな微笑が口の周りに浮ぶ。

トッピング、受話器を取り上げ、耳に当てる。四、五秒経たないうちに、その顔に奇妙な表情が現れる。

「ドック、お前にだ。アルバートからだ。」

ドック、立上り、受話器を取りに行く。フランク・クックの右手がほんの少し動く。しかし、いまだに見えないまま。ドック、緊張のあまり五感のはち切れそう。ウワーっと大声を上げそうになるのをやつこのことで抑えている。何故かフランク・クックには全てお見通しの様子なのだ。

ドック、受話器を耳に当てる。聴く。三分間……百と八十秒間……一言も言葉を挟まず。それから、

「分つた、アルバート。聞こえている。用件は分つた。」そして、ゆっくりと受話器を下ろす。

席に戻り、椅子に坐つた時、ドックの身体は何故か縮んで見える。顔は真っ青。両手が震えている。

「悪い知らせのようだな。」クックの目は何事も見逃さない。「ええ。どうやらここへ来たこと自体が、時間の無駄だったよつで44す。」

「相棒が君を裏切つたんだな?」
「ええ、まあそうです。」

「私がついさつき言つた通りだ。他人と組むのはよくない。決していいことはない。」

ここでクックの右手が机の上に現れる。スマイス・アンド・ウエツソン四五口径がその手にある。威力充分なピストルだ。それを机の上に置く。

「いずれにせよ」とクックは続ける。「君の思惑は外れていた筈だ。しかし、それを思いついたのは立派なものだ。」

右手が下に下り、引き出しを開け、ピストルをその中にしまつ。そして静かに引き出しを閉じる。

「スマイス、これが終つた時、君と話がしたい」とクック。「君は

トッピングの評価通りの男だ。いや、ずっとそれ以上だ。君とは一緒に仕事が出来そつだ。勿論君と組むという意味ではない。「フランク・クック、突然立上る。そして右手を差し出す。

ドックも立上る。提案された事柄を充分考えた様子。そして、その手をしっかりと握る。

「ミスター・クック」とドック。「あなたの勝ちです。どうやらあなたは勝つのに慣れていらっしやるよつだ。しかし、いつかはあなたにも負ける時が来る。その時が来るまでには、今の御提案、よく考えておきましょつ。」

それからトッピングに言つ。「さあ、さつさと出まよつ、こんなところは。」

トッピング、フランク・クックの方を向く。クック、了承の頷きを与える。

屋敷から出るとドック、眩しくて目が眩む。帰路、ドックもトッピングも一言も言わない。ロンドンへの道のりの半分にまで達した時、やっとトッピングが沈黙を破る。

「ドック、お前、本当にピストルを持って行つたのか。」

「そつだ。」

「馬鹿な奴だ。」

「それほど馬鹿じゃないさ。お前だつて似たようなもんだ。あの電話かなきゃ、次の機会を狙つたらつな。」

「全く気遣ひ沙汰だな、お前も。しかし、会長はお前が気に入つたよつだ。俺の見込み通りだつた。」

抱えている。三時にロンドンの由緒止しい銀行ウィンスロップに、二人は入る。

サー・ロバート・ウィンスロップ本人が、二人を出迎える。相手方は既に来て、二階で待っている。二人が部屋に入つても、カリフォルニア・ファースト・ナショナル銀行頭取ジョージ・フォアマンは立上るうともしない。ドナルド・ラックマンも同様。立上るどころかフォアマンは、ドックとアルバートの存在そのものを無視する。フォアマンがサー・ロバートに「皆さん、お揃いになりましたか？」と訊ねた時、その目は二人の方に向いてさえない。サー・ロバートはもうここに勤めて四十年も経つベテランの銀行家だ。奇行を持つ人間には慣れている。四人の顔を一人一人確かめた後、言つ。

「はい、どうやらお揃いのよつだ。」

それからサー・ロバートは重々しく挨拶を述べる。この度はエス45クロー取引代理店として我がウィンスロップ銀行をお選び下さいまして、洵に有難うございます。三二九年の長き歴史を持つ我がウィンスロップ銀行は、この間に世界でも有名な……また後になって金融界の里程標とみなされるに至る……数々の取引を手がけて参りました。そしてこの度、由緒止しいカリフォルニア・ファースト・ナショナルそしてシリア・アメリカ両銀行のお役に立つ機会に恵まれましたことは、当銀行の榮譽と致すところでございます。後者が由緒止しくないことは、サー・ロバートにとつて全く関心のないことによつてである。

次に両者によつて行われた手続きは、ものの五分とかならなかつた。まずアルバートが厚紙の箱を開け、シリア・アメリカ銀行の、百株を代表する証明書の手束を取り出し、テーブルの上に積み上げる。ラックマンがテーブルのその側に進みより、証明書を三、四枚取り

上げ、調べ、フォアマンに大丈夫である旨頭で合図。そして自分の席に戻る。

「よろしいですか？」とサー・ロバート。

「よろしい」とジョージ・フォアマン。

それからフォアマン、「六〇、〇〇〇、〇〇〇ドルと〇セント」と記入されている一枚の小切手を、ドナルド・ラックマンの助けを借りてフリーケースから取り出す。

「この六千ドルを」とサー・ロバート、手渡された小切手を見ながら言う。「ミスター・ジョセフ・L・フィオーレ及びミスター・アルバート・P・フィオーレ各名の銀行口座に振り込めばよろしいわけですか？」

アルバートが短く「はい」と答える。

「では御両者は」とサー・ロバートは、この会合の最初からテーブルの上ののつていた会計検査報告書を取り上げ振り回しながら、続ける。「当該物件の所有権の変更を条件に、六千ドルの振込みに同意されたという訳ですか？」

「そうです。」フォアマンとアルバートは同時に言う。

サー・ロバートは満足の笑みを浮かべる。「では只今から、当方の事務員一人を呼び入れます。御両者に署名して戴くための書類を作らせてあります。御両者とも、御署名の儀、よろしくごさいませう。ついで。」

「よろしいです。」そして署名がなされる。

ここでサー・ロバートは最後のお祝いの言葉をブツブツと呟く。ドックとアルバートは立上る。会議室のテーブルを回って相手方二人と握手をするつもり。しかしジョージ・フォアマンに近づいた時、彼は急に二人に背を向ける。そこでドナルド・ラックマンも同様に

背を向ける。ドックとアルバートは、それ以上何も出来ず、ただ部屋を去るのみ。

さて、かくして一九六八年五月十三日金曜日を機に、ドック・スマイスとアルバート・フィオーレの銀行家としての経歴はなんとなく不面目な終止符を打つことになった。

「いけ好かない糞野郎だ！」と、ロンバート街でタクシーに乗り込みながら、ドック。しかし、この台詞を吐いた時の彼の顔は、実に満足そうにニタリと笑っている。

三十分後、サー・ロバートのたつての勧めでシェリーを付きあつたジョージ・フォアマンとドナルド・ラックマンは、ウインズロップ銀行を出る。大層華々しいベントリーが、彼ら二人を、それほど華々しくはないロンドン・ヒルトンに連れ帰った時、二人の気持は6
14
多いに高揚していた。

エレベーターに乗った二人の行く先は当然、祝杯を上げるべき最上階のフォアマンのスイート。しかしラックマンは十二階の自分の部屋に途中下車。妻と書類を拾って行くという訳だ。書類はあつたが、妻はいない。何のことはない、書類を持って最上階へ行ってみると、妻は既にそこにいたのだ。ここで再び四人はデビーマー・ジョリー、ジョージ・ドナルド、の関係に戻る。またジョージはパーテンダーの役を演じる。

「ドナルド」とフォアマン。「今回は実に目覚ましい働きだったなあの会計検査報告書は、正に絶品だよ。」

ドナルドは顔を赤くする。何か意味不明のことを呟く。そして、今持つて来た書類をフォアマンに手渡す。「これはすぐに目を通して戴かなければ、と思ひまして。水曜日にフランク・クックと交渉

する時の基礎資料となるものですので。「フォアマン、書類を見る。」「ハハア」とフォアマン。「銀の鉱山だな。」

「ええ。地質学上の精密な調査です。それに、一週間毎の生産量に関する概要がのっています。粗生産量、精製、そして輸送。詳しいことは私にはよく分らないのですが。」

「フランク・クックもこの資料を持っているのか?」

「ええ。例のトップینگが、今週の始めこれを全部コピーして行きました。ミスター・クックはこれを研究するに十分な時間があつた筈です。」

「よし、私も研究だ。 دونالد。今度はな、助けが誰もいない。私一人でやらねばならないからな。」

「それはどういふことか?」

「君がいないといふとき、君には今すぐルガーノに戻つて貰いたい。今日が無理なら、明日までには、君があゝの銀行の支配人だ。月曜日には誰一人それを知らないものはいないよつにする。手始めにやることは、あゝの銀行の名前を変えることだ。そうそう、あゝのいかがわしい連中は、全員辞表を出しているんだらうな?」

「その筈です。彼らも、それからマーヴィン・スキナーという名前の男も、三人ともルガーノのスキナーの家にいます。」

「連中はルガーノからも追いつすんだ。そのスキナーも一緒に。二度とあの銀行の敷居を跨がせやならん。」

「分りました。」

マージョリーの鼻音が、この会話を遮る。「ジョージ、もう仕事の話はお仕舞い。いいわね?」

「分つたよ、マージョリー。」

「でも、一っただけ仕事の話、デビィはね、スイスには行かないの。」

私と一緒にこのロンドンに残るの。そうでしょう?」デビィ。「デビィは頷く。」

「分つたでしょう? ジョージ。あなた方男性軍が仕事の話をしていた時、こつちも忙しかつたのよ。計画を立てていたの。今夜は四人で外へ出るの。「サウンド・オブ・ミュージック」の券、四枚も取つてありますからね。いいでしょう? それから、明日の晩は黒人楽団の歌よ。ほら、白人が顔を黒く塗つて、バンジョーに合わせて歌う、あれ。私つて音楽の趣味、いいでしょう? ジョージ。日曜日はデビィと私、買い物よ。まず最初はハロッズ。それから・・・」

「次から次と計画が述べられる。」

デビィはただそこに坐つて、チビリチビリ、ジンをやっている。「サウンド・オブ・ミュージック」の幕間でもジン。次に続く夕食の時もジン。夕食はトレーダー・ウィックで。マージョリー・フォアマンがここで食べようときかなかつたのだ。ウィックだつたらカリフォルニアにもあるわ。ロンドンのウィックで食べてきたと話したら、カリフォルニアのウィックさん、きつと驚いてしまつわよ。ベッドに入る時間までにデビィはすっかり御酔酩。翌日の朝、土曜日。夫がベッドから起きて飛行場へといつ発つたのか、まるで分らない。正午にデビィ、マージョリー・フォアマンに電話する。私、ちよつと頭が痛くて。多分昨日一日の刺激が強すぎたのですわ。恢復するために、あと二十四時間はじつとしていたのですけど。」

マージョリー、これを了承する。

「よく休むのよ、デビィ」とマージョリー。「ジョージも私も、本当にあなただのこと気に入つているのよ。どつぞどつぞゆっくりお休み。気分がよくなつたら電話を頂戴。いなくなつたら伝言を残しておいてね。」

次の二、三時間デビィは確かに電話をする。しかしマージョリーにはではない。少なくとも十五回、ロンドンの一流ホテルと言われるところに、次から次と。そしてやっとドック・スマイスを突き止める。それから一時間後、ドックはデビィの部屋に現れる。

二人は次の二十四時間中二十三時間をベッドで過す。後の一時間は食つための時間だ。スコットランド産スモークサーモンを大皿に一杯、二十四個のエスカルゴ、それにウーヴ・クリコのマグナム一場、日曜日の朝十時にエスカルゴの料理など出来つゝありませんとルムサービスが文句を言つ。エスカルゴ二個につき一ドルのチップだ、の一声で、即座にガリックの効いた最上級品が出て来る。正午にデビィはマージョリーに伝言をする。日曜日までは私、ちょっと無理ですわ。そしてドックとベッドに入る。

アルバート・フィオーレもホテルの自分の部屋に引き籠つたまま。但し彼の相手は女ではない。電子計算機である。

一八

次の日、つまり一九六八年五月十六日は、銀の相場師にとっては忘れられない日となつた。少数の相場師には良い思い出が伴つ日、大多数の相場師にとっては、思い出したくもない嫌な日として、何故ならこの日が、これまでの歴史で銀の最高値を記録した時だからだ。一オンス二、六四ドル。ニューヨークでもシカゴでも、ロンドンでもニューヨークでもどこでもいい、商品取引ブローカーがいる都市で誰でもいい、投資家の一人を掴まえて、「銀はどつだろつ」と訊いてみれば、その答は決まつて、「上げる」である。

この情勢では、賢明な投資家だけではない、ありとあらゆる野次馬連、一発屋が、アメリカ他いたるところの国において銀で一獲千

金を狙い始める。そして事実、それが成功しているのだ。

アルバートが予告したように、一、二月の停滞・・・一オンス二ドルにまで落ちる・・・の後、値段は上り始めたのだ。二、一〇ドル、二、二〇ドル、二、三〇ドル、ついに二、五〇ドル。これは新高値だ。ウワー。噂が流れる。株など目じやないぜ、これからは商品取引だ。銀を買え。一オンス。一オンス二ドルで二万ドル。仲買人にマージンを十パーセント。二万二千ドル出せば、一オンスの銀が手に入るんだ。高級料理屋で飯を食つて消えてなくなる金じゃないんだ。銀・・・貴金屬・・・が、自分のものになるんだ。しょぼくれた電気洗濯機・・・使っているうちに、だんだん壊れてくる・・・そんなものじゃない。雨のバーミューダ島で新婚の二人が過す休暇・・・ほんのつかの間の楽しみ・・・そんなものでもない。銀の延べ棒だ。未来永劫、目減りのしない真正銘の財産だ。いや、ただの財産じゃない。増えて行くんだ。一月に二ドルで買った一オンス、二万ドルが、五月に二、五ドル。つまり二万五千ドルに膨れ上がっているんだ。たった二ドル手数料を取られるだけで、二箇月に五千ドル。つまり二千ドルの投資で三千ドルの利益。一箇月で利率百五十パーセントだ。一週間に十八と四分の三パーセント、一日に二、六八パーセントの利益率だ。クリスマスまでには大金持だぞ。銀の方でやらなくちゃならないのは、一オンス三ドルになることだけなんだからな。

もし五ドルになつてみる、濡れ手に粟。十ドルになつた日には、もう今の仕事は引退して、左団扇だ。

どつして損なんかするんだ、専門家が口をそろえて言っているじゃないか。世界中で銀が不足していると、消費は伸びて生産は停滞している。貯蔵量が底をついてきている。そつじやないか。値段は上

る一方だ。

アメリカの夢つてやつは、こつこついうもので出来上がっている。アメリカの本質は、まず金を作ることに、次に金で大金を生むこと、それから大金が次の大金を生むことなのだ。この観点から見れば、今やドイツも日本もスイスも、たいした違いはなくなつて来ている。まあいい、外国のことなど、とにかく最初ドカンとあてなきや駄目なんだ。貯金なんか何にもならない。投資信託？ 遅すぎる。それなら保険の方がまだましだ。株？ 株もいいが、大損することがあるからな。国債？ 何を惚(とほ)けたことを言ってるんだ。とにかく、最初のドカンという大当たりが必要なんだ。何千が何万になり、次に何十万になるつてやつがな。それさえ当てりゃ、後は矢でも鉄砲でも持つて来いってんだ。こちとらはもう、大金持ちなんだからな。

これが有象無象の連中が考えた夢だった。そして最後には銀行を襲つよつになる連中の。しかし、労働者連中のやることはこれ止まりだ。教育のある人間はやるのが違つ。まず自分の頭を使う。自分の受けた教育を生かすことを考える。「コネを利用する。自分の立っている場所の見極めをつける。自分のよつて立つ基盤の評価をはつきりさせる。ブローカーを呼ぶ。そして利鞘(りざや)を稼ぐのだ。商品取引所でこれを実行する。大豆に対して、小麦に、冷凍オレンジ・ジューズに、ベニア板に、豚の内臓に。投資の世界の外の範囲で研究を怠らないのだ。とてもとても、単なる労働者の身分で出来ることではない。歯科医、航空機のパイロット、IBMのセールスマン、マクドナルドのフランチャイズ店所有者、ぐらゐの地位で初めて出来ることだ。

そして、一九六八年の春、世界は沸き立つた。今は銀を買つてお

け、明日の日はお前のものだ。虫歯になつても治療する医者がいない。航空会社のダイヤは乱れればなし。コンピュータは配線ミス。ハンバーガーは玉葱抜きだ。銀の価格でアメリカ中が催眠術にかかつてしまった。二セント上昇。一千ドルの儲けだが、これは手数料の分。それから十セント上昇。一万ドルの純益だ。それもたった一日で。この儲かった一万ドル、そっくりそのまままた銀の買いだ。また儲かれは、またつき込んでやる。このいつとかが勝負だ。後は左団扇、楽な人生が待っている。

銀の価格さえ上つてくれりゃ、文句はないんだ。そして確かに上つた。そしてもう一日。それから、落ち始めたのだ。

買い一辺倒の銀の相場の終りの時は、五月十六日午前九時きつかりに、ロンドンで始まった。その日のウインスロップ銀行の最初の49客はアルバート・フィオーレとドック・スマイスだった。二人の用件は普通でなかつた。六千ドル引き出したいというのだ。それもすぐに。二人は十時十五分まで待たされる。ロバート・ウインスロップのおでましを待たねばならない。こんな大金の処理の決定は、頭取自らが行う必要がある。金額に応じて高い地位の人間が処理するのが商業銀行の決まりだ。要求が頭取にたいして改めて言われる。何の躊躇もない。「よろしうございます」という答。勿論、現金で渡されるのではない。世界中のいろいろな銀行から電報為替で送られて来るのだ。バハマから、ケイマン島から、リヒテンシュタイン、ルクセンブルグ、リベリア、ベイルト、シンガポール、ホンコン、から。時差の違い、或は銀行の対応速度の差などの理由から、アルバートはこの日のつぎに金を使つことは出来ない。名義は父親のジョー・フィオーレの、實質は他の仲間との合同の所有になつてゐるもの

だが・・・これを使えるのは、あくまで五月十七日だ。しかしアルバートとドックは次の日に動くための下工作はやっておく。商取引所四箇所に廻る。その四つとも、ロンドンとニューヨークに直通の通信回線を持っており、そのうちの二つはシカゴ、もう二つは中東、極東に直通回線を持っている。その四取引所は、共通した点がある。それは、フランク・クック、或はその関連会社とは取引がないということだ。

次の日、五月十七日は暖かくて気持ちのよい日だった。イギリスで生きていて本当によかったと感じられる日だ。十一時に、ドック・スマイスとアルバート・フィオーレは、カールトン・タワーでタクシーをひるい、シティーまで行く。ウィットントン・アヴェニューまで言ってくれ。ええっ？ ウィットントン？ 聞いたことがありませんね。イギリスのタクシーの運転手を困らせるのは大変に難しいというのが定評だ。その通り、暫くすると思ひ出す。そうか、コーンヒルからリーデンポロー市場へ抜ける短い通りだ。

ウィットントン・アヴェニューは、着いてみると、イギリスの街角でも有数の綺麗なところであることが判明する。ちょっと狭い道、野外の物売りのテント、オールド・ファッションの店、野菜と果物を売るクック・パーヴェイヤー、肉屋のフィルターズ、魚屋のアッシュダウン・オイスターズ、一杯飲み屋のラム・タバーン。非常に奇妙なことに、こいつら種々の店のある町の真ん中に、高い柱に掲げられている看板がある。これはリーデンホール市場の規則を載せたもので、その二十条には次のように書かれている。

当市場の監視人は、以下の如き人物をこの市場に発見した場合、速やかにその人物を当該市場から退去せしめるべし。また、この監

視人の退去命令に従わざる場合、当該人物は、五ポンド以下の罰金を徴せられるものとす。その人物とは下記

一、賭け事をして居る者
一、賭け事を目的として当市場に立ち寄り、たとえられる充分な理由がある者

一、怠け者

一、当市場の規律を乱す者

一、ならず者

一、浮浪者

以上。

奇妙だというのは何故か。それは、この看板から二十ヤードも離れていないところに、ロンドン金属取引所 (London Metal Exchange) があるからだ。ここでは、世界で最も洗練された博打打ちがその腕を競っているのだ。その掛け金たるや、ラスベガスで最高金額をはるような大元締の博打打ちでも脅えてしまつほどの金額なのだ。何百万、何千万ポンドの金が、毎日世界の金属に対して賭けられる。銅、錫、鉛、亜鉛、そして銀に。その博打打ちの間で買入人気が強ければ価格は上り、売入人気が強ければ下る。一九六八年五月、一番人気の金属は勿論銀だった。そして、勿論殆どが買入に打っている。

ロンドン金属取引所は、そこにたむろする博打打ち達の間で誇らしげに語られる通り、古くローマ時代の商業市場だった場所にある。正面玄関の上方にデカデカと「ロンドン金属取引所」などと看板があると、思つと大間違い。扉の隅のところに小さな金属の札がかかっているのみだ。訪問者は秘書課の事務員によってチェックされる。

取引所の職員の見解が必要で、紹介者の名前も記載される。

ドックとアルバートの訪問は、非常に慎重になされ、紹介者の記載も省略することが出来た。一人は単なる客として来たことになる。

ここでの銀の取引は、午前の部が二回、そして午後の部が二回行われる。午前の部の最初が、一二時〇五分から一二時一〇分までの五分間。次が一二時〇〇分から一二時〇五分までの五分間。午後の取引は、最初が一五時五五分から五分と、一六時三〇分からの五分。

この間、売りと買いの人間が、声を限りに、全く気違いそのものの形相で値段を怒鳴りあう。まず、午前の部の二つの五分間が過ぎると、二人からなる委員会により、「公正な」この日の朝の銀価格が決定される。そして、銀はその所有者を変更する。ここで決定した銀価格が、その後、午後の取引までの世界の銀価格の基準となる。つまり、この価格が、ロンドンからニューヨーク、シカゴ、サンフランシスコに波及し、次に香港その他へと伝わって行く。

この日の第一取引で、銀は最後の上昇を示した。理由は簡単だ。ある仲買人が、売りに出ているあらゆる銀を一人で買い占めたからだ。居あわせている仲買人達は勿論その男の正体を知っている。フランク・クック・グループの代表だ。価格は二、七〇ドル。次の取引の終り値は多分二オンス三ドルだろつというのが、専門家達の一致した意見だった。

しかし、一二時の取引で、売りに出る男が四人現れた。この四人は現物の銀を売っているのではない。先物の銀の売りである。そう、かなり先の売りである。しかしなにしろ売りには変りがない。午後の取引になった。一五時五五分、そして一六時三〇分。成り行きは全く変らない。フランク・クックの仲買人が買い手、そして四人の新顔が売り手。価格は同じ位置に留まる。二、七〇ドルだ。

次の日には、午後の第一取引で、なんと二、六〇ドルに下ったのだ。

ドックとアルバートはその日も取引所の隅に陣取って、静かにこの成り行きを見ている。この二、六〇ドルに収まった午前の第一取引を告げるベルの音が鳴る二度一二時〇五分に、また別の客が現れる。ニコラス・トッピングだ。入るや否や、真直ぐドックの方に進みよる。

「貴様ら二人、ここで何をやっているんだ。」

「言葉に気をつける。貴様らとは何だ」とドック。

「なら、お前ら、だ。お前ら、聞いたんだろつ、あの話を。」怒りに震えながらトッピング。

「あの話？ 何のことだ。」

「おいドック、知らぬ顔の半兵衛を決め込もうたつたつて、そうはいかないぞ。」

「トッピング、俺は何も決め込んだりはしてはいない。どつしたつて言つんだ。」

「あの食わせ者の野郎が、こつちを引つ掛けやがったんだ。」

「誰だ、食わせ者とは」とドック、用心しながら訊く。

「あの糞忌しいカリフォルニア銀行の糞馬鹿頭取の奴だ。」

「頭取が何をしたつて言つんだ。」

「例の銀の鉱山の買収については、今朝最終結論を出した筈だ。今朝の十時にだ。そつたろつ。」

「まあお前がそう言つたらな、ニック。」

「あいつ、またぐちゃぐちゃ言い出したんだ。ミスター・クックとの合意をひっくり返して、あの二倍欲しいと言つて来たんだ。二倍だぞ！」

「そいつはお気の毒だな。」

「お気の毒だと？ お気の毒ですむよつなごじやないぐらい、お前が一番よく知っているんだ。こっちは銀の取引に首までつかって勝負しているんだからな。それも買いで勝負だ。売りに出て来た奴がいて、お蔭で毎日、大量の銀を買わされているんだ。」

「そつらしいな。」

「それにな、その売りに出ている奴らの正体が、貴様らだつていう情報を得ているんだ。こっちは。」

「ほほう、情報が。何の根拠がある。」

「お前達の片棒を担いでいる仲買人の名前を言つてやろうか。そいつらがこの二十四時間、お前達のためにどれだけ使つたかも筒抜けなんだぞ。」

「驚いたなニツク、イギリスつて国は、こんなに墮落したのか？ ガセネタで人を脅すとはな。全く呆れ返つて物が言えない。」

「まあいい。だがな、どうも俺に分らないことがある。お前達どうやって知つたんだ。」

「知つた？ 何を。」

「カリフォルニアのあの糞つたれ銀行が、こっちに背負い投げを食わせたつてことをだよ。」

「そんな情報はこっちには入つてない。」

「じゃ、何なんだ。何故気違いのように売りに出ているんだ。」

「それは値段が下ると思っているからぞ。」

「何故下る。」

「これから数箇月、大量の銀が回るよつになるからぞ。いや、数箇月じゃきかない。何年もだ。」

「例の銀行がイランのあの鉱山をフル稼働させて、銀を出回らせる。」

そいつを全部フランク・クックは買わざるを得ない。そいつ筋書きになるを見ているんだな。」

「いや、その筋書きじゃない。」

「じゃ、何だ。」

「それはお前には言えない。フランク・クックにだけ話せることだ。」

「分つた。いつ。」

「今夜だ。」

「何時。」

「そつたな。八時。」

「どこぞ。」

「フランク・クックの屋敷だ。銀行は関係ない。個人的な話だ。」

「よし、じゃ、七時に迎えに行く。」

「いや、こちらから車で行く。住所はもう分つている。今度は行くのは俺一人じゃない。」

「アルバートもか。」

「うん。それに、もう一人。」

「変な真似をするんじゃないぞ。」

「心配するな。だが、ミスター・クックには予め話しておいて欲しいことがある。」

「何だ。」

「今度ばかりはミスター・クックといえども、組む相手が必要になる筈だ、と伝えて欲しい。生涯初めてのことでしょうが、とお互いの利益のためなんだからと。」

「分つた。伝える。」

アルバートとクックはもう暫くロンドン金融取引所に残っている。

後の取引で、またまた売りに出る。大量の銀取引だ。全て売り。こ

の目、終り値は二、五のドルまで下る。

この日の夕方までに、計算上での彼らの利益は、百万ドルを超える。ドックがホテルに帰って、計算機と首っ引きで十分間計算した結果がこれだ。

カールトン・タワイ・ホテルのドアマンが、アルバートとドックのためにシルヴァー・クラウドを予約してくれる。バッキンガムシャーへ行くための車だ。一行は少し遅れて出発する。トッピングに、来ると予告した第三の人物が、空港から着いて着替えるのに手間取ったためだ。

クックの屋敷へ着くまで、ほぼ一時間かかる。ニック・トッピングが屋敷の前で車を待っている。そこから直接屋敷へと導く。フランク・クックは客を待たせるようなことはしなかった。四人が居間に入り、まだ坐らないうちに、図書室に通じる扉が開き、フランク・クックが現れる。そしてすぐドックに言う。

「ミスター・スマイス、客人の紹介は君にやって貰おう。」

「分かりました。これがアルバート・フィオーレです。父親のことは御存知ですね?」

「始めまして、アルバート。」

「そしてこちらは、イランからやって来たアーガ・ファードシ、我々の銀行の共同経営者です。」

アーガはフランク・クックの手をしっかりと握る。

「どうぞ、お坐り下さい、ミスター・ファードシ。」

そこで全員着席する。飲み物は出ない。

「さうそくだが、ミスター・スマイス、どうやら、私は間違いをやってしまつたらしい。銀の鉱山に対する君の申し出を受け入れておくべきだった。この間に起つたことは、ミスター・トッピングから既

に聞いていると思うが?」

「ええ、しかし、あの決定は過りではありません、全く。」

「過りではない? しかし、今となつては、法外な値段でしか、あの鉱山は手に入らない。もし手に入らなければ、銀は大量に産出され、市場に溢れ、こちらは相対的な損害を被(こうむ)る。銀の価格は崩れるだらうからな。今の私の立場は酷くまずい。鉱山を買わねば大損、買えばまた大損なのだ。」

「必ずしもそつとは限りません。」

「そつとすれば大変面白い。理由を聞かせて貰えないか。」

「ええ、これにはちよつとユーモアのセンスが必要なのですが。」

「それはあまりないといつ評判だが、まあいい、話してみてくれ。」

「どうやらミスター・クック、我々はひどくインチキな話で担(か)つ(が)れたらしいんです。」

「担(が)れた?」

「ええ、ペルシャには、銀の鉱山などないといつことなのです。今もないし、かつてあつたことも全くないと。」

「何ていふ話だ」とクック。その響め面は、この話は何の冗談も見い出せないといつことを示している。「私はそのない鉱山を買おうとしていた。一億ドルをただで持つて行かれるところだつたんだぞ。その話は本当なんだな。」白いハンカチを出し、額を拭(ぬ)つ。

「本当です」とドック。

「銀は全然ないんだな?」フランク・クックは怒っていた。無理もない。しかし、その目に急に光が出て来る。ひよつとしたら、いつものこの難局も乗りきれられるかも知れない。安心の目の光だ。

「銀が全然ないといつではありません、ミスター・クック。私は銀の鉱山がないといつたのです。」

「もう一回頼む。目の光が消える。」

「実に簡単なことです。ここに居るファードーンが、我々みんなを担いだのです。彼にはどうしても、銀の鉱山をうち上げる必要があつた。それで、それを拵えたのです。そして我々みんなをその話に巻き込んだのです。アーガ、後はあなたが説明した方がいい」ドックがアーガの方を見た時、その目には尊敬と友情の気持が籠められている。

アーガ・ファードーンは咳払いをする。

「実は」とアーガは始める。そして一回り、闇き手全員の間を見る。

「私はただの密輸商に過ぎないのです。インドに金を持って行き、銀を取つて来る。金を高く売り、銀を安く買つて来る。最初は取るに足らない規模でした。しかし、世界的に銀の価格が上昇して来たため、インド人で銀を売るという人間が急に増えて来たのです。」

金と交換したためです。この三百年間、貯めに貯めたインドの銀が、今では三十億オンスにもなっているのです。これは世界がよつてたかつて使つても、二十年や三十年で使いきれぬ量ではありません。さてその密輸ですが、私がこの仕事をやらなければ、どうせ他の誰かか思いついてやりだすに決まっています。私は他の人間にこの仕事を取られたくない。しかし残念なことに、私には資金が十分でなかつた。拡大して行くこの商売を維持して行くためには、どうしても資金が必要です。膨大な量の資金がです。まず最初に、金を手に入れる必要があります。勿論現金です。次にドバイからインドに行くジエルバ船の連中に金を支払わねばなりません。これも現金。それから、買つてきた銀を倉庫に入れておかねばならない。これも現金。勿論インドの税関に賄賂として払ふ金があり、これがまた現金……」

「ここでフランク・クックが遮る。「そこは分つた。次の話を。」

「銀行は密輸に対しては資金を出してくれませんが、それがどんなに率のよいものでも、です。そこで、銀行がウンと言つてくれる何かの仕掛けを作る必要が出てきたのです。私の仕掛けは、銀の鉱山でした。全くの荒唐無稽な話ではなかつたのです。スサの近くには鉱山があつてしかるべきだつたからです。考古学者、聖書、それに地質学者も同意見です。しかし、あるべき物はそこにはなかつた。それで私が、言つてみれば「その状況を拵えた」訳です。しかし私は「ない物があると云つ」点では人を騙した訳ではありません。私は共同経営者に約束した銀は、ちゃんと拵えて見せたからです。事実、約束した以上の銀をです。ただそれは、ベルシヤから、或は、地の底からの銀ではない、インドから、ジエルバ船の船底からの銀だつたのです。」

「なるほど」とフランク・クック。「少なくとも、あなたの言つてゐることは分りました、ミスター・ファードーン。しかし……」
と今度はニック・トッピングの方を向く。「君に分らなかつたといふのが解せないな、トッピング。」

ニック・トッピングは断固として答える。「それはこの人が言つた通りの理由からです。全く荒唐無稽な事ではないからです。それに私は、実際にドバイから銀が入つて来るのを、この目で見てゐるのですから。私だけではない、カリフォルニア銀行の例のラックマンも目撃してゐるのです。イランから来る前、それがインドの銀だつたなど、どうしてこの私に想像出来ませうか。それに、それを裏付けるスイスで手に入れた科学報告書だつて読んでゐるのです。銀の分析結果、地質学者の研究、銀埋蔵量に関する推定、一週間に精製出来る銀の量……」

「分った、トッピング。君の言う通りだ。」

「それに、会長自らこの報告書を信じこまれた筈です」とトッピング。

「そつ、私も信じた。ミスター・ファードシ、この報告書は誰の手になるもののです？」

「ロン・ハワードというローデシアの鉱山技師です。」

「今、彼はどこに？」

「アフリカに帰りました。」ここでファードシに関する話題は全て終る。

「しかし、銀の鉱山がないという話は、相変らず奇妙な感じだ」とクック。そして四人を見回しながら、「それで、その鉱山に、実際に降りて行った者はいないのか？」

「勿論そんな者は、誰もここにはいない。」

「どのくらい前からこのことを知っていたのだ？ スマイル。」

「先週の金曜日の朝です、ミスター・クック。」

「この屋敷に朝電話してきた、あの時か。」

「そつです。」

「ミスター・ファードシから聞いたのか。」

「いいえ、アルバートからです。」

「アルバートはどつやつて。」

「その話は複雑なものです。辞めていった、シシリア・アメリカ国際銀行の共同経営者がいまして、彼がドバイから電話してきたのです。」

「私のいとこです」と、ファードシ。「シシリア出身の男です。」

「何故？」

「何故シシリア出身かとお訊ねで？」

「違つ。何故彼はアルバートに話したのだ。」

「悪いと思ったからです。それに、ドックが何をしでかすか、それが恐かつたとも言っています。」

「フランク・クックは頷く。「ドックは殆ど、しでかすところだつた。その君のいとなる人物に私は借りが出来ているようだな、ミスター・ファードシ。しかし、この話題は、当面の問題からちょっと外れている。元に戻そつ。現在君の、ドバイにおける銀の「産出高」はどのくらいなのかね。」

「毎月約五百万オンスです。この夏には、これを倍にすることが出来ると考えています。勿論そのためには、運転資金も倍増する必要がありますから、今では私と妹だけでなく、いとも協力者になっていますから、そして、いここが口をきいてくれて、この二人にも……」

「とドックとアルバートを指さし、「協力を求めていますから、事情はすっかり好転しています。アルバートのこれに対する計画も、なかなか立派なものなのです。」ファードシは微笑む。

「うん」とクック。「アルバートの計画はたいしたものだろう。私がこの何箇月かで、やっと築きあげた銀の高値相場を、あつという間に崩すくらいだからな。」

「それは違います、会長」とアルバート。「あの価格崩しは、会長との、この会談を可能にするための手段だったのですから。そつでもしなければ、会つては下さらなかつた筈です。」

「図星だ。それで、この会談の目的は何なのだ？」

「我々の銀市場に対する計画が成功するようによ、これが目的です。」

「君達の計画とは何なのだ。」

「我々は暫くシヨートで行こうと思つています。平均一オンス一四ドルで、一億五千万オンスを売る。六十億ドルの売り、マージンは一〇パーセントで六千万ドル。つまり六千万ドル投資しようとい

う計画です。」

「そして、君達の銀が出回って、銀が安くなる。半額。つまり、二〇ドルにまで下る。一オンス、二〇ドルの利益を狙うという訳か。」

「それほど樂觀視してはおりません。精々多くて一オンスドルの利益です。これで我々としては充分です。」

「さっきの二つらの間にはまだ答えていないぞ。この会談の目的は何なのだ。君達の計画が成功するためには、今の話を私に決して話さないというのには正しい戦略のように思うがね。銀の買手は私及び、私の関連会社なのだ。そして、商品取引とはゼロサム・ゲーム。つまり、誰かが儲ければ、誰かが損をしなければならない。君達が儲ければ、この私が損をするのだ。その損をする男に、この話を出るだけしないでおくというのが、君達の取るべき立場の筈だぞ。」

「ええ、そうです。しかし我々は、会長がそう長くは買いの立場に留まっていられないだろうと見越しているのです。あのイランの鉱山さえ閉めておけば、銀は出てこないだろうと思いきや、どんどん出て来るのですからね。あの鉱山の存在を怪しむ最初の人が会長の筈です。」

「おやおや」とクック。「忘れていたが、あのカリフォルニアの銀行はえらいことになるという訳だぞ。」

すぐにアルバートがクックの言葉の言葉を遮る。「そうです、会長。しかし、その話はまた後ほどに。さて、鉱山の存在と銀の産出に何の関係もないと会長がお分りになった時、フィードーシの銀のからくりもすぐ発見されてしまつてしよう。インドからの無尽蔵の銀。価格は崩れる。すぐに会長は、シヨーに戦略を転じられる筈です。売りに出て、損失を最小に留めようといはなれぬ。」

「そうだ。その通りだろうな。私のやることは。」

「それでは困るので、私達はやって来たのです。何故困るか。それは、我々のような大きなグループが二つとも売りに回れば、銀はあつという間に値崩れするからです。そこで、二億五千万オンスもの銀を抱え込んだ我々の逃げ道はなくなるでしょう。会長の方もです。値下げはゆくりと、何箇所もかけて、いや、出来れば何年もかけて、行わなければなりません。何故なら、商品取引はゼロ・サムของเกมだからです。我々は、この取引で損をする人間を充分に確保しておかなければいけない。そのために私達は、会長に会いにやつて来たのです。我々ドバイからの銀を支配するグループ、それに、銀の産業では確固たる地位を既に築いている会長のグループ、この二つのグループが手を握るべきだと申し上げるために。」

「どつ手を握るのだ。」

156

「銀の投資家達の心理をファイオリンを奏するように操るのです。現在の状況では、まずドバイの倉庫にある銀を吐き出して売りに回ります。勿論その現物の出所を明かさずです。小さなパニックが起きます。投資家達は、銀が世界中で不足しているという情報は怪しいと思ひ始めます。どこかで誰かが、莫大な銀を保有しているのではないかと、すると我々も売りを止めます。会長の方も止めるのです。そしてまた、世界における銀の不足が長期的に見て必然であることを印象つけます。投資家は戻って来ます。以前損をした分まで取り返そうと買いに回ります。これで我々……つまり、ドバイグループと会長グループ……は、彼らの買いに合わせて少しづつ売って行くのです。そこでまた、パニックが起きる。連中は疑い始める。……これを繰り返すのです。」

アルバートは続ける。

「しかし、何と云つても、我々の成功のために決して外してはならないことは、次の二つのことです。一つは銀の現物を我々二つのグループでどれだけ市場に出すか、きちんとおさえること。二つ目は、売り取引の過熱を我々二つのグループで調節すること。これが出来れば必ず成功します。何故なら通常、商品取引の投資家達は、自分が売買している商品の現物を見たことなどない。ところがこつちは現物を見ているだけでなく、現物の出入りを制御出来る立場にあるのですから。この取引は今世紀最大の、そして今世紀最長の売りの勝負になる筈です。そして我々の得る利益は、それぞれのグループで、一億五千万ドルに上ることになります。」

「なかなか良い計画だ、アルバート。しかし完璧ではない。もし失敗したらどうする。ドバイから市場に送り込む銀が、価格を充分に落しきれなかつたら。そして私の倉庫から、手持ちの銀をはたいて、まだ下らなかつたら。売りで勝負している我々は、莫大な損失を被ることになるぞ。これは昔からある、例の「売りの罠をしかけて、自分でそれにひっかかる」というやつだ。」

「その可能性はあります、確かに。どんな計画でも、完全なものはないのです。しかし、もし会長がこの計画に一枚加わって下されば、我々は勿論喜んでこの賭けに身を投じます。ドックの見立てでは、僭越ですが、会長はこの種の勝負に打って出ることを好まれる人だと判断しています。」

「少なくとも二日間、部屋は沈黙に包まれる。全員の間はフランク・クックに注がれている。ついにクックが口を開く。

「ドックの見立ては正しい。この勝負は気に入った。世界中の銀の使用者は知らず知らずのうちに我々の味方になってくれる筈だ。連中は銀が安ければ安いほどいいんだから。それから群小の投資家

の奴らを買ひ気分を酔わせるように……つまり、世界全体で銀の不足は避けられない趨勢なのだ……信じ込ませる。これはつまり行く。少なくとも二年は大丈夫だ。私が知っている銀関連企業の連中に、銀不足の話をしてやることにしよう。そうすればこの取引での成功が保証される訳だ。」

「これで私達がここへ来た理由は明らかですね」とアルバート。そして、クックの返事を待たずに付け加える。「このアイディアは、実はドックがこのひととき考えた末に出て来たものです。会長グループと我々とは利害を共にしているのだ。買ひ気分を起させては、こちらの銀を高く売りつけるといふ、その手段も全く同じ。それなら我々が争つのは損ではないか。何故なら……ああ、この後はドックに任せます。」

ドックの出番だ。「会長、もし我々のことをそちらの第一の仲間と見て下さるならば、我々は本当に光榮に存じます。」

フランク・クックはすぐさま立ち上る。何のためらいもない。ドックの方に進み出て、その手を握る。

「ドック、光榮なのはこつちの方だ。」

これで銀の取引で一儲けしようという群小投資家達の運命は決まった。可哀相に、齒科医、航空機のパイロット、保険のセールスマン、慾の皮のつっぱった末に人達！

しかし、ここで運命を決められてしまったのは、彼ら群小投資家達だけではない。カリフォルニア・ファースト・ナショナル銀行の頭取、ジョージ・フォアマン、そして同じくそのルガーノ支店長に任命されたばかりの دونالد・ラックマンの運命も決ってしまったのだ。この日の夕方遅く、フランク・クックからフォアマンに電話がある。生涯で、この電話くらいフォアマンを当惑させたものはな

い。と同時に、非常な心配がフォアマンを襲う。受話器を置く、フォアマンの妻マージョリーは、ショックを受けて夫を見る。

「ジョージ、あなた一体どうしたの？」

「フランク・クックと交渉中の話が、一挙に御破算になったんだ。」

「相手の戦術じゃない？ ただ、交渉を有利に運ぶために……」

「いや、これは違う、マージョリー。いいからさっさと構わなくてね。」

フォアマンは受話器を取る。ルガーノのホテル二二七号室を呼び出す。

「デビルか。」

「はい。」

「ドナルドはごんだ。」

デビルは答える。それから「何か悪いことでも……」

「いやいや、ちょっと話したいことがあって。」それだけを言い、フォアマンは受話器を下ろす。

二分後にはラックマンが捕まる。

「電話をして下さって嬉しいです、頭取」と、まずドナルド。「ス

ケジュール通りことは運んでいます。譲渡はすべて順調です。スイ

スの銀行所有に関する権利筋にあたりましたが、名称変更については……」

「……」

「いいからラックマン、よく聞くん。イランの例の鉱山に行つて貰

いたい。どうも気にかかることがある。」

「どつどつのことですか？ 気にかかるのは……」

「いっぱい食わされたのではないかと、だ。それもどうでもいい

金じゃない、天文学的なやつをだ。すぐにイランに飛んで、あの銀

の鉱山が本当に存在しているのかどつつか、確かめるんだ。すべし……」

「まさか。御冗談でしょう……」

「これぐらい本気なことは生涯にない。」

「でも、イランには行ったことがないんですが。」

「何を寝かけたことを言ってるんだ。どこにあるかぐらいは知ってるだろう。」

「ええ、それは。」

「じゃ、行くんだ。」

「言葉の問題がありますが。」

「誰かをつけてやる。フライト・ナンバーとアバタン到着時刻を電

報でよこすんだ。後はこちらで手筈を整える。それから、いいな、

ラックマン。あちらで何か分つたらすぐ知らせるんだぞ。すぐにだ。

いいな……」

フォアマンはすぐにまた電話する。今度はロンドン駐在アメリカ

大使館だ。すぐに繋がる。フォアマンは、この大使館に貢献してい

る人物の、上から五十人以内に入っている。「ええ、ミスター・フォ

アマン。我々はクジスタンに領事館を持っております。クジスタン

のクーツラムシャーです……勿論喜んでお話ししますよ……」

ああ、銀行の方がいらっしやる。じゃ、その領事館からアバタンに

人をやりますから……いえいえ、お安い御用です、ミスター・

フォアマン。そのためにあるのですから、領事館なんてものは……」

第三の電話々、サンフランシスコ宛である。カリフォルニア・ファー

スト・ナショナル銀行の法律担当のトップ、スイッド・チェインバー

スの自宅宛だ。スイッドは作ったばかりの国際部に属している。こ

の電話は非常に短いものだった。

「スイッド」とフォアマン。「……」

「どつどつ……」

「……」

「電話では言えない。すぐにロンドンに来て欲しい。」

「分りました。今どこです。」

「ヒルトン・ホテルだ。七、八個、部屋は予約する。」

「七、八個、部屋をですか？」

「そつだ。君だけじゃない、他の連中も呼んで来て欲しい。証券取引の専門家、税金の専門家、従業員の雇用に関する法律の専門家も必要だ。とにかく法律関係の会議が開けるよう、アメリカ、イギリス、スイス、フランスの、この方面の関係者を総動員だ。」

「どつなさったんです、頭取。何か恐ろしく厄介なことのようにですね。何なのです。」

「さつきも言ったぞ、スイッド。電話で話せるようなことじゃない。ただ、私の言ったようにやってくれ。」

「分りました、頭取。」

「二日後、最悪の事態がイランから届く。ファードーシの財産にはトマト、イチゴ、アルファルファ、その他の農産物あり。但し、銀

はなし。銀どころか、ここらあたり誰一人として鉱山の話など聞いたことがない」と、ドナルド・ラックマンはルガーノに帰れと指令

を受ける。追って連絡する、と。

この時までにロンドンのヒルトン・ホテルは、このホテルのドアボーイの数よりも大勢の法律専門家が集まって来ていた。サンフランシスコから二人、ニューヨークから一人、ワシントンから一人、

ロンドンから二人、パリから一人、ジュネーブから一人、

ジョージ・フォアマンの特別室も、これだけ人間が集まると小さかった。フォアマンが事態を要約する。全責声もなくシンとして聞き入る。容易な事件ではない。法律家一人でも考えが纏まらないよ

うな代物だ。九人もいたら纏まるどころではなからう。

イギリスの弁護士がまず口を切る。

「すると頭取、二ついつことなるでしようか。つまり、あなたにスイスの銀行を売却したらアメリカ人は、自分の銀行はイランに、非常に価値のある銀の鉱山を所有していると説明した。しかし、実際にはその鉱山はなかった、と。二ついつことだ。」

「その通りだ。」

「それなら事は簡単ではありませんか。ただスイスの警察に言つて、その連中を逮捕させて、あなたの支払つた資金を差し押さえればい

い。取引はウィンスロップでなされたという話でしたね。」

「そつだ。」

「勿論詐欺がなされている部分は、そのスイスの銀行がイランに銀の鉱山を持っているというところだ。従つて、我々はその鉱山に

関する書類、特にその銀行の貸借対照表における、その鉱山部分の資産金額を確かめる必要がありますが、それが確かめられさえすれば、後は簡単な筈です。」

「しかし問題はまさにそこにあるのだ。」

「説明願います、頭取。」

「この取引の基礎資料は、わが社のドナルド・ラックマンによって作られたシシリア・アメリカ銀行の会計検査報告書あるのみなのが……。」

「ええ。」

「それには銀の鉱山のこととは一行たりとも述べられていない。」

「この言葉に、出席者の幾人かは、当然のことながら、非難の目をフォアマンに向ける。そんな馬鹿な……」

フォアマンは続ける。自分はこれを説明することが出来ない。送られて来た会計検査報告書をきちんとは読んだことがない。私はた

だ、このラックマンの口頭説明を全面的に信頼しただけだ。彼を疑う理由は何一つないのだから。すると貸借対照表には、鉱山相当の資産が何か別の項目で上げられているのか？ 例えば、油田及びその施設として。しかし、どうやらそれをもつた。

「すると」とイギリスの弁護士。「この銀行は、貸借対照表を故意に偽造している。そして我々はその証拠を持っているということですね？」

「いや、それは違つ」と、フォアマン。「我々が持つている証拠はただ、ラックマンの作ったこの銀行の貸借対照表に関する報告書に誤りがあったという点だけなのだ。」

「どついつの意味ですか、それは。」

「前の銀行の所有者は、イランに銀の鉱山があることを確信していた。そしてそれが百パーセント銀行の財産であり、その資産額を貸借対照表の中に何らかの形で反映させていた。私はこの点に関しては、非常に強い確信がある。」

「すると奇妙なことになりますね」と、今度はニューヨークからの弁護士。「ラックマンがこちらの銀行宛の報告書を作る。前の銀行の所有者は、その報告書に誤りがないか、目を通す。その時、鉱山部分の記載がないことに気づいた筈ですがね。」

ジョージ・フォアマンはただ肩を竦める。しかし、だからと言って、前の所有者を相手取って裁判を起すのは難しい。この方向で議論を進めるのはどうも的外しているように思う。明らかに詐欺行為がどこかに入り込んでいるのだが、誰がそれに責任があるのか、実はここに集まるまでに、よく私は考えた。そして、論理的には、ただ一つの筈しかない。私が自分の直屬の部下、ドナルド・ラックマンに騙されたのだ。ラックマンはイランの人間と共謀したのだら

う。何かの具合で、この鉱山がインチキであることを発見し、イラン人達からその口止め料を買ったのだらう。イラン人達は、銀行の前の所有者から相当の金額を受取るようになっていた。そしてその相当の金額は、銀行をカリフォルニア・ファースト・ナショナル銀行に売却した時に入ってくる。従って、その売却が成立するまではラックマンにどついても口を閉じていて貰わねばならない。前の銀行の所有者、イタリアの公爵は、勿論この陰謀に一枚加わっていた筈だ。しかしこのイタリア人、その他前の銀行の取締役達は、今はもつスイスにはいない。この男を連れ戻すのは困難だと思われる。ここでジュネーブからの弁護士が、フォアマンの言葉を裏書きする。

そうです、詐欺の疑いで外国から人を強制引き渡させるのは、殆ど不可能です。各国で、詐欺の定義が異つていますから。そこで、とフォアマンは結論を下す。我々は現実的にならねばならない。詐欺は証明され得る。ラックマンを首謀者にすればよい。出席者の諸君、これに賛成だな？ 全員賛成である。よろしい。するとこの件

で、保険会社から少なくとも千五百万ドルを引き出すことが可能だ。この金額になるな？ サンフランシスコからの弁護士が、これを肯定する。残りの損失は経費として落せるな？ つまり、アメリカ合衆国は実質的に、損失の五〇パーセントを差し引いてくれる計算になる。どうだ？ この推定は、ニューヨークからの弁護士が、その通りだと言ふ。さて、ジョージ・フォアマンが支払った金額は、総額六千万ドル。うち千五百は保険、残り四千五百万のうち、アンクル・サムが引き受けてくれる金額が、二千二百五十万。実質的損失が大変な金額だ。しかしもつと酷いことになつてもおかしくはなかつたのだ。ルガーノの銀行はどつする。こんな筈だはがあつた後だ。

閉鎖するしか手はなからう。売り払うのだ。これでまた一千万ドルは損失が加わるだろう。それが最もよい対策です」とジュネーブからの弁護士。スイスの銀行の権威筋から白い眼をして見られ、世界中のスキヤンダルに巻き込まれるよりはと賢明です。どれぐらいいその噂が続くか知れたものではありません。スイス銀行委員会に釈明する役は私にお任せ下さい。但し、預金者に、一人として損失を与えないと、カリフォルニア・ファースト・ナショナル銀行が保証することが第一の条件。もう一つの条件は、スイスにおける詐欺行為の廉(かど)で دونالد・ラックマンをその罪に相応しい刑罰を与えること。先ほど頭取が言われた、この点をもう一度確認したいのですが、如何でしょう。いや、勿論ラックマンを起訴するつもりだ。

そして次の日、約束通りフォアマンはラックマンを起訴する。ジュネーブの弁護士がその任にあたる。Donald・ラックマンは、中近東から帰り、スイスの土を踏んで五分と経たないうちに逮捕される。その同じ日、ルガーノのシシリア・アメリカ銀行の扉は封印される。スイスの銀行秘密厳守法が実行にうつされ、ジョージ・フォアマンは一個中隊の弁護士連に囲まれて、カリフォルニアへの帰国準備を始める。

ただ一人真実を知っており、且つそれを話したい人物は、デビッド・ラックマンだった。夫の逮捕の翌日、つまりフォアマンがアメリカに帰国する予定の日、デビッドは狂気のように、十分毎にフォアマンに電話をかける。やっとフォアマンを掴まえる。フォアマンは二分間デビッドの嘆願を聞く。そして、「すまないがミスィズ・ラックマン、この件はもう私の手には負えない。私に電話しても全く無意味なことだ。もつこんなことは止めるんだね」と。

マージョリーが夫の電話中傍にいた。夫が受話器を置くときささず言つ。これがこの事件全体の締め括りの言葉だ。「私、あの夫婦って、好きじゃなかったわ。あの女よ、結局、こんなことを夫にやらせるよう焚き付けたのは、」

デビッドの最後の拠り所はドック・スマイスだった。電話で呼ばれてドックは、ヒルトンに行く。二人でヒルトンを出る。しかし勿論 Donald を救つべき手立てがこの二人にあるわけではない。

スイス当局は、この件の調査に二年を費やした。そして Donald・ラックマンに十年の強制労働を宣告した。彼は巨額の……つまり、何千万ドルにも上る金額の……詐欺を行ったのだ。これだけでも罪が十分に問われるべきところをこの詐欺は、銀行に対して、それもともあるつにスイスの銀行に対して行われたのだ。全く許し難い犯罪である。法の許す限りの刑が要求されたのは当然であつた。

これだけでもラックマンには不利な事態だつた。が、それに加え、ラックマンが自己を守るうとして行った陳述がまた、奇妙キテレツなものだつた。第一に、自分の行動は全て自分の銀行の頭取の指示に従つたものだと言張つたのだ。勿論ラックマンはこの申し立てを裏打ちする書類は何一つ持つていない。そんなことをスイス当局が信じる訳がない。ジョージ・フォアマンの地位にいる者が、こんなことに巻き込まれる筈はないのだ。スイスの主力三銀行が、この申し立てが無効であることを直ちに証言する。そしてこの方面からの調査は即座に打ちきられる。第二にラックマンは、これら全ての背後に、億万長者フランク・クックとその使用人ニコラス・トツピングがいるのだと言張。スイス当局は、この二人の調査に乗りだす。しかしこの二人がシシリア・アメリカ銀行及び架空の鉾山に關係し

たという二枚の書類も、一かけらの証拠も発見することは出来ない。即ち、この方面からの調査も徒勞に終る。第三のラックマンの主張は、シリリア・アメリカ銀行の執行部の一人、マーヴィン・スキナーは、プロの偽金造りであり、自分の作った会計検査報告書のもとになった書類は、彼の手になるものだという。スイス当局は、この男の調査も余儀なくさせられる。調査の結果は、確かにマーヴィン・スキナーなる人物は存在する。ロンドンの北西約三十マイルの、ペンなる場所に数匹の犬を飼って住んでいる。アルザシアン犬である。イギリス警察当局の証言によれば、スキナー氏及びその犬達の評判は申し分のないもので、疑わしいところは一切なしと。この三本の調査の結果、ラックマンは精神鑑定が必要があるとの結論。これにかけられるも、不幸なことに結果は「不確定」と。

裁判それ自体は非常に短いものであった。銀行の秘密に関するものであったため、勿論「非公開發審」で行われる。海外の証人は誰一人いない。不要と判断されたからである。ただ一つ、スイス当局が当惑した事は、このような大事件でありながら、ラックマンの共犯者、つまりイラン人及びイタリアの公爵を逮捕出来なかつたことである。二人とも完全に消えてしまったのだ。裁判の面からは、これが全てであった。

買い取られた銀行の清算はゆっくりと、しかし着実に行われた。全てが終るのに約三年を要したのだ。銀行の主たる財産であったイランにおける農業用地は、クエート銀行を通じて中近東のある会社に、予期に反した高い金額で売却された。しかし、折角のこの思いがけない利益も、銀を取り扱っていた商品取引部の、これまた思いがけない大きな損失により食われてしまい、全体としては大きな穴を開ける結果になってしまった。思いがけない損失とは、この銀

行は銀の先物取引の証券をかなり沢山持っていたのだが、清算を担当する責任者達が、これの売りをしぶり、売りの先延ばし作戦を取ったからである。この点は後にファースト・ナショナルの取締役会議で追求されることになったのだが、清算責任者達は勿論、銀が安定な投資であると判断したためである。当然彼らは当時、様々な人物にこの件に関する相談をしたのだが、誰も、銀価格は必ず上るとしか言わなかつた。しかし現実は何故か、その反対の方向に進んだ。その結果彼らは、銀価格が底の底をついた一九七一年十月二十二日、一オンス一、二九ドルの時に売らざるを得なかつたのだ。

第三部 (一九七六年)

エピソード

その銀価格が底をついた十月二十二日を記念して、フランク・クツクは毎年この日に、ロンドンのアスイーニウム・クラブで小じんまりした昼食会を催すことにしている。銀を売りで勝負する戦略は、実に大成功に終わったのだ。一九七二年、第一回の昼食会には、アーガ・ファードーシモジアンフランコムも出席した。しかし、この後はこの二人は出席していない。理由はインドにおける銀収集作戦が完全に止まったからだ。アルバートが予言した通り、金と銀の交換比率は全く変ってしまった。一九六八年あるいは一九六九年のよき時代には、銀一オンス約二二ドル、金は三十五から四十ドル。つまり、金一オンスを手に入れるためには、銀を十七から十八オンス出せばよかった。インド人達は先を争ってこの交換をした。しかしその後、金価格は跳ね上がった。一オンス一七〇ドル或はそれ以上。銀の方は下る一方。一九七〇年代初め、一オンスの金を得るためには、銀

を六〇或は七〇オンス出さねばならなくなった。これでは金銀交換の商売は成り立たない。勿論この時まで、ロンドン銀カルテル（つまりフランク・クックのグループ）は売り取引をとくに終了させていたし、それどころか、最近の動きに合わせて今度は買いに回っていた。何故なら、銀の潜在的不足は、そのうち顕在化することを知っていたからだ。実際、この年、つまり一九七六年のフランク・クックの記念昼食会の日の朝、銀は一オンス六、二五ドルだった。ロンドン銀カルテルはこの段階で、五千万ドル以上の儲けを記録していたのだ。

ドック、アルバート、マーヴィン、それにフランク・クックの昼食はしかし、質素なものだった。アスキーニウム・クラブではそれも致し方あるまい。なにしろここに来る人間の大半は、イギリス国教会の僧正達だし、連中は警沢はいかなる形式においても反対。特に公衆の面前での大食（おおぐら）いには顔を曇める人間達だ。従つてこの四人も、いつも通り、ふやけた三種の野菜のついたラム・チョップのみだ。格式を大切にしたい長い木のテーブル上での昼食なのだが、格式では腹は膨れない。それに話さえはずまない。フランク・クックのマナー帳に、食事中商売の話は厳禁、というのがあつた。食事後一階へ上り、ゆっくりと「コーヒー、コニヤックとなり、初めてこれが話題に出来るのだ。

ニック・トッピングは食事に遅刻する。勿論故意にである。「コニヤックの時間には間に合つ。一階に上つて来る時の顔は、なかなか神妙なものだ。ドックの隣に坐り、クックに会釈。クックが勧める「コニヤック」を受取り、ドックに話かける。

「どつだ調子は？」とニック。

「うん。どつだった、今日の金属取引所は。」

「静かなものだ。デビートはどこなんだ？」

「友達と昼食だ。フォートナム・アンド・メイソンで。」

「友達？ 俺の知っている人間か？」

「うん、まあな。シリーン・シラクーサだ。」

「ああ、そうじゃないかと思つていたよ。」

「何故？」

「銀で今、噂しきりの話があるんだ。」

アルバート、マーヴィンの二人が、おや？ という表情、フランク・クックも半分耳を傾ける。

「実はな」とトッピング。「取引所で今日、妙な話が出てきたんだ。

聞きたいか？」

勿論、全真興味がある。

「例のシリリアの公爵がこの話に登場するんだ。イラン王家出身の誰かと、この公爵は組んでいるという話だ。そしてそのイラン王家の人間の妹と公爵は結婚している。勿論その妹というのは、ダーク・ビューティーってやつさ。この三人が、今週ロンドンにやって来て、共同経営者を探しているというんだ。ただその、共同経営者側からの出資金なんだが、五千万ポンドという金額が提示されている。」

今やトッピングは全員の熱い視線を受けている。

「こんな膨大な資金を何に使うんだ、という質問が出るころだ。

それはな、この三人が二、三年前に、あるイランの農耕地を買収したんだぞうだ。その地所というのは、あるスイスの銀行の公売資産だったぞうだ。ところが、その土地から今世紀最大の銀の鉱脈が出てきた。その場所だがな、クジスタンのチョーガ・ザンビル。スサと言われる場所のすぐ隣なんだ。ここからの話がまた驚きだ。いいか、聖書でスサの記述を読んでみる。ここは、いたるところ銀だ。」

銀また銀たぞ。エステル書を読むとな、「寝台は金と銀で出来ている」とある。分るか？ それで、その聖書の銀がどこから出たか。答はチヨガ・ザンビルさ。金属取引所の連中の噂では、埋蔵量が一億オンスを越えるといつんだ……」

トッピングの話が終わるまで、誰も口をきかない。それから活発なやりとりが行われる。当り前だ。誰もペルシヤの銀の鉱山を見た者はいないんだ。あるともないと結論など出る訳がない。ただ確実なのは、この話が本当とすれば、銀の価格が確実に下るといつことだ。

この話に乗らなかつたのはアルバートただ一人である。何故か。散会する直前にアルバートが説明する。アーガ・フアドーシに僕は三回しか会つたことがないんですけど、二、三年前にテヘランで酒を飲みながら、あの人の好きな詩を教えて貰つたんですよ。聖書にある詩じゃないです、ええ。オマール・ハイヤームです。十二世紀に書かれたものなんですけどね。含蓄がありますよ、これは。

受取るなら現金にする。遠くから聞こえて来る太鼓の音など、あてにはならん。

全頁、納得だ。含蓄どころか、こいつは図算つてやつたぞ。オマール・ハイヤーム、お前は正しい。

しかし、聖書が間違っているだなんて、そんな馬鹿な。

(終)

(題名に関する註 原題は Silver Bears。Bear とごうのは売りに出る人達のこと。反対に買いに出て勝負する人達を Bull という。普通

は強気に出る人が買いで、弱気の人が売り。この本では、売りで儲ける人のことを指している。つまり、原題の意味は「銀を売りに出る人々」のこと。原題を直訳して「銀の熊たち」もどつかと思つたが、結局「銀売りに賭ける」にした。

尚、作者の名前は Paul E. Erdman)